

ジャン・クリストフ

JEAN-CHRISTOPHE

第十卷 新しき日

青空文庫

序

予は將に消え失せんとする一世代の悲劇を書いた。予は少しも隠そうとはしなかった、その悪徳と美徳とを、その重苦しい悲哀を、その漠とした高慢を、その勇壯な努力を、また超人間的事業の重圧の下にあるその憂苦を。その双肩の荷はすなわち、世界の一総和体、一の道徳、一の審美、一の信仰、建て直すべき一の新たな人類である。——そういうものでわれわれはあつた。

今日の人々よ、若き人々よ、こんどは汝らの番である！ われわれの身体を踏み台となして、前方へ進めよ。われわれよりも、さらに偉大でさらに幸福であれよ。

予自身は、予の過去の魂に別れを告げる。空しき脱穀のごとくに、その魂を後方に脱ぎ捨てる。人生は死と復活との連続である。クリストフよ、よみがえらんがために死のうではないか。

一九二二年十月

ロマン・ローラン

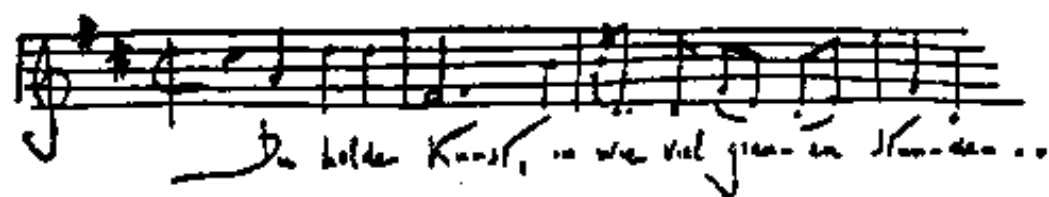
(汝いみじき芸術よ、いかに長き黎明の間……)

生は過ぎ去る。肉体と靈魂とは河水のごとく流れ去る。年月は老いたる樹木の胴体に刻み込まれる。形体の世界はことごとく消磨しょうましまた更新する。そして不滅なる音楽よ、ただ汝のみは過ぎ去らない。汝は内心の海である。汝は深き魂である。汝の清澄な眸ひとみには、生の陰鬱いんうつな顔は映らない。汝から遠くに、燃えたてる日、渡れる日、いらだてる日などが、不安に追われ、何物にも定着さることなく、雲の群れのごとく、逃げ去ってゆく。しかし汝のみは過ぎ去らない。汝は世界の外にある。汝一人で一の世界をなしている。星の輪舞を導く太陽と、引力と数と法則とを、汝は有している。夜の大空の野に煌めく畝うねをつける星辰せいしん——眼に見えぬ野人の手に扱われる銀の鋤すき——その平和を汝はもっている。

音楽よ、清朗なる友よ、下界の太陽の荒々しい光に疲れた眼には、月光のごとき汝の光がいかに快いことであろう！万人が水を飲まんとて足を踏み込み濁らして共同水飲み場から、顔をそむけた魂は、汝の胸に取りすがって、汝の乳房から夢想の乳の流れを吸う。音楽よ、処女なる母親よ、清浄なる胎内にあらゆる情熱を蔵しており、燈心草の色——氷

魂を流す淡緑色の水の色——をしている両眼の湖に、善と悪とを包み込んでいる汝は、悪を超越しました善を超越している。汝のうちに逃げ込む者は世紀の外に生きる。その日々の連続はただ一つの日にすぎないであろう。すべてを噛み砕く死もかえって己が齒をこわすであろう。

私の痛める魂をなだめてくれた音楽よ、私の魂を平静に堅固に愉快になしてくれた音楽よ——私の愛であり幸である者よ——私は汝の純潔なる口に接吻し、蜜のごとき汝の髪に顔を埋め、汝のやさしい掌に燃ゆる眼瞼を押しあてる。二人して口をつぐみ眼を閉じる。しかも私は汝の眼の得も言えぬ光を見、汝が無言の口の微笑みを吸う。そして汝の胸に身を寄せかけながら、永遠の生の鼓動に耳を傾けるのだ。



The image shows a single line of handwritten musical notation on a five-line staff. The notation is written in black ink and includes a treble clef, a key signature of one sharp (F#), and a 4/4 time signature. The melody consists of several measures of music, primarily using quarter and eighth notes. Below the staff, the lyrics are written in a cursive hand: "In holder Kunst, so wie viel ge- en Stunden ..". The lyrics are aligned with the notes above them, with a long horizontal line under the first few notes.

In holder Kunst, so wie viel ge- en Stunden ..

一

クリストフはもはや過ぎ去る年月を数えない。一滴ずつ生は去ってゆく。しかし彼の生は他の所にある。それはもう物語をもたない。物語はただ彼が作る作品のみである。湧き出づる音楽の絶えざる歌は、魂を満たして、外界の擾音を感ぜさせない。

クリストフは打ち勝った。彼の名前は世を圧した。彼の髪は白くなった。老年がやってきた。しかしそれを彼は気にかけない。彼の心は常に若々しい。彼は自分の力と信念とを少しも捨てなかつた。彼はふたたび平静を得ている。しかしそれはもはや燃ゆる荊を通る前と同じではない。彼は自分の奥底に、暴風雨の轟きをまだもっているし、荒立った海が示してくれたある深淵の轟きをまだもっている。戦闘を統ぶる神の許しがなければ、だれもみずから自分の主であると自惚れてはいけなことを、彼は知っている。彼は自分の魂のうちに二つの魂をになつてゐる。一つは高い平原で、風に打たれ雲に覆われている。も一つはそれの上に高くそびえていて、一面に光を浴びてゐる雪の峰である。人はそこにと

どまることができない。しかし下方の霧に冷え凍えるときには、太陽のほうへのぼってゆく道がわかっている。クリストフはその霽もやかけた魂の中で、ただ一人きりではない。友たる音楽、強健な聖チエチリアが天に聴きき入つてる大きな静かな眼をして、自分のそばに居ることを、彼は感じている。そして、剣によりかかつて口をつぐみ夢想している使徒パウロ——ラファエロの画面の中のパウロ——のように、彼はもはやいらだたず、もはや戦おうとは考えない。彼は自分の夢想を築き上げる。

彼は生しょうが涯がいのこの時期において、ことにピアノや室内楽のために作曲した。そういう方面ではより自由に大胆な試みができる。思想とその具現との間に仲介物が少ない。思想が途中で弱つてくる隙ひまはない。フレスコバルデーやクープランやシューベルトやシヨパンは、その表現と形式との大胆さによつて、管弦楽の革命者らより五十年も先立つたのである。クリストフの強健な手がこね上げた音響の捏粉ねりこからは、いまだ世に知られぬ和ハーモニー声こゝろの集団が、人を眩暈めまいせしむるばかりの和音の連続が、出て来た。それは現今の感受性が聞き取り得る音のうちの、もつとも遠い縁故のものから発生してゐるのだ。そして人の精神の上に、神聖なる惑わしを投げかけた。——しかしながら、偉大な芸術家が大洋の

底に沈んでもたらしてくる獲物えものに馴なれるには、公衆にとつては時間を要する。クリストフの近作の大胆さを理解し得る者は、きわめて少数の人々だった。彼の光栄はすべて初期の作品のおかげだった。成功しながら人に理解されないということは、救済の道がないように見えるので、不成功のおりよりもいつそう幸つちいものであつて、その感情のためにクリストフのうちには、唯一の友の死亡以来きざしていた、世間から孤立するというやや病的な傾向が、ますます強くなつてきた。

けれども、ドイツの門戸はふたたび彼へ開かれていた。フランスでも、あの悲壯な暴挙は忘れられていた。彼は自分の欲する所へはどこへ行こうと自由だった。しかし彼はパリにおいて自分を待ち受けてる思い出を恐れていた。そして、ドイツへは数か月間もどつたことがあり、自作の演奏を指揮するためにとどきもどつて行くことがあつたけれど、そこに定住しはしなかつた。あまりに多くの事柄が彼の気をそこなつた。それはドイツ特有の事柄ではなかつた。他へ行つても見出されるものだった。しかし人は他国よりも自国にたいしてはいつそう気むずかしくなるものであり、自国の弱点をより多く苦にするものである。また実際、ドイツはヨーロッパの罪悪のもつとも多量になつていた。人は勝利を得るときには、それについて責任を有し、打ち負かした人々にたいして一つの負債をも

っている。彼らの先に立つて進み、彼らに道を示してやるといふ、暗黙の契約を結ぶのである。勝利者のルイ十四世は、フランスの理性の光輝をヨーロッパにもたらした。しかるにセダンの勝利者たるドイツは、いかなる光明を世にもたらしたか？ 銃剣の光輝をか？

それは、翼のない一つの思想、寛容のない一つの行動、獐^{どう}猛^{もう}なる一つの現実主義であつた。健全なるものだとの口実さえも許されぬ現実主義であつた。暴力と利益、行商人のマルス神であつた。四十年の間、ヨーロッパは闇夜^{やみよ}の中に引き込まれ恐怖に圧倒された。太陽は勝利者の兜^{かぶと}の下に隠れた。消光器を取り除くだけの力のない被征服者らは、多少輕^け蔑^{いべつ}の交じつた憐^{れん}憫^{びん}をしか受くる資格がないとしても、この兜をつけた人のほうは、いかなる感情をもつて遇せられるに相当するだろうか？

少し以前から、日の光がまた現われ始めていた。数条の光が隙間^{すきま}からさしていた。太陽ののぼるのをまつ先に見んがために、クリストフは兜の影から出た。そして先ごろ余儀なく滞留していた国へ、スイスへ、喜んでもどつていった。相敵対してる国民間の狭い境域に息づまって自由に渴^{かつ}している、当時の多くの人々と同様に、彼もまたヨーロッパを超越して息をつき得る一角の地を求めていた。昔ゲートの時代には、自由なる法王の支配するローマは、各民族の思想家らがあたかも鳥のように、暴風雨を避けて休^{やす}らいに來る小島で

あつた。しかるに今では、なんとという避難所となつたことだろう！ その小島は海水に没してしまつていた。ローマはもはや存在しない。鳥は七つの丘から逃げてしまった。——ただアルプス連山が鳥のために残つてゐる。そこには、貪欲どんよくなヨーロッパのまん中に、二十四連邦の小島が残存している。（それもいつまでのことであろうか？）もちろんそこには、旧都の詩的幻影は輝いていない。人の呼吸する空氣に神々や英雄らの香を交じえる歴史は存在していない。しかし力強い音楽が赤裸な大地から立ちのぼつてゐる。山々の線は勇壯な律動リズムをもつてゐる。そして他のどこにおけるよりもここでは、根原的な力との接触が感ぜられる。クリストフがこの地に來たのは、ロマンチックな樂しみを求めんがためにはなかつた。一つの畑地、数本の樹木、一筋の細流、広い青空、それだけで彼は生きるに十分だつた。故郷の土地の穩やかな顔つきのほうがアルプス山の巨人と神との争闘よりも、彼にはいつそう親しみ深かつた。しかし彼は、この地で力を回復したのだということとを忘れ得なかつた。この地において神は燃ゆる荊の中で彼に現われたのだつた。彼はここへもどり來たつて、感謝と信念とのおののきを感じざるを得なかつた。彼は孤独ではなかつた。生に痛められたいかに多くの生の闘士らが、ふたたび戦闘を始め戦闘の信念を持続するために必要な氣力を、この土地でふたたび見出したことであろう！

この国で暮らしているうちに、彼はこの国をよく知ることができた。通り過ぎる人々の多くの眼には、ただ欠点しか映じてはいない。この強健な土地のもっとも美しい特質を汚す旅館の癩病、世界の肥満した人々が健康を買いに來る奇怪な市場たる外国人の町々、皿数のきまつた食事、動物の塚穴の中に投げ捨てられた獣肉の濫費、子馬の声に音を合わせる娯楽場の音楽、退屈して金持の馬鹿者どもを嫌な頓狂声で喜ばせる賤しいイタリー道化役者、または、商店の陳列品の低劣さ、すなわち木彫の熊や箱庭の家やつまらぬ置物など、なんらの創意もないいつもきまりきつた品物、破廉恥な書物を並べてる正直な本屋など——すべて、無数の閑人どもが、賤民の娯楽より高尚でもなければまた単に活発でもない娯楽さえ、少しも見出すことができないで、毎年なんらの喜びもなくぼんやり飲み込まれるそれらの環境の、低級な精神のものばかりである。

そして彼らは、主人公たるこの民衆の生活については、少しも知るところがない。彼らは夢にも知らない、数世紀來この民衆のうちに蓄積されてる精神力と公民の自由との量を、なお灰の下で燃えてるカルヴァンやツウイングリの大炭火を、ナポレオン式共和国がいつまでも知り得ない強固な民主的精神を、制度の簡単さと社会事業の広範さとを、未来のヨーロッパの縮図たる西欧三大種族からなるこの連邦によって、世界に与えられてる実

例を。そして彼らのさらに知らないでいるところのものは、この堅い樹皮の下に隠れてるダフネ、ベックリンの閃々たる粗野な夢、ホドラーの荒くれた勇武、ゴットフリート・ケルレルの清朗な温厚さと生々しい率直さ、偉大なる楽詩人シユピツテラーの巨人族的叙事詩やオリンポスの光輝、俗間の大祭典の澆澆たる伝統、剛健な古木に働きかける春の精気など——すべて、時としては野生の堅い梨のように人の舌を刺すものであり、時としては青黒い苔桃のような甘っぱい空疎な味であるが、しかし少なくとも大地の匂いをもっている、まだ若々しい芸術である。それは、古風な教養を経てもなお民衆から離れずに、民衆とともに同じ生活の書物を読んでいる、独学者らの手になった作品である。

クリストフはそれらの人々に同感をもった。彼らは實際を重んじて外見を飾らなかつたし、ゲルマン的アメリカ的産業主義の新しい外皮の下は、田園的で中流的な旧ヨーロッパのもつとも安穩な特質をまだかなりそなえていた。クリストフは彼らのうちに二、三の親しい友をこしらえた。みな善良で真面目で忠実であつて、過去を愛惜しながら孤独な生活をしてる人だつた。一種の宗教的宿命観とカルヴァン式悲観とをもつて、古きスイスが徐々に消滅するのをながめてる、陰鬱な偉大な魂の人々だつた。クリストフは彼らとめつたに会わなかつた。彼の古傷は外面は癒着していたけれど、きわめて深い傷でまだすつ

かり癒えていかなかった。そして彼は人と交渉を結ぶのを恐れていた。愛情や苦悩の鎖にふたたびつながれるのを恐れていた。多数の外国人中のまた外国人として一人離れて暮らしやすいこの国で、彼が安らかな気持を覚えたのも、多少は右の理由からであった。そのうえ、彼は同じ場所に長くどまることが出来なかった。しばしば居所を変えた。この年若い放浪の鳥には、広い空間が必要であつて、その祖国は空中にあつた……「予が国は空中にあり……。」

夏の夕方。

彼はある村の上方の山中を散歩していた。帽子を手にもって、羊腸たる山路を上つていった。ある曲がり角まで行くと、道は二つの斜面の間の影の中をうねっていた。榛の茂みや椈の木立が道の両側に並んでいた。四方ふさがれた小さな世界に似ていた。前後の曲がり角で、道は宙に浮いてそこで終わつてゐるかのようだった。その彼方には、青白い遠景と光を含んだ空気とがあつた。夕べの静穏が苔の下に音をたてる。涓滴のように、一滴ずつおりてきた。

道の向こうの曲がり角から、彼女が出て来た。黒い服装をして、空の明るみの上に浮き

出していた。その後ろには、六歳から八歳ぐらいの男と女との小さな子供が、戯れたり花を摘んだりしていた。数歩進むと二人はたがいに相手を見てとった。感動はたがいの眼中に現われた。しかしなんらの強い言葉も発せず、驚きの身振りさえほとんどしなかった。彼は非常に心乱されていた。彼女は……唇が少し震えていた。二人は立ち止まった。ようやく低い声で言った。

「グラチア！」

「あなたもここに！」

二人は手を執り合つて、無言のままじつとしていた。最初にグラチアが強いて沈黙を破つた。そして自分の居所を述べ、彼の居所を尋ねた。ただ機械的な問いと答えとで、二人はそれにほとんど耳を貸しせず、手を離れたあとに初めて聞きとつた。たがいにじつと見入つてばかりいたのである。二人の子供がそこへやって来た。彼女はそれを彼に紹介した。彼は子供たちにたいして反感を覚えた。やさしみのない様子で子供たちをながめ、なんとも言葉をかけてやらなかった。彼は彼女のことではいっぱいになつていて、悩ましげな年取つたその美しい顔を見調べてばかりいた。彼女は彼の視線に当惑した。彼女は言った。

「今晚おいでになりませんか。」

彼女は旅館の名を告げた。

彼は彼女の夫の居所を尋ねた。彼女は自分の喪服を示した。彼はひどく心を動かされて、話をつづけることができなかつた。そして無作法に彼女と別れた。しかし二、三歩行つてから、苺いちじくを摘んでゐる子供たちのほうへもどつて、いきなり引つとらえて接吻せつぶんし、そして逃げ出した。

その晩彼は旅館へ行つた。彼女はガラス張りの外縁ヴェランダにいた。二人は目だたぬ片隅かたすみにすわつた。他に人は少なく、二、三の老人がいるばかりだつた。それにたいしてまでクリストフは内々いらだつた。グラチアは彼をながめた。彼は彼女をながめながら、その名前を小声で繰り返した。

「私はたいへん変わりましたでしょう。」と彼女は言った。

彼の心は感動でいっぱいになつてしまつた。

「あなたは苦しみましたね。」と彼は言った。

「あなたもそうでしよう。」と彼女は、苦悶くもんと情熱じやうねつとに害された彼の顔をながめながら、憐れみの様子で言つた。

二人はもうそれ以上言葉が見つからなかつた。

「ねえ、他の所へ参りましょう。」と彼はちよつとたつてから言った。「二人きりの場所でお話することはできないんでしょうか。」

「いえ、ここにいまししょうよ。これでけっこうですわ。だれが私たちに注意するものですか。」

「私は自由に話せません。」

「そのほうがよろしいのです。」

彼にはその理由がわからなかった。あとになつて彼は、その会談を頭の中でくり返してみたとき、彼女が自分を信頼していなかったのだと考えた。しかし実は、情緒的な場面を彼女は本能的に恐れていた。たがいの愛情が不意に起こつてくるのを避けようとしていた。かつはまた、自分の内心の動揺の貞節さを失わないために、旅館の客間の中で不自由な親しみを結ぶのを好んでいた。

二人はしばしば口をつぐみながらも低い声で、自分の生活のおもな出来事を語り合つた。ベレニー伯はくしやく爵は数か月前ある決闘で殺されたのだった。クリストフは彼女が伯爵といつしよにいてあまり幸福でなかったことを悟つた。彼女はまたその長子にも死なれたのだつた。彼女は少しも苦しみを訴えなかった。話を自分のことからそらして、クリストフの

身の上を尋ねた。そして彼の苦難の物語に、やさしい同情を示してくれた。

諸方の鐘が鳴った。日曜の晩だった。生活は休止していた……。

彼女は彼に翌々日また来てくれと言った。つぎの再会を彼女があまり急いでいないのが彼には辛かつた。彼の心のうちには幸福と悩みとが交じり合った。

翌日彼女はある口実のもとに、彼へ来てくれと手紙を書いた。その平凡な文句にも彼は非常に喜んだ。彼女はこんどは自分だけの客間に彼を招じた。彼女は二人の子供といっしよだった。彼はその子供たちを、なお多少の困惑と多くの情愛とをもってながめた。そして姉娘のほうは母親に似てると思つた。弟のほうはだれに似てるかを問わなかった。二人はこの土地のことや天気のことやテーブルの上に開かれている書物のことなどを話した——が二人の眼は他の言葉を語っていた。彼は彼女にもっと親しく話せるつもりでいた。そこへ、彼女と旅館で知り合いの女がはいつて来た。グラチアがその他人を迎える愛想のよい丁寧さを彼は見た。彼女は二人の客の間に差別を設けていないらしかつた。彼はそれが悲しくなつた。しかし彼女を恨みはしなかつた。彼女は皆でいっしよに散歩しようと言ひ出した。彼は承諾した。グラチアの友の女は年若くて快い人柄ではあつたが、それといっしよなのが彼には嫌だつた。そしてその日もだめになつてしまつた。

彼がそのつぎにグラチアと会ったのは二日たつてからだつた。その二日の間、彼はただ彼女とともに過ごす時間のためにばかり生きていた。——けれどこのたびもまた、彼女と隔てなく話すことができなかつた。彼女は彼にたいして温良ではあつたが、例の控え目な態度を捨てなかつた。クリストフは知らず知らずゲルマン風の感傷性を多少吐露したので、彼女はそれに当惑して、本能的に逆な態度をとつた。

彼は彼女に手紙を書いた。それは彼女の心を動かした。人生はいかにも短い、と彼は書いた。二人の齡よわいはもうかくまでに進んでいる。おそらくは相見のものもしばらくの間である。その間に心置きなく話し合えないのは、悲しむべきことであり、ほとんど罪深いことである。

彼女はやさしい文句で彼に返事を書いた。人生に傷つけられて以来、我にもなく一種の疑惑をいだくようになった、ということをや彼女は詫わびた。自分はその控え目な習慣を脱することができない。たとい真実の感情でさえも、それをあまりに強く表示されるときには、不快になり恐ろしくなる。しかしふたたび見出した友情の価値をよく感じている。そして彼と同じくそれを喜んでゐる。それから彼女は晩に食事をしに来てくれと彼に願つた。

彼の心は感謝の念でいっぱいになつた。旅館の室の中で、寝台に横たわり、顔を枕まくらに埋

めて、彼はすすり泣いた。十年間の孤独から放たれたのだった。彼はオリヴィエが死んでからは一人きりだった。ところが今この手紙は、愛情に飢えてる彼の心にたいして、復活の言葉をもたらしてきた。愛情！……彼はそれを捨てた気でいた。愛情なしで暮らすことを学ばなければならなかった。そして今日になって、いかばかり愛情が自分の生活に欠けていたかを感じ、自分のうちに積もつてる愛情の量がいかに多いかを感じた。

楽しい聖きよい一晩だった……。二人は何事も隠し合わないつもりではあったが、彼はただ無関係な事柄だけしか彼女に話せなかった。しかし彼女から眼つきで促されて、いかばかり多くのよい事どもを彼はピアノで語ったことだろう！ 彼女は彼の心の謙讓さを見て、かねて彼を高慢な激烈な人だと知ってただけに驚かされた。彼が帰ってゆくとき、二人は無言のうちに手を執り合つて、たがいにふたたび見出したことを告げ、もうふたたびたがいに見失うことのないのを告げた。——そよとの風もなく、雨が降っていた。彼の心は歌っていた……。

彼女はこの土地にもう数日しか滞在できなかった。そして出発を少しも延ばさなかった。彼は延ばしてくれと頼みかねたし、また悲しみを訴えかねた。最後の日に、二人は子供たちだけといっしょに散歩をした。一時彼は愛と幸福とにいっぱいになって、それを彼女へ

言い出しかけた。しかし彼女は微笑ほほえみながら、ごくやさしい身振りですれを押し止めた。

「いえ！ あなたがどんなことをおっしゃろうと、それはみな私の感じてることですから。」

二人は初めふいに会ったあの道の曲がり角にすわった。彼女はやはり微笑みながら下の谷間をながめた。けれど彼女が眼に見てるのはその谷間ではなかった。彼は苦惱の跡が残ってる柔和な彼女の顔を見守った。濃い黒髪の中には方々に白髪が見えていた。魂の悩みが印せられてるその肉体にたいして、彼は憐れん憫びんと情熱との交じった崇敬の念を覚えた。時の傷跡のうちに至るところ魂が露あらに見えていた。——そして彼は低い震える声で、貴重な恩顧をでも求めるように、その白髪の一筋を求めて、もらい受けた。

彼女は出発した。なぜ自分をいつしよに伴おうとしないかを、彼は了解できなかった。彼は彼女の友情を少しも疑いはしなかった。しかし彼女の控え目なのに当惑した。彼はその土地に二日とどまつてゐることはできなかった。彼女と別な方向へ出発した。旅行や仕事で精神を満たそうとつとめた。グラチアへ手紙を書いた。グラチアは二、三週間後に短い手紙で彼に答えた。それには焦慮も不安もない落ち着いた友情が現われていた。彼はそ

れを苦しみまたそれを喜んだ。それについて彼女をとがめることはみずから許せなかった。二人の愛情はあまりに近ごろのことだったし、最近結び直されたばかりのものだった。彼はそれを失いはすまいかと気づかっていた。それでも、彼女から来るつぎつぎの手紙は彼に安心を与えるような誠実な落ち着きを示していた。しかし彼女は彼とはずいぶん異なつてゐるのだつた……。

二人は秋の末ごろローマで再会することにしてゐた。彼女に会うという考えがなかつたならば、その旅はクリストフにとつてあまり面白くなかつたはずである。彼は長い間の孤独のためにすっかり出ぎらいになつてゐた。現今の人々が不安な閑散のあまりに好む無用な移転にたいして、彼はもう少しも興味を覚えなかつた。精神の規則的な働きにとつて有害な習慣の変化を恐れてゐた。そのうえ彼はイタリーに心ひかれなかつた。彼がイタリーを知つてゐるのは「自然主義作曲家」らの卑しい音楽やウエルギリウスの故国が旅行中の文
学者らにときおり感興を与えるテナーの小曲、などを通じてばかりだつた。翰林院式アカデミーの旧慣を墨守してゐる愚劣な作家らがローマという名をもち出すのを、あまりにしばしば聞かされてゐる前衛の芸術家、それにふさわしい疑惑的敵意を彼はイタリーにたいして感じていた。そのうえ、南方の人々にたいして、あるいは少なくとも、北方人の眼に南方人の代表

として映ずる、いつも饒舌じょうぜつな大風呂敷おおぶろしきを広げる古来名高い典型にたいして、北方のあらゆる人々の心のうちに潜ひそんでる、本能的な反感の古い根があるのだった。クリストフは考えただけでも、軽蔑けいべつ的に唇くちびるをとがらした……。音楽のない民衆とこの上知り合いになりたい気はさらになかった——（音楽のない民衆だと、彼はいつもの極端さで言っていた。「なぜなら、マンドリンをかき鳴らしたり大袈裟おおげさな挿楽劇メロドラマを怒鳴ったりすることが、現代ヨーロッパの音楽のうちで、何ほどのものになるものか！」）とは言え、その国民にグラチアは属してゐるのだった。彼女とめぐりあうためになら、どこまでもまたどんな道を通つてもクリストフはやつて行つたであらう。彼女と落ち合うまでの間眼をつぶっておれば済むことである。

眼をつぶることには彼は馴なれていた。多年の間彼の内生活には雨戸が閉ざされていた。この秋の終わりにはそれがなおいつそう必要だった。三週間引きつづいて絶え間なしに雨が降つた。つきには見通すことのできない一面の灰色の雲がスイスの濡ぬれて震えてる谷間の上にのしかかった。太陽の麗うつくしい光は眼から消えてしまっていた。太陽のような中心精力を自分のうちに見出すためには、まず完全な暗黒を作つて、眼瞼まぶたを閉じて、坑道の奥

へ、夢想の地下坑の中へ、降りて行かなければならなかった。その石炭の中に、滅びた日々の太陽が眠っていた。けれども身をかがめて採掘しながら生を送って、そこからようやく出て来ると、身体は干乾び、背骨と膝とは硬ばり、手足はゆがみ、夜の鳥のような眼になつて視力が曇つてゐるのだつた。幾度となくクリストフは、凍えた心を温むる火を、坑道の奥からようやく取り出してきた。しかし北方人の夢想には、暖炉の熱の匂いがある。その中で生きてるときには人はそれに気づかない。人はその重々しい温みを好み、その薄明かりを好み、重苦しい頭の中に積もつてゐる夢を好む。人は自分のもつてゐるものを愛するものだ。自分のもつてゐるものに満足しなればならない！……

クリストフはアルプスの連山から出て、客車の片隅にうとうとしながら、清らかな空と山腹に流れている光とを見たとき、あたかも夢をみてるような気がした。どんよりした空と薄暗い日の光とは山脈の彼方に残されていた。その変化があまりに急激だったので、初め彼は喜びよりもさらに多くの驚きを感じた。しばらくたつてからようやく、麻痺していた彼の魂はしだいに弛んでき、彼を閉じ込めていた外皮は裂けてき、心は過去の影から脱してきた。その日が進むに従つて、柔らかな光が彼を抱き包んだ。そして彼は今まで存在していたすべてのものの記憶を失つて、うちながめることの喜びをむさぼるように味わ

った。

ミラノの平野。産毛うぶげの生えたはような水田を網目形に区切つて青つぼい運河、その運河の中に映つてゐる日の光。褐色かつしよくの細葉を房々ふさふさとつけ、振れたねじ面白いたく体たいの瘦やせたしなやかさを示してゐる、秋の樹木。橙色だいたいや金縁うすみどりや淡碧うすみどりに縁取られた重畳してゐる線で、地平を取り囲みながら、柔らかな輝きを見せてゐる雪のアルプス連山、ダ・ヴィンチ式の山々。アペニン山脈に落ちてくる夕闇ゆうやみ。フアランドルのように何度も繰り返し引きつづく律動リズムをもつて、蜿蜒えんえんとつづいてゐる険しい小山を、曲がりくねつて降りてゆく列車。——そして突然、坂道の麓ふもとに、あたかも接吻せつぶんのように人を迎える、海の息吹いぶきと橙樹とうじゆの香。海、ラテンの海とその乳光色の光、そこには翼をたたんだ幾群もの小舟が、ゆつたりと浮かんで眠つてゐる……。

海岸の一漁村で汽車は止まつたまま動かなくなつた。大雨のためにジェノヴァとピサとの間の隧道すいどうが崩壊した、ということが旅客らに伝えられた。どの列車もみな数時間遅延していた。クリストフはローマ直行の切符をもつていたが、他の乗客らの物議をかもしたその不運を、かえつて非常に喜んだ。彼はフラット・ホーム歩廊ホームに飛び降り、停車の時間を利用して、海の景色にひかされて出かけて行つた。彼はすっかり海にひきつけられたので、一、二時

間後に列車が汽笛を鳴らしてふたたび進行しだしたときには、小舟に乗っていて、列車が通り行くのを見ながら「御機嫌よう！」と叫んでやった。輝かしい夜に、輝かしい海の上で、若い糸杉に縁取られた岬みさきに沿って、舟を漂わした。そして彼はその村に腰をすえて、たえず愉快に五日間を過ごした。長い断食を済ましてむさぼり食う人のようであった。飢えたすべての官能で輝いた光をむさぼり食った……。光よ、世界の血液よ、人の眼や鼻や唇くちびるや皮膚のあらゆる毛穴から肉体の底まで滲しみ込む、生の流れよ、パンよりもなおいっそう生命には必要な光よ——北方の覆面をぬいでる純潔な燃えたった真裸なんじの汝を見る者は、どうして今まで汝を所有せずして生きることができたかを見ずから怪しみ、もはや汝を欲望せずには生き得ないことを知るであろう。

五日間クリストフは太陽に酔いしれた。五日間彼は自分が音楽家であることを忘れた——それは初めてのことだった。彼一身の音楽は光に変わっていた。空気と海と土地、太陽の交響曲シンフォニー。そしてこの管絃楽団を、イタリーはなんとという先天的技能をもって使役し得ることぞ！ 他の国民はみな自然に従って彩いろどっている。イタリーは自然と協力している。太陽とともに彩まっかっている。色彩の音楽。すべてが音楽であり、すべてが歌っている。金色の亀裂きれつのある真赤まっかな往來の壁面、上方には縮れつ毛の二本の糸杉、周囲には紺碧こんぺきの空。

青色の建物の正面の方へ赤壁の間を上っていつてる、急な白い大理石の石段。杏子色やシトロン色や仏手柑色などさまざまな色で、橄欖樹オリヴの間に輝いてるそれらの家は、木の葉の中のみごとな果実のように見える……。イタリーの幻覚は肉感的である。汁しるの多い芳しい果実を舌が喜ぶように、人の眼は色彩を喜ぶ。その新しい御馳走ごちそうの上へ、クリストフは貪婪どんらんな食欲で飛びついていった。これまで灰色の幻像にばかり限られていた禁欲生活の補いをつけた。運命のために息をふさがれていた彼の豊饒ほうじょうな性質は、これまで用いなかった享樂の力を突然意識しだした。その力は差し出された餌食えしきを奪い取った。芳香、色彩、人声や鐘や海の音楽、空気と光との快い愛撫あいぶ……。クリストフはもう何事をも考えなかった。法悦のうちに浸った。彼がそれから我に返るのは、出会う人々に自分の喜びを伝えんがためばかりだった。相手は雑多だった。皺寄しわった鋭い眼をし、ヴェネチアの元老のような赤い縁無し帽をかぶってる、自分の船頭である老漁夫——激しい憎悪でくろずんでる獐じょう猛もうなオセロ風の眼をぎよろつかせながらマカロニーを食べる、無感無情な人物である、唯一の会長者たるミラノ人——料理の盆を運ぶのに、ベルニニの描いた天使のように、首を傾げ腕や胴をねじらす、料理店の給仕——通行人に青枝付きの香橙オレンジを差し出して路上で物乞いをし、追従ついで的な流し目を使う、聖ヨハネみたいな少年。また、駅馬車の奥

に頭を下にして寝そべりながら、鼻唄はなうたのいろんな端くれを不意に歌い出す馬車屋をも、彼はよく呼びかけた。カヴァレリア・ルスチカナを小声で歌ってる自分自身にふと気づいて驚いた。旅の目的はまったく忘れてしまっていた。早く目的地へ着いてグラチアに会いたいことも、すっかり忘れていた……。

そしてついにある日、なつかしい彼女の面影が浮かんできた。それを描き出したのは、往来で出会った一つの眼まなざし差だったか、荘重な歌うような一つの声の抑揚だったか、それを彼は覚えなかった。しかしそのときは、橄欖樹オリヴァに覆おほわれた四方の丘、濃い影と強い日光とにくつきり浮き出されてるアペニン連山の高い光った頂、香橙オレンジの林、海の深い呼吸など、周囲のすべてのものから、女の友のにこやかな顔が輝き出した。空気の無数の眼によつて、彼女の眼は彼をながめていた。あたかも薔薇ばらの木から一輪の花が咲き出すように、彼女はその土地から咲き出していた。

そこで彼は、ふたたびローマ行きローマの汽車に乗つてどこにも降りなかった。イタリーの追憶にも過去の芸術の都にもさらに興味がなかった。ローマでも、何にも見なかったし、何にも見ようとはしなかった。そして通りがかりに最初見てとつたもの、無様な新しい街が衢いや四角な大建築などは、もつとローマを知りたいとの念を起こさせはしなかった。

到着するとすぐに彼はグラチアのところへ行つた。彼女は彼に尋ねた。

「どこを通つていらしたんですか。ミラノやフィレンツェにお寄りになりましたか。」

「いいえ。」と彼は言つた。「寄つてどうするんです？」

彼女は笑つた。

「面白い御返辞ですこと！ ではローマをどうお思いになりますか。」

「なんとも思いません。」と彼は言つた。「まだ何にも見ていませんから。」

「それでも……。」

「何にも見なかつたんです、記念の建物一つも。旅館からまっすぐにあなたのところへ来ましたから。」

「ちよつと歩けばローマは見られますよ……。あの正面の壁を御覧なさい……。そこに当たつて光を見さえすればいいんですよ。」

「私はあなただけを見てるんです。」と彼は言つた。

「ほんとにあなたはわからない人ですね、ご自分の考えしか見ていらつしやらないんですね。そして何時いつスイスをお発たちになりましたの。」

「一週間前です。」

「では今まで何をしていらしたんですか。」

「知りません。偶然海岸のある地に止まったんです。どういう所だか注意もしませんでした。一週間眠っていました。眼を開いたまま眠っていたんです。何を見たか自分でも知りません、何を夢みたら自分でも知りません。ただあなたのことを夢みたようです。たいへん愉快だったことを知っています。けれどいちばんいいことには、何もかも忘れまして……」

「ありがとう。」と彼女は言った。

(彼はそれを耳に入れなかった。)

「……何もかも、」と彼は言いつづけた、「そのときあったことも、前にあったことも、すっかり忘れてしまいました。私はふたたび生き始めた新しい人間のようになっていきます。」

「ほんとうにそうですわ。」と彼女はにこやかな眼で彼をながめながら言った。「この前お目にかかったときからすっかりお変わりなさいましたね。」

彼もまた彼女をながめた。そして記憶の中の彼女とやはり異なってるように思った。けれども彼女は二か月前と変わってるのではなかった。ただ彼がまったく新しい眼で彼女を

見てるのだった。彼方かみなたスイスでは、昔のころの面影が、年若いグラチアの軽い影が、彼の眼と眼前の彼女との間に介在していた。ところが今では、北方の夢はイタリーの日の光に融とかされていた。彼は白日の光の中に、恋人の実際の魂と身体とを見た。パリーにとらわれてた野の仔山羊こやぎとは、また、彼女の結婚後間もなくある晩出会ってやがて別れたおりの、聖ヨハネみたいな微笑ほほえみをしてる若い女とは、彼女はいかに違ってたことだろう！ ウンブリアの小さな娘から、美しいローマ婦人の花が咲きだしていた。

真の色艶、堅固なる瑞々しき身体。

その姿体は調和のとれた豊満さをそなえていた。その身体は高慢ものうな懶ものうさに浸っていた。静安の天性が彼女を包んでいた。北方人の魂がけっしてよく知り得ないような、日の照り渡った静寂ゆると揺ぎない觀照とをむさぼる性質をそなえており、平和な生活を官能的に享樂する性質をそなえていた。彼女が昔どおりになお持ってたものは、ことにその大なる温良さであって、それが他のあらゆる感情の中にまで織り込まれていた。しかし彼女の晴れやかな微笑ほほえみのうちには、新たないろんなものが読みとられた。ある憂鬱ゆううつな寛大さ、多少

の倦怠けんたい、一抹の皮肉、穏和な良識など。彼女は年齢のためある冷静さを得ていて、心情の幻にとらわれることがなく、夢中になることがあまりなかった。そして彼女の愛情は、クリストフが押えかねてる情熱の激発にたいして、洞察どうさつ的な微笑を浮かべながらみずから警めていたいまし。それでもなお彼女は、弱々しい点もあり、日々の風向きに身を任せることもあり、一種の嬌態きょうたいを見せることもあった。彼女はその嬌態をみずからあざけてはいたが、強しいて捨て去ろうとはしなかった。事物にたいしてもまた自己にたいしても少しも逆らわなかった。きわめて温良でやや疲れた性質の中に、ごく穏やかな宿命観をもっていた。

彼女は多くの訪問客を迎えていたし、客を選択することを——少なくとも表面上——あまりしなかった。しかし彼女の親しい人々は、たいいて同じ階級に属していて、同じ空気を呼吸し、同じ習慣にしつけられていたので、その社会はかなり同分子的な調和を形造つていて、クリストフがフランスで聞かされたものとはきわめて違っていた。その大部分は、外国人との結婚によって活気づけられてる、諸方の古いイタリー系統の者だった。彼らの中には、表面的な超国境主義が支配していて、四つのおもな国語と西歐四大国民の智囊ちのう

とが安らかに混和していた。各民族がそれぞれ自分の割当を、ユダヤ人はその不安を、アングロ・サクソン人はその沈着を、そこにもち寄っていた。しかしすべては間もなくイタリーの坩堝るつぼの中に溶かされていた。略奪者たる大貴族の跋扈ばつこした幾世紀かが、一民族の中に、たとえば猛禽もうきんの倨傲きよごう貪欲どんよくな面影を刻み込むときには、その地金は変化することがあっても、印刻はそのまま残るものである。もつともイタリーのらしく見えるそれらの相貌そうぼうのあるもの、ルーニ二式の微笑、ティツイアーノ式の肉感的な平静な眼差まなざし、アドリア海やロンバルディア平原の花は、ラテンの古い土地に移し植えられた北方の灌木かんぼくの上に咲いているのだった。ローマの絵具板の上で溶かされた色はどんなものであろうと、それから出て来る色は常にローマの色である。

クリストフは自分の印象を分析することができずに、多くは凡庸でありあるものは凡庸以下であるそれらの魂から発する、多年の教養と古い文明との香を、わけもなく感心してしまった。そのとらえがたい香はごく些々ささたるものにつながれていた。懇切な優雅さ、意地悪と品位とを保ちながら愛想を見せることのできる、举措きよそのやさしさ、または、眼差や微笑や、機敏のんきで呑気のんきで懷疑的で雑多で軽快である才知などの、高雅な繊細さ。困苦しいものや横柄なものは何もなかった。書物的なものは何もなかった。ここでは、鼻眼鏡越しに

人を窺^{うかが}うパリー客間の心理家や、ドイツの軍人万能主義の大先生などに、出会う恐れは少しもなかった。彼らは単に人間であり、きわめて人間的な人間であって、昔のテレソティウスやスキピオ・エミリアヌスなどの友人らと同じだった……。

予は人なり……。

美^{うる}わしい前面。生活は実質的よりもいつそう外見的であった。その下には、あらゆる国の上流社会に共通である、癒^{いや}すべからざる軽^{けい}佻^{ちよう}さが潜^{ひそ}んでいた。しかしこの社会に民族的特質を与えてるものは、その無精さであった。フランス人の軽佻^{けいちよう}さには、神経質な焦燥^{せうそう}が伴^{とも}っていて、たとい空回りをしようとも、たえず頭脳が働きつづけている。しかるにイタリー人の頭脳は、休息することを知^しっている、あまりに知り過ぎてゐる。柔惰^{じゆうだ}な享樂主義^{きやうらくしぎ}の生^{なまぬ}温^まい枕^{まくら}をし、皮肉^{くわにく}できわめて軽^{けい}捷^{しやう}でかなり好^{この}奇的^{てき}で根本^{こんぽん}は驚^{おど}くばかり冷淡^{れんたん}な才知^{さいち}の生^{なまぬ}温^まい枕^{まくら}をして、暖^ぬかい木陰^{きかげ}にうとうとと居眠^{いみん}るのはいかにも快^たいことである。

それらの人々はみな一定のはつきりした意見^{いけん}をもっていなかった。同じ道樂^{だうらく}気分^{きぶん}で政治^{せいじ}や芸術^{げいじゆん}に關係^{くわい}していた。彼らのうちには、繊細^{せんさい}な顔^{かほ}だちをし、怜^{れい}惻^{じやく}なやさしい眼^{まなこ}つきをし、

静かな挙措を有してる、ローマ貴族の美しい型が、魅力ある性質の人々が、見られるのであった。そしてその人々は温厚な心で、自然や古い画家や花や婦人や書物や美食や祖国や音楽……などを好んでいた。あらゆるものを好んでいて、何一つ選び取らなかつた。時とするとも何にも好んでいないのかと思われるほどだつた。それでも愛情は彼らの生活のうちに大きな場所を占めていた。ただ条件として、愛情が生活を乱さないということだつた。その愛情も彼らと同様に無頓着むとんじやくで怠惰だつた。恋愛でさえも家庭的な性質を帯びがちだつた。よくできて調和のとれてる彼らの知力は、いかなる矛盾した思想が出会つても、たがいに衝突することなく、穏やかに結合して、にこやかに鈍くなり、順従になつてゆく、一種の懶惰らんたな性質に満足していた。彼らは徹底的な信仰を恐れ、極端な党派心を恐れていて、半端な解決と半端な思想とに安んじていた。彼らは自由的保守の精神の人々だつた。息切れや動悸どうきの恐れがない氣候温和な転地場所のような、ほどよい高さの政治や芸術が彼らには必要だつた。ゴルドーニの怠惰な芝居やマンゾーニの一樣にぼやけた光などが、彼らの気になつていた。彼らの愛すべき懶惰な心は、そういうものから不安を覚えさせられることがなかつた。彼らはその偉大な祖先らのように、「まず生きることである……」
とは言わないで、「肝要なのは穏やかに生きることである」と言うに違いなかつた。

穏やかに生きること。それがすべての人々のひそかな願いであり志望であつて、もつとも元氣澁^{はつらつ}瀾たる人々や實際の政治を支配してゐる人々でさえそうだった。たとえばマキアヴェリ^{マキアヴェリ}の徒弟たる者、自己と他人との主であり、頭と同じく冷静なる心を持ち、明晰^{めいせき}で退屈してゐる知能をもつていて、自分の目的のためにはあらゆる手段を用ゐることを知りかつでき、自分の野心のためにはあらゆる友情をも犠牲にする覚悟でゐる者、そういう人も、穏やかに生きるという神聖なる一事のためには、その野心をさえ犠牲になし得るのであつた。彼らには無為怠慢の長い期間が必要だつた。そしてそれから出て来ると、あたかも熟睡のあとのように爽^{そうかい}快に元氣になつてゐた。それらの鈍重な男子たち、それらの平靜な婦人たちは、談話や快活や社交生活を突然渴望しだすのだつた。身振りや言葉や逆説的な頓智^{とんち}や滑稽^{こっけい}な気分などを振りまいて、自分を消費しなければならなかつた。そして道^{オベラ}化^{フツア}歌劇を演じていた。このイタリーの人物展覽場の中では、北方において見かけるような、金属性の光を帯びた眸^{ひとみ}や、精神の絶えざる労働によつて凋^{しぼ}んだ顔つきなど、思想の磨滅^{まめつ}はめつたに見出されなかつた。けれども、どこにもあるようにここにもやはり、ひそかに悩んでゐる自分の傷を隠してゐるような魂、無関心の下に潜^{まひ}んで麻痺の衣を快くまとつてゐる欲望や懸念などが、欠けてはしなかつた。それからまた、ごく古い人種に固有な人知

れぬ不平衡の徴候たる、人を面くらわせるような奇怪不思議な粗漏が——ローマ平野に開ける断層のようなものが、ある人々のうちにあるのは言うまでもないことだった。

一つの悲劇が中に隠れて眠っているそれらの魂の、それらの平静な冷笑的な眼の、呑気のんきさの謎なぞのうちには、多くの魅力がこもっていた。しかしクリストフはそれを認め得る気質ではなかった。社交界の人々にグラチアが取り巻かれてるのを見て、彼は腹をたてた。彼らが嫌いやになり、彼女が嫌いやになった。ローマにたいして顔を洗めるとともに、彼女にたいして顔を洗めた。そしてしだいに訪問の数を少なくした。立ち去ってしまったおうかと思つた。

彼は立ち去らなかつた。自分をいらだたしていたイタリー社交界の魅力を、心ならずも感じ始めていた。

当分の間彼は孤独の生活を送つた。ローマやその近傍を歩き回つた。ローマの光、宙に浮いている庭園、日の照り渡つた海で黄金の帯のように取り巻かれてるローマ平野などは、この楽土の秘密をしだいに彼へ示してくれた。彼は死滅した大建築物にたいして軽蔑けいべつを装つていて、それを見に行くために一步も踏み出すものとみずから誓つていた。向こうからやつて来るのを待つのだと口をとがらしながら言つていた。ところが向こうからやつ

て来た。地面の起伏しているこの都会の中を散歩すると、偶然それらに出会った。別に
 捜し回りもしないで、夕陽ゆうひを受けてる赤いフォルムを見、深い蒼空あおぞらが青い光の淵ふちとな
 って向こうに開けてる、パラチーノ丘の半ばくずれてる迫持せりもちを見た。また、泥どろで赤く濁
 ってあたかも土地が歩き出してるようなテヴェレ河のほとり——大洪水だいこうずい以前の怪物の巨
 大な背骨みたいな溝渠こうきよの廃址はいしに沿って、広漠こうばくたるローマ平野の中をさまよった。厚く
 かたまってる黒雲が青空の中を流れていた。馬に乗った百姓たちが鞭むちを振り上げながら、
 長い角を生やした銀鼠色ぎんねずの大きな牛の群れを、荒れ地を横ぎって追いたてていた。まっ
 すぐな埃ほこりっぽい露あわな古い大道の上を、股またに毛皮をつけた山羊足やぎあしの牧人たちが、低い驢馬ろば
 や子驢馬の列を引き連れて黙々と歩いていた。地平線の奥には、神々こうこうしい線をしてるサ
 ビーノの山脈の丘陵が展開しており、大空の丸天井の他方の縁には、都会の古い囲壁が、
 踊ってる像をのせた聖ヨハネ寺院の正面が、その黒い影を投じていた……。静寂……。照り
 渡ってる太陽……。風が平野の上を吹いていた……。腕は結ゆわかれ頭は欠けて雑草の波に打
 たれてるある像の上に、一匹の蜥蜴とかげが安らかな胸であえぎながら、じつと日光に浴して我
 を忘れていた。そしてクリストフは、日の光に頭の中が茫ぼうとして（時にはまたカステリー
 の葡萄酒ぶぶしうのせいもあつたが、）こわれた大理石像のそばに黒い地面の上にすわり、微笑ほほえみ

を浮かべうつらうつらと忘却のうちに浸つて、ローマの落ち着いた強烈な力を吸い込んだ——夕闇ゆうやみが落ちてくるまで。——すると突然悲しみに心がしめつけられて、悲壮な光が消えてゆくその痛ましい寂寞せきぼくの地を、彼は逃げ出すのであった。……おう土地よ燃えたつてる土地よ、情熱と無言の土地よ、汝の熱ねつっぽい平和の下に、ローマ軍団のらつぱの鳴り響くのが、予には聞こえる。なんとという猛然たる生氣が、汝の胸のうちにうなつてるところぞ！ なんとという覚醒かくせいの願望ぞ！

クリストフが見出したある人々の魂のうちには、古い火の残りが燃えていた。死者の埃ほこりの下にその燠おきはまだ残つていた。マチイーニの眼とともに消えてしまったと思われるその火はふたたび燃えだしていた。昔と同じ火であった。それを見ようとするとする者はきわめて少なかった。それは眠つてる人々の静穩を乱すのだった。輝いた荒々しい光だった。その火をもつてる人々——それはみな若い人々で（もつとも年上の者も三十五歳未満で、）氣質や教育や意見や信念などをたがいに異にしてる、自由な知識人であつた——それらの人々は、この新生の炎にたいする同じ崇拜のうちに結合していた。党派の看板や思想の体系などは、彼らにとっては問題とならなかつた。肝要なのは「勇敢に思索する」ということだ

った。率直であり大胆であるということだった。そして彼らは己おのが民族の眠りを手荒く揺り動かしていた。勇士らによって死から呼び覚さまされたイタリーの政治的復活のあとに、また最近の経済的復活のあとに、彼らはイタリーの思想を墓穴から取り出そうと企てていた。優良社会の怠惰な臆おく病びような無気力を、その精神的卑怯ひきようさと空疎な言辞とを、彼らはあたかも一つの侮辱でもあるかのように苦しんでいた。祖国の魂の上に幾世紀となく積もり重なつて、美辞麗句と精神的隷属との霧の中に彼らの声は鳴り響いていた。容赦なき現実主義と一徹な公明さとを、彼らはそこに吹き込んでいた。澆はつらつ澆はつらつたる実行を伴う明晰めいせいな知力の熱情を彼らはもっていた。彼らは場合によっては、国民的生活が個人に課する規律的義務のために、自分一個の理性の嗜好しこうを犠牲にすることもできたが、それでもなお、最高の祭壇と真実にたいする至純な熱情とを捨てなかった。強烈な敬虔けいけんな心で真実を愛していた。それらの若い人々の首領の一人は、(ジューゼッペ・プレヅリニで、当時ジオヴァニ・パピニとともに声の一角を指導していたが、)敵から侮辱され中傷され脅かされながら、泰然自若として答え返した。

——真実を尊敬したまえ。僕はあらゆる怨恨えんこんを捨て心を打ち開いて、諸君に語ってい

るのだ。諸君から受けた害悪をも、僕が諸君になしたかもしれない害悪をも、忘れて
いるのだ。真実でありたまえ。真実にたいする敬虔峻しゅんげん厳げんな尊敬のないところには、良心は
存しないし、高い生活は存しないし、犠牲の可能性は存しないし、高潔は存しないのだ。
真実という困難な義務を修業したまえ。虚偽を事とする者は、相手に打ち勝つ前に、まず
おのれ自身を腐敗させる。虚偽によつて目前の成功を得たとしても、それがなんの役にた
つか。虚偽を事とする諸君の魂の根は、虚偽に荒らされた土地の上に、空に浮かんでいる
だろう。僕はもはや敵として諸君に語つていのではない。諸君の熱情が口に祖国の名を
藉かりるとしても、われわれは意見の相違を超越した高い地歩に立っている。祖国よりもさ
らに偉大なる何かがあるとすれば、それはまさしく人間的良心である。悪きイタリー人た
るの苦痛を忍んでも、侵してはならない掟おきてが世にはある。諸君の前に立つてる者は、真実
を求めてる一個の人間である。諸君はその叫びを聞かなければならない。諸君の前に立つ
てる者は、諸君が偉大で純潔であるのを見んことを、また諸君とともに働かんことを、熱
烈に希望してる一個の人間である。諸君が欲すると否とにかかわらず、われわれは皆、真
実をもつて働いてるすべての人々と、共同に働いているのである。もしわれわれが真実を
もつて行動するならば、われわれから生れ出て来るところのものは（何が出て来るかをわ

れわれは予見することはできないが、われわれの共通の標しるしをつけているだろう。人間の精髓はそういうところにある。真実を求め、真実を見、真実を愛し、真実に身をささぐる、その靈妙なる才能のうちに存している。——真実よ、汝を所有してゐる人々の上に、汝の強健さの魔法の息吹いぶきを広げる、汝真実よ！……

クリストフはそれらの言葉を聞いたとき、それを自分の声の反響かと思つた。そして彼らと自分とは兄弟であることを感じた。国民や觀念の鬭争の偶然性のために、他日敵味方となつて混戦中に投ぜられるかもしれないが、しかし味方となろうとも敵となろうとも、常に同系の人間であつたし、いつまでも同系の人間であるだろう。そのことを彼らは彼と同様に知つていた。彼よりも以前に知つていた。彼が彼らを知る前に、彼は彼らから知られてゐた。というのは、彼らはすでにオリヴィエの仲間であつたから。クリストフは、パリーではごく少数の人からしか読まれていない友の作品が——（数冊の詩集と論文集）——それらのイタリー人たちから翻訳されて、彼らにも親しいものとなつてゐるのを見出したのだつた。

その後彼は、それらの人々の魂とオリヴィエの魂とを隔ててゐる越えがたい距離を、見出

さざるを得なかつた。他人を批判する態度においては、彼らはどこまでもイタリー人であつて、己が人種おのの思想の中に深く根をおろしていた。要するに、彼らが他国人の作品中に誠意をもつて深く求めるところのものは、彼らの国民的本能が見出したがつてるものばかりであつた。往々にして彼らは、知らず知らず自分が挿そうにゆう入したものをばかり取り上げていた。凡庸な批評家であり拙劣な心理家である彼らは、あまりに融通がきかなくて、真実にたいしてもつとも心を寄せてるときでさえも、自己と自己の熱情とでいっばいになつていた。元来イタリーの理想主義はおのれを忘れることができない。北方の無我的な夢想に少しも興味を覚えない。自己に、自己の願望に、自己の民族的自負心に、すべてのものをもちきたして、それを變形させてしまふ。意識的にもしくは無意識的に、常に第三口ーマのために働いている。ただ数世紀の間、その実現のために大して骨折りはしなかつたばかりである。実行に適してるそれらのみごとなイタリー人らは、ただ熱情によつて行動するばかりで、すぐに行動に飽いてしまふ。しかし熱情の風が吹くときには、彼らはいかなる他の民衆よりも高く吹き上げられる。その実例としては彼らの文芸復興を見るがよい。——そういう強風の一つが、各派のイタリー青年の上に吹き始めていた。国家主義者、社会主義者、新カトリック主義者、自由理想主義者など、すべて希望と意欲とをまげないイ

タリー人の上に、世界の主たるローマ市の市民の上に、吹き始めていた。

最初クリストフは、彼らの勇ましい熱誠と彼を彼らに結びつける共通の反感とを見てとったばかりだった。社交界にたいする蔑視べつしの念において、彼らは彼と意見が合わずにはいなかった。彼はグラチアが社交界を好んでるという理由で、それにたいして恨みを含んでいた。が彼らは彼よりもいつそう憎んでいた、社交界の用心深い精神を、無情無感覺を、妥協と道化とを、中途半端な物の言い方を、首鼠しゆそ兩端の思想を、あらゆる可能のうちの何一つをも選択せずに、中間を巧妙に往来する態度を。彼らは強健な独学者であつて、あらゆる材料からでき上がつており、おのれをみがき上げるだけの手段も隙ひまもなかった。生来の粗暴さと荒削りの田舎者めいたやや辛しんらつ辣な調子とを、好んで大袈裟おおげさに現わしていた。彼らは人から聞かれたがっていた。人から攻撃されたがっていた。看過されるよりむしろどんなことでもされたがっていた。自分の民族の元気を眼覚めざめさせんがためには、その最初の犠牲者となることを喜んで承諾するに違ひなかった。

当座の間彼らは、人から好まれてはいなかったし、好まれようとつとめてもいなかった。クリストフは新しい友人らのことをグラチアに話してみたが、あまりいい結果は得られなかった。適度と平和とを愛する性質の彼女には、彼らは気に入らなかった。そして彼らは

そのもつともよい主旨を主張する場合にも時として人の反感を招くような方法をもつてする、という彼女の意見はまさしく至当だった。彼らは皮肉で攻撃的であつて、相手の氣持を害するつもりでないときでさえ、侮辱に近い苛酷な批評をくだすのだった。あまりに自信の念が強く、概括と強い肯定とにあまり急いでいた。十分に發育を遂げないうちに公の活動にはいつたので、いつも同じ偏執さで一つの熱狂から他の熱狂へと移つていた。熱中の生真面目であつて、自己の全部をささげつくし、何物をも節約しなかつたので、過度の理知と尚早な狂的な勤勞とのために憔悴していた。茨から出たばかりで生々しい日の光に当たるのは、若い思想にとつては健全なことではない。魂はそのため焼きつくされる。何物も時と沈黙とをもつてしなれば豊饒にはならない。しかるにその時と沈黙とが彼らには欠けていた。それはイタリー人の才能の過多から来る不幸である。過激な早急な行動は一つのアルコールである。それを味わいつけた知能は、つぎにそれなしで済ますことが困難になつてくる。そして知能の順当な生長は、永久に無理なものとなる恐れがある。

クリストフは、この澀瀨たる率直さの苛辣な新鮮味を賞美した。そして常に身を危うくすることを恐れ然りとも否とも言わない微妙な才能をもつて、中庸人士らの無味乾燥

さを、それに対立さしていた。しかしやがて彼は、冷静慤いんぎん懃いんぎんな知力をもつて後者にも、やはり価値があることを見出した。彼の友人らが送つて常住の戦闘状態は、人を飽かせやすいものだった。クリストフは自分の義務でもあるかのように、彼らのことを弁護しにグラチアのところへ行つた。時とすると、彼らのことを忘れるために行くこともあつた。もちろん彼らは彼に似寄つていた。あまりに似すぎていた。彼らの現在は二十歳ころの彼と同様だった。そして生の流れはさかのぼるものではない。心の底ではクリストフも、自分のほうはそれらの激烈さに別れを告げてしまつてることや、自分は平和のほうへ進みつつあることなどを、よく知つていた。そしてグラチアの眼が平和の秘密の鍵かぎを握つてゐるしかつた。ではなにゆえに彼は彼女に逆らおうとしたのか？……ああそれは、愛の利己心によつて、自分一人でその平和を享受したいがためだった。グラチアがすべての訪問者に惜しげもなく平和の恵みを分かつことや、彼女が万人に向かつてその優しい歓待を振りまくことなどを、彼は忍び得なかつたのである。

彼女は彼の心中を読みとつていた。そして例の柔和な率直さである日彼に言った。

「あなたは私がこんなであることを嫌いやに思つていらつしやるでしょうね。でも私を理想化し

なすつてはいけません。私は女ですし、普通の人よりすぐれたものではありません。私は別に社交界を求めているわけではありませんが、うち明けて申しますと、それがやはり私には快いのです。ちようど、あまりよくない芝居へときどき行ったり、あまり意味もない書物を読んだりするのが、面白いのと同じことですわ。あなたはそんなものを軽蔑けいべつしていらつしやいますが、私はそんなものから心を休められたり慰められたりします。私は何物も拒むことができないのです。」

「どうしてあなたはあんなつまらない奴やつらに我慢ができるのですか。」

「世の中は私に気むずかしくないようにと教えてくれました。世の中にあまり多く求めてはいけません。悪意がなくてかなり親切な善良な人たちを相手にすることだけで、確かにもう十分ではありませんか……（もとより、その人たちから何にも期待しないという条件です。他人を必要とする場合に、求むるような人はなかなかいないということは、私にもよくわかつています……。）けれども、あの人たちは私に好意をもってくれています。そして、私はほんとうの愛情に少し出会いますと、他のものはみな安価に与えてしまうのです。それをあなたは嫌いやがつていらつしやるのでしょうか？ 私がつまらない人間であるのをお許しくださいね。私はせめて、自分のうちにある善よいものとそれほど善くないものと

を、区別することだけは知っています。そしてあなたといっしょにいるのは、私の善いほうの部分なのです。」

「私は全部がほしいんです。」と彼は不満な調子で言った。

それでも彼は、彼女がほんとうのことを言ってるのをよく感じていた。彼は彼女の愛情を信じきっていたので、数週間躊躇ちゆうちよしたあとで、ついにある日彼女に尋ねた。

「あなたは望まれないんでしょうか……。」

「何を？」

「私のもことになることを。」

そして彼は言い直した。

「……私があなたのものになることを。」

彼女は微笑ほほえんだ。

「でもあなたは私のもですよ。」

「私の言う意味はあなたによくわかつてるはずです。」

彼女は少し心を乱された。彼の手を執って、率直に彼の顔をながめた。

「いけません。」と彼女はやさしく言った。

彼は口がきけなかった。彼女は彼が苦しんでるのを見てとった。

「ごめんください、あなたをお苦しめしまして。あなたがそんなことをおっしゃるだろうということは、私にもわかっておりました。私たちはおたがいにありのままを話さなければいけませんわ、親しいお友だちとして。」

「友だちですって。」と彼は悲しげに言った。「ただそれだけですか。」

「まあ勝手な方ですこと！ それ以上何を望んでいらっしゃるのですか。私との結婚をですか……。昔私の美しい従姉いとこへばかり眼をつけていらしたときのことを、あなたは覚えていらっしゃいますか。あのとき私は、あなたにたいして感じている事柄をあなたに悟っていただけなのが、ほんとに悲しゆうございました。もし悟っていただいたら、私たちの生活はすっかり違ったかもしれないかもしれません。けれども今では、このほうがかえってよいことは考えますの。共同生活の苦難に私たちの友情をさらさなかつたのは、かえってよいことでした。共同の日常生活では、もつとも純潔なものもついには汚れてしまいますから……」

「そんなことをおっしゃるのは、私を昔ほど愛してくださいから……」

「いいえ、私はやはり同じようにあなたを愛しております。」

「ああそれを私に言ってくだすつたのはこれが初めてです。」

「私たちの間ではもう何も隠してはいけませんもの。いったい私は結婚というものをあまり信じてはおりません。もちろん私自身の結婚が十分の実例にはなりません、私はいろいろ考えてみたり、周囲をながめてみたりしました。幸福な結婚というものはめつたにありません。それはやや自然に反したことです。二人の者の意志をいっしょに結びつけるには、両方でないまでもその一方を、不具にしてしまわなければなりません。そしておそらくそんな苦しみは、人の魂を有益に鍛錬するものではありません。」

「ああ私は、」と彼は言った、「かえつて結婚を非常に美しいことだと思ふんです、二人の献身の結合、一つに混和した二つの魂を。」

「あなたの空想のうちでは美しいことかもしれませぬ。けれど実際に当たつては、あなたはだれよりもお苦しみなさるでしよう。」

「なんですつて！ あなたは私を、妻や家庭や子供をもつことのできない者だと思われるのですか？……そんなことを言つてはいけません。私は妻や家庭や子供をどんなにか愛するでしよう！ あなたはその幸福が私には得られないものだと思われるのですか。」

「よくわかりませんが、まあ駄目だめでしょうね……。けれどあるいは、あまり利口でなく、あまりきれいでなく、あなたに身をささげて、そしてあなたを理解できない、ごく人のいい女となら……。」

「ひどいことを！……けれど私をからかうのは間違っていますよ。善良な女ならたとい頭が悪くとも、いいものです。」

「私もそう思いますわ。そういう女を捜してあげましょうか。」

「もうどうか言わないでください。私は心が刺し通されるようなんです。どうしてあなたはそんな言い方をなさるんでしょう？」

「私がかいけないことを申しましたか。」

「私を他の女と結婚させようなどと考えられるのは、私を少しも愛してくださいさらないからでしょう、まったく少しも。」

「いいえ、反対にあなたを愛してるからですわ。あなたを幸福にして上げるのがうれしいからです。」

「では、それがほんとうでしたら……。」

「いえいえ、そんなことに話をもどすのはよしましょう。きっとあなたの不幸になること

ですから。」

「私のほうは気にかけないでください。確かに私は幸福になるでしょうから。けれども、ほんとうのことを言ってください。あなたは私といっしょになって、不幸になるだろうと思っただけなのではないでしょうか？」

「まあ、私が不幸になる、そんなことがあるものですか。私はあなたを尊敬していますし、たいへん敬服していますから、あなたといっしょになって不幸になるなどということはけつしてありません。……それに、なお申しますと、私はもう今ではどんなことがあっても不幸になつてしまうことはないように思われます。私はあまりいろんなことを見てきましたし、哲学者じみてきています。……けれども、うち明けて申しますと——（それがあなたはお望みでしょう、お怒りにはならないでしょうね）——実は私は自分の弱点をよく知っています。幾月かたつうちには、かなり馬鹿げた女になつてしまつて、あなたといっしょにいて十分幸福ではなくなるかもしれませぬ。それが私にはつらいのです。なぜなら私には、あなたにたいしてこの上もなく清い愛情をいただいていますから。私はどんなことがあつてもこの愛情を曇らしたくありません。」

彼は悲しげに言つた。

「まったく、あなたがそんなふうに言われるのは、私の苦しみを和らげるためでしょう。私はあなたの気には入らないのです。私のうちにはあなたの嫌いやがられるものがたくさんあるんです。」

「いいえ、けつしてそうではありません。そんなに不平そうな顔をなすつてはいけません。あなたはりっぱななつかしい方です。」

「それなら私には訳がわかりません。なぜ私たちは一致することができないのでしょうか。」

「あまり人と違ってるからですわ、二人ともあまり特徴のあるあまり個性的な性質だからですわ。」

「それだから私はあなたを愛しているんです。」

「私もそうですの。けれどまたそのために、私たちは衝突するかもしれません。」

「そんなことはありません。」

「いいえそうですわ。あるいはそうでなくても、私はあなたのほうが自分よりすぐれていられることを知っていますから、自分のちっぽけな個性であなたの邪魔となるのが気がとがめるでしょう。すると私は自分の個性を押しつけ、口をつぐんでしまつて、一人苦しむ

ようになるでしょう。」

クリストフの眼には涙が浮かんできた。

「おうそんなことは、私は望みません、けっして望みません。あなたが私のせいで私のために苦しまれるくらいなら、むしろ私はどんな不幸にも甘んじます。」

「あまり心を動かしなすってはいけません……。ねえあなた、私はこんなことを申しながら、おそらく自分に媚びてるのかもしれないもの……。たぶん私は、自分をあなたの犠牲にするほど善良な女ではないかもしれませんが。」

「それでけっこうです。」

「でもこんどは、あなたのほうが私の犠牲になられるとしてみます。すると私はやはり自分で苦しむことになるでしょう……。それごらんなさい、どちらにしたって解決がつかないではありませんか。今のままにしておきましょうよ。私たちの友情よりりっぱなものがありますでしょうか？」

彼はやや苦々しげに微笑みながら頭を振った。

「ええそれで結局、あなたは十分私を愛していられないんです。」

彼女もやや憂わしげにやさしい微笑を浮かべた。ちよつと溜め息をついて言った。

「そうかもしれません。あなたのおっしゃるのは道理もつともです。私はもう若々しくはありません。私は疲れております。あなたのようにごく強い者でないと、生活に擦り減すらされるのです……。ああ、時とすると、私はあなたをながめていて、十八、九歳の悪戯いたずら青年でもあるような気がすることがあります。」

「それはどうも！　こんなに老ふけた頭をし、こんなに皺しわが寄り、こんなに萎しなびた色艶つやをしてるのに！」

「あなたがお苦しみなすったこと、私と同じくらいに、おそらく私以上に、お苦しみなすった、ことは、私にもよくわかっております。それは私にも見てとられます。けれどあなたはときどき、青年のような眼で私をお見になります。そしてあなたから新しい生の泉が湧わき出るので、私は感ずるのです。私自身はもう枯れてしまっています。ああ、昔の熱情のことを考えてみますと！　だれかが言いましたように、それはほんとにいい時でした。私は実に不幸でした！　今では私はもう、不幸であるだけの力ももちません。ただ一筋の細い生命があるばかりです。あえて結婚をしてみるだけの勇氣もありません。ああ、昔でしたら、昔でしたら！……私の知ってるどなたかがちよつと合図をしてくだすっていたら

！……」

「そしたら、そしたら、言ってください……。」

「いいえ、無駄むだですわ。」

「で、昔、もし私が……ああ！」

「え、もしあなたが……そんなことを私は何も申しはしません。」

「私にはわかっています。あなたは残酷です。」

「ただ私は昔狂人でした、それだけのことですよ。」

「それはなおひどい言葉です。」

「ねえあなた、私はあなたを苦しめるようなことは一言も申せないんです。だからもう何にも申しますまい。」

「でも、言ってください……。何か言ってください。」

「何を？」

「何かいいことを。」

彼女は笑った。

「笑っちゃいけません。」

「そしてあなたは、悲しんではいけません。」

「どうして悲しんではいけないんでしょう？」

「その理由がないんですもの、確かに。」

「なぜです？」

「あなたをたいへん愛してる女の友だちが一人いますから。」

「ほんとうですか。」

「私がそう申すのに、お信じなさらないのですか。」

「それをも一度言ってください。」

「それならもう悲しみなさいませんか。それでもう十分におなりになりますか。私たちのとつと貴い友情で満足できるようにおなりになりますか？」

「そうせざるを得ません。」

「ほんとに勝手な人ですこと！ それであなたは私を愛してるとおっしゃるのですか？」

ほんとうは、あなたが私を愛してくださいさるよりも、もっと深く私はあなたを愛していると
思いますわ。」

「ああ、もしそうだったら！」

彼はあまりに愛の利己心に駆られてそう言ったので、彼女は笑った。彼も笑った。彼は

なお執拗しつように言った。

「言つてください……。」

ちよつと、彼女は口をつぐみ、彼をながめ、それから突然、彼の顔に自分の顔を寄せて、接吻せつぶんした。いかにも不意のことだった。それは彼の心にひしと響いた。彼は彼女を両腕に抱きしめようとした。が彼女はもう離れていた。その客間の入り口に立っていて、彼女は彼をながめながら、口に指をあてて、「しッ！」と言つた——そして姿を隠した。

そのとき以来、彼はもう自分の愛を彼女に語らなかつた、そして彼女との関係も前ほど窮屈ではなくなつた。わざとらしい沈黙と押えかねた激情とが交互に起こつてくる状態だつたのが、今や単純なしみじみとした親しみとなつた。それこそ腹藏なき友情の恩恵である。もはや言外の意味を匂におわせることもなく、幻影もなく恐れもなかつた。二人はそれぞれ相手の心底を知っていた。クリストフが、癩しかくにさわる無関係な連中の中でグラチアといつしよにいて、客間の常例たるつまらぬ事柄を彼女が彼らと話してゐるのを聞いて、いらいらしだしてくると、彼女はそれに気がつき、彼のほうをながめて微笑ほほえんだ。それでも十分だった。彼は自分たち二人がいつしよにいることを知つた。そして心の中が和らいでい

った。

愛するものが自分の前にいると、人の想像力はその毒矢を奪われる。欲望の熱はさめる。愛するものを眼前に所有するといふ清浄な楽しみの中に、魂はうつとりと沈み込む。

——その上グラチアは、そのなごやかな性質の暗黙の魅力を、周囲の人々の上に光被していた。身振りや音調のあらゆる誇張は、それがたとい無意識的なものであっても、単純でなく美わしくない何かのように彼女の気を害した。そういうところから彼女はいつしかクリストフに影響を与えていった。自分の憤激に加えた嚙くつわみしめた後、彼はしだいにおのれを押えることができるようになり、いたずらな荒立ちに浪費されることのないだけにいつそう大きな力を、しだいに得てくるようになった。

二人の魂はいつしよに混和し合っていた。生の楽しみに身を投げ出して微笑ほほえんでるグラチアの半睡状態は、クリストフの精神力に触れて覚めていった。彼女は精神上の事柄に対して、前よりいつそう直接的な興味を覚えてきた。ほとんど書物を読まなかった彼女、と言うよりもむしろ、怠惰な愛着で同じ古い書物を際限もなく読み返していた彼女は、他の種々な思想に好奇心を感じ、やがてそのほうへひきつけられた。近代思想界の豊富さを彼女は知らないではなかったが、そこへ一人で踏み込んで行く気は少しもなかった。と

ころが今や自分を導いてくれる同伴者ができたので、もうその世界を恐がりはしなかった。若いイタリーの偶像破壊者の熱情を長い間きらっていた彼女は、拒みながらもいつしか知らず知らずに、その若いイタリーを理解するところまで引き入れられてしまった。

しかしこの魂の相互接触の恩恵は、ことに多くクリストフのためになった。人がしばしば見てとるとおり、愛においては弱い者のほうがより多く与える。それは強い者のほうが少なく愛するからではない。強いほどますます多く取ることを要するからである。かくてクリストフは、すでにオリヴィエの精神によつて富まされていた。しかしこんどの新しい神秘的結合は、それよりもさらに豊饒であつた。というのは、オリヴィエがかつて所無しなかつたまれな宝を、喜悦を、グラチアは彼にもたらしただつた。魂と眼との喜悦を、光明を。このラテンの空の微笑みは、ごく賤しいものの醜さをも包み込み、古い壁の石にも花を咲かせ、悲しみにさえもその静穏な光輝を伝えるのである。

彼女の伴としてはちようど初春があつた。新生の夢が、よどんだなま温かい空気の中に醸されていた。若緑が銀灰色の橄欖樹と交じり合つていた。溝渠の廢址の赤黒い迫持の下には白巴旦杏が咲いていた。よみがえつたローマ平野の中には、草の波と揚々たる罌粟の炎とがうねつていた。別墅の芝生の上には、紫のアネモネの小川と菫の池とが

流れていた。日傘ひがさのような松のまわりには藤がからんでいた。そして都会の上を吹き過ぎる風は、パラチーノ丘の薔薇ばらの香りをもたらしていた。

二人はいつしよに散歩した。彼女は幾時間も東洋婦人めいた惘然ぼうぜんさのうち沈み込んでいたが、それから脱することを承諾したときには、まったく別人になっていた。彼女は歩くのを好んだ。背が高く足が長くて、丈夫なしなやかな体軀たいくの彼女は、プリマチキオのディアナの姿に似ていた。——一七〇〇年代の燦然さんぜんたるローマがピエモンテの野蛮の波に沈んでしまった、あの難破の残留物とも言うべき別墅の一つに、二人はもつとも多くやって行つた。ことに彼らはマテイの別墅を好んでいた。それは古代ローマの岬みさきとも言うべきもので、寂然じゃくねんたるローマ平野の波の末がその足下で消えていた。二人はよく樾かしの並木道を歩いた。並木の奥深い丸天井の中には、はるかな青い丘陵が、美うらわしいアルバーノの山の続きが、鼓動してる心臓のように静かにふくらんでいた。ローマ人の夫婦墓が道に沿って並んでいて、その憂わしい顔と忠実な握手とを、木の葉がくれに示していた。二人は並木道のつきる所に、白い石棺を背にして、薔薇の青葉棚だんなの下にすわつた。前方には寂しい野が開けていた。深い平和だつた。懶ものうさに息もたえだえになつてゐるかのような泉が、ゆるやかに水をたれてささやいていた……。二人は小声で話し合つた。グラチアの眼は友

の眼の上に信じきつて注がれていた。クリストフは自分の生活や奮闘や過去の苦しみを語った。しかしそれらはもう悲しみの色を帯びてはしなかった。彼女のそばに彼女の視線の下にあると、すべてが単純で、すべてがあるべきとおりであつた……。彼女のほうでもまた話をした。彼は彼女の言つてることをほとんど耳にしなかつた。しかし彼女の考えは一つとして彼に働きかけないものはなかつた。彼は彼女の魂と結合していた。彼女の眼で物を見ていた。彼は至る所に彼女の眼を、深い火が燃えている彼女の静かな眼を見てとつた。古代の彫像のこわれかけてる美しい顔の中にも、その黙々たる眼の謎なぞの中にも、彼女の眼を見てとつた。羊毛のような糸杉のまわりや、光線に貫かれてる黒い光つた櫛かしわの木立の間に、情を含んで笑つてるローマの空の中にも、彼女の眼を見てとつた。

グラチアの眼を通して、ラテン芸術の意義が彼の心に沁しみみ込んできた。今まで彼はイタリーの作品には無関心でいた。この野蛮な理想主義者、ゲルマンの森からやって来た大熊まは、蜜みつのような美しい金色の大理石の快味を、まだ味わうことができなかった。ヴァチカン宮殿の古代像は明らかに彼と相いれなかつた。それらの間抜けた顔つき、あるいは柔弱なあるいは鈍重な釣り合い、平凡な丸っこい肉づき、それらのジトンや角闘者などに、彼は嫌悪けんおの念をいだいた。ようやくわずかな肖像彫刻に趣を見出したばかりだつた。

しかもそのモデルは彼になんらの興味をも起こさせなかった。また蒼白い洩め顔のフィレンツェ人や、貧血で肺病質で様子振り悩ましげな、病弱な貴婦人、ラファエロ前派のヴェーナスにたいしても、彼はやはりに氣むずかしかった。そして、シスチーナ礼拝堂の実例によつて世に盛んになった、汗をかいてる赤ら顔の豪傑や闘技者などの動物的な愚鈍さは、彼には肉弾のように思われた。ただ一人ミケランジェロにたいしては、その悲壯な苦悶や崇高な蔑視や貞節な情熱の真摯さなどのために、彼もひそかに敬意をいだいた。その青年らの謹厳な裸体、狩り出された獣のような荒くれた処女たち、悩める曙、子供に乳房をくわえられてる荒々しい眼つきのマドンナ、妻にもほしいような美しいリアなどを、彼はこの巨匠の愛と同じき純潔粗野な愛をもつて愛した。けれども、この苦しんだ偉人の魂の中に彼が見出したのは、ただ自分の魂の拡大された反響にすぎなかった。

ところがグラチアは新しい芸術の世界の扉を彼に開いてくれた。彼はラファエロやティツィアーノの崇厳な晴朗さの中に足を踏み入れた。形体の世界を征服し支配して獅子のように君臨してる古典芸術の天才の堂々たる光輝を彼は見てとつた。心の中までまつすぐにはいり込み、生命を覆うている朦朧たる霧を己が光輝でつん裂く、この偉大なるヴェネチア人の雷電的な視力——ただに他を征服することばかりではなく、おのれ自身を征服す

ることをも知っていて、勝利者たるおのれにもつとも厳格なる規律を課し、そして戰場においては、打倒されてる敵の遺物のうちから、おのれの戦利品を正確に選み取り持ち去ることを知っている、それらラテン精神の統制的威力——オリンピア的肖像やラファエロのヴァチカン宮殿壁画などは、ワグナーの音楽よりもいっそう豊富な音楽で、クリストフの心を満たした。晴朗な線と高貴な建築と調和せる群集との音楽。顔と手とかわいい足と衣裳と姿態との完全な美に輝いてる音楽。知力と愛。それら青春の魂と身体とから湧き出る愛の流れ。精神と意志との力。若々しい愛情と、皮肉な知恵と、有情な肉体の悩ましい温かい香りと、影が消え情熱が眠っている輝かしい微笑。日輪の車の馬のように猛り立ちながらも主人の穏やかな手に御せられてる生命の、振るいたったる活力……。

そしてクリストフはみずから尋ねた。

——彼らがなしたように、ローマの力と平和とを結合することは不可能であろうか？

現代においてはもつともすぐれた人々も、この両者の一方を望むときにはかならず他の一方をしりぞけている。ことにイタリー人は、プーサンやローランやゲーテが理解したあの調和にたいする官能を、もつとも多く失つてゐるかのように見える。彼らは今一度他国人から調和の価値を説き示されねばならないのか？……そしてその価値を、われわれ音楽家

にはだれが教えてくれるであろうか？ 音楽はまだ己おのがラファエロをもっていない。モーツアルトも一の少年にすぎないし、ドイツの小市民にすぎなくて、いらついた手と感傷的な魂とをもち、あまり多くの言葉を言いあまり多くの身振りをし、つまらぬことにしやべり泣きまた笑っている。またゴチック式のバツハも、禿はげ鷹たかと闘たたかつてるボンのプロメテウスたるベートーヴェンも、オツサ山の上にペリオン山をつみ重ねて天をののしつてるその子弟たる巨人族も、かつて神の微笑ほほえみを瞥べっけん見したことさえなかった……。

その神の微笑みを見て以来、クリストフは自分の音楽が恥ちずかしくなつた。いたずらな焦燥、誇大な熱情、不謹慎な訴えなど、自己の開陳、節度の欠如は、憐あわれむべきまた恥ちずべきものであるように思われた、それこそ、牧者なき羊の群れ、王なき王国であつた。――騒然たる魂の王とならなければいけない……。

この数か月の間、クリストフは音楽を忘れはてたかのようにだつた。彼は音楽の必要を感じなかつた。彼の精神はローマから受胎して懐妊めいざしていた。彼は夢幻と半酔との状態で日々を送つた。自然もちょうど彼と同じく、眼覚めざめの懶ものうさに快い眩暈めまいが交じる初春であつた。自然と彼とは、眠りながらもたがいなぞに抱きしめる恋人同士のように、からみ合つて夢みていた。ローマ平野の熱なつぽい謎なぞのうちに、彼はもはや敵意を感じなかつた。彼はその悲壯

美の主となっていた。眠れるデメーターを両腕に抱きかかえていた。

四月に、彼はある一連の音楽会を指揮に来てくれとの提議をパリーから受けた。それをよく調べもしないで彼は断わろうとした。けれどまずグラチアに話してみなければならぬと思った。彼は一身上のことについて彼女に相談するのが楽しみだった。それによつて彼女も自分と生活を共にしてるのだという気持がもてるのだった。

ところがこのたびは、彼女は彼にひどい失望を与えた。彼女はその事柄を落ち着き払つて問いただした。それから、承諾するようにと勧めた。彼は悲しくなった。彼女の冷淡を見せつけられたような気がした。

グラチアがそういう意見を与えたのは、おそらく不本意ながらであつたらう。しかしクリストフはなにゆえに彼女の意見を求めたのか？ 彼から一身上の決断を任せられたからには、彼の行動に責任を帯びてると彼女は考えた。たがいに思想を交換し合うことによつて、彼女は彼の意志に多少感染していた。彼は彼女に活動の義務と美とを示していた。少なくとも彼女はその義務を友のために是認していた。そして友に義務を欠かせたくなかつた。イタリーの土地の息吹いぶきに含まれていて、なま温かい南東風の陰險な毒のように、人

の血管の中にしみ込んで意志を眠らせる、この倦怠けんたいの力を、彼女は彼よりもよく知っていた。彼女はその凶悪な魅力を感じてしかも抵抗する元氣さえなかったことも幾度であつたらう。彼女の交際社会はみなその魂のマリアに多少ともかかつていた。もつとも強い人々も幾人かかつてそれに害せられた。それはローマの青銅の牝めす狼おおかみを腐蝕ふしょくしていた。ローマは死の匂においをたてている。あまりに墳墓が多過ぎる。ローマで暮らすよりもローマを通り過ぎるほうが健全である。ローマにおればあまりにやすやすと時代から脱する。洋々たる前途を有するまだ若々しい力にとつては、時代から脱することは危険な趣味である。グラチアは自分の周囲の世界が、芸術家にたいしては活気を与える環境でないことを知っていた。そして彼女は他のだれにたいするよりも多くの友情をクリストフにたいして言っていた。……（それをあえて自認し得たかどうかはわからないが）……けれど心の底では、彼が遠ざかることを嫌いやだとは思わなかった。悲しいかな彼は、彼女から愛されてるあらゆる性質によつて、その知力の過度の充実によつて、数年間蓄積されてあふれてる生の豊満によつて、彼女を疲らしていた。彼女の安静は乱されていた。そしてまたおそらく彼女は、彼の愛の脅威を常に感ずるので疲らされていた。その愛は美しく心打つものではあつたが、しかしまた執拗しつようなものであつて、それにたいして常に警戒していなければなら

なかつた。彼を遠くに離しておくほうが慎重な道だつた。彼女はそのことをみずからはつきり認めたくはなかつた。そしてただクリストフの利害だけを考へてゐるのだと思つてゐた。

彼女はりっぱな理由を見当たらないではなかつた。当時のイタリーでは音楽家は生活しがつたかつた。空氣が制限されてゐた。音楽家の生活は圧迫されてゐた。劇場の工場はその油濃い灰と焼けるような煙とを、以前は全ヨーロッパを香らせる音楽の花を咲かしてゐたこの土地に、まき広げてゐた。怒号者の仲間に加はることを拒む者、製作所にはいることができないかあるいはそれを望まない者は、流刑やまたは窒息的生活に処せられてゐた。天才は少しも涸渴こかつしてはいなかつたが、沈滞と破滅とに打ち任せられてゐた。クリストフが出会つた若い音楽家のうちには、この民族の流麗な楽匠の魂と、過去の賢明簡素な芸術を貫いてゐる美の本能とが、心の中によりがえつてゐる者も一人ならずあつた。しかし彼らに注意してくれる者はなかつた。彼らは演奏してもらふことも出版してもらふこともできないかつた。純粹な交響曲シンフォニーにたいしてはなんらの同情も寄せられなかつた。臙脂えんじを顔に塗つてゐない音楽にたいしては少しも聴衆がなかつた……。そこで彼らはただ自分のために歌つてゐたが、その落胆した声もついに消えていつた。歌つたとて何になるか？ 眠るべしだ……。クリストフは彼らを助けたくてたまらなかつた。そしてもし彼らを助けること

ができたとしても、彼らの猜疑さいぎ的な自負心はそれを受けいれなかった。いかにしようとも彼は彼らにとつて一の他国人だった。そして古い民族のイタリー人にとつては、他国人にたいする歓待の風習にもかかわらず、他国人はみな要するにやはり野蛮人なのである。自国の芸術の惨めみじさは自分たちの間だけで処置すべき問題だと彼らは考えていた。クリストフへ友情のしるしをしきりに見せながらも、彼を自分たちの仲間にはいらせなかった。——かくて彼はなんとすればよかったか？ 彼らと対抗して、そのわずかな日向ひなたの場所を奪い合うようなことは、さすがになし得なかった……。

それにまた、天才といえども栄養物なしには済ませない。音楽家は音楽を必要とする——聞くべき音楽と聞かせるべき音楽とを。一時の隠退は精神を強しいて沈思せしむるがゆえに有効ではある。しかし精神がふたたびそこから脱出するという条件においてである。孤独とつとは貴いものではある。しかしもはやそれから脱する力のない芸術家にとっては致命的である。たとい騒々しい不純な生であろうとも、己おのが時代の生を生きなければいけない、たえず与えて受けなければいけない、与えて与えてなお受けなければいけない……。イタリーは昔芸術の大市場であつたし、未来にもあるいはふたたびそうなるかもしれないが、クリストフがいたころはそうでなかつた。あらゆる国民の魂がたがいに交換される思想の市

場は、今や北方に存在している。生きんと欲する者はそこで生きるべきである。

自分のことばかりに没頭していたクリストフは、ふたたび雑踏中にはいるのが嫌いやだった。しかしグラチアは彼の義務を彼よりもいつそうはつきりと感じていた。そして彼女は自分についてよりも彼についていつそう求むるところが多かった。それはもちろん彼を自分よりも深く尊重してゐるからだつた。しかしまたそのほうがいつそう便利だからだつた。彼女は彼に自分の精力を譲り与えていた。そして自分には平静を保留していた。——彼はそれを彼女に恨むだけの勇気がなかつた。彼女はあたかもマリアのようでよい役回りをもつていた。人生においては各人それぞれの役目がある。クリストフの役目は活動することだつた。彼女のほうはただ存在してゐるだけで足りた。彼はそれ以上を少しも彼女に求めなかつた。

けれどただ、もしできるならば、彼女が彼のためにもつと少なく彼を愛し、彼女自身のためにもつと多く彼を愛すること、それが願わしかつた。なぜならば彼は、彼女がその友情において、彼の利害だけしか考えないほど利己心を欠いであることを、あまりありがたいとは思つていなかつた——彼自身では自分の利害なんかを少しも考えたくなかつたので。

彼は出発した。彼女から遠ざかった。しかし彼女から少しも離れはしなかった。古いにしえの遊
行詩人が言ったように、「魂の同意あらゆる限りは、人は愛する者のもとを離れず。」

二

彼はパリーに着いたとき胸せまる思いがした。オリヴィエが死んで以来パリーにもどるのはそれが初めてだった。かつて彼はこの町をふたたび見ようと思ったことはなかったのである。停車場から旅館へ行く辻馬車つじの中でも、彼はほとんど窓から外をながめかねた。初めの数日は室にこもったきりで、外に出る気になれなかった。戸口で自分を待ち受ける思い出が切なかつた。しかしその切なさは実のところどういうものだったろうか？ それを彼はみずからはつきり知っていたのだろうか。それは彼が信じたがってるように、生々たる顔をした思い出が飛び出してくるのを見る恐怖だったろうか。あるいはさらに悲しいことには、思い出が死んでしまつてるのを見出す恐怖だったろうか……。この新たな喪の悲しみにたいして、本能の半ば無意識的な策略がたてられていた。そのために彼は——（おそらく自分でもそれとは気づかなかつたらうが）——昔住んでいた町から遠い所に宿を選んでいた。そして、初めて街路を散歩したとき、管絃樂の下稽古したげいこを指揮しに音楽会

場へやつて行かねばならなかったとき、パリーの生活と接触したとき、彼はなおしばらくの間はみずから眼をふさぎ、眼につくものを見まいとし、昔見たものだけをしか断じて眼に入れまいとした。彼は前もつてみずから繰り返し言った。

——俺おれはそれを知っている、俺はそれを知っている……。

芸術界は政治界と同じく、昔ながらの偏狭な無政府状態だった。広場の上には同じ市いちが立っていた。ただ役者がその役目を変えてるだけだった。往時の革命者らは俗流の人となっていた。往時の超人らは流行児となっていた。昔の独立者らは現在の独立者らを窒息させようとしていた。二十年前の青年らは今はもう、昔彼らが攻撃していた老人らよりもいっそうはなほだしい保守者となっていた。そして彼らの批評は新進者らへ生きる権利を与えまいとしていた。表面上昔と何一つ異なつてはいなかった。

しかも実はすべてが変わつてしまつていた……。

わが友よ、お許してください。無音で過ごしたことをおとがめもなさらぬ御好意を感謝します。御手紙をほんとにうれしく存じました。私は恐ろしい混乱のうちに数週間を送りました。すべてが私に欠けていました。あなたからは別れてしまい、またこの地では、知人

らを失ったあとの恐ろしい空虚が控えていました。あなたにお話しした旧友たちはみないなくなっていました。フィロメール——（宴会の群集の間をうろついているうちに、私をながめてるあなたの眼に鏡の中で出会った、あの寂しいまたなつかしい晩、歌をうたった彼女の声を、あなたは覚えていられましょうね）——あのフィロメールは、自分の穏当な夢想を実現していました。少しばかりの遺産を受けて、今はノルマンデーに行っています。田地を少し持つて、自分でそれを管理しています。アルノー氏は隠退していました。アンゼールに近い故郷の小さな町に、夫婦してもどつています。私がかここにいた当時の有名な人たちは、たいてい死ぬか没落するかしています。ただ幾人かの老案山子かがしどもが、二十年前に芸術や政治上の一流新進者を気取っていた者どもが、同じ贖物にせものの顔つきで今日もまだいばつています。そういう仮面の連中以外には、私が見覚えのある者はだれもいませんでした。彼らは墳墓の上で没面してゐるような感じを私に与えました。それは実に嫌な感情でした。——その上、当地へ着いてしばらくの間、あなたの国の金色の太陽の光から出て来た私は、事物の醜さを、北方の灰色の光を、肉体的に苦しみました。どんよりした色の家並み、ある穹窿きゆうりゆうや堂宇の線の凡俗さ、今まで私の気に止まらなかったそれらのものが、ひどく私の気持を害しました。精神上の雰囲気ふんいきも私には、それに劣らず不愉快なもの

でした。

それでも、私はパリー人について不平を言うべき廉かどはありません。私が受けた待遇は昔受けたそれとは似てもつかないものでした。私は、不在のうちに、有名らしい者になったかのようなです。これについては何も申しません。私は有名ということの価値を知っていますから。この連中が私について言ったり書いたりしてくれる親切な事柄は、私の心を動かしません。私は彼らに感謝しています。しかしなんと申したらいいでしょうか？ 私は現在私をほめてる人々によりも、昔私を攻撃していた人々のほうに、より近い気がするのです……。その罪は私にあるのです。自分でもそれを知っています。私をしからないうでください。私はちよつと困惑を覚えました。そんなことは予期していなければならなかったことです。でも今では済んでしまいました。私は了解しました。そうです、あなたが私を人中に立ちもどらせたのは至当なことでした。私は孤独のうちに埋もれかかっていたのです。ツアラトウストラの真似まねをするのは不健全なことです。生の波は過ぎ去ります、われわれのもとから過ぎ去ります。もはや沙漠さばくにすぎなくなる時期が来ます。河流の所まで砂中に新しい水路を掘るには、幾日も労苦しなければなりません。——そのことも済みませんでした。私はもう眩暈めまいを覚えません。流れを結び合わせてしまったのです。私はながめてそし

て悟っています……。

わが友よ、このフランス人はなんとという不思議な民衆でしょう！ 二十年前に私は、彼らはもう駄目だと思っていました……。ところが彼らはまたやり出しています。私の親友のジャンナンがそれを予言したことがありました。しかし私は彼が空な幻うつろをかけてるのではないかと思ったのです。その当時どうしてそんなことが信ぜられましょう！ フランスは当時そのパリーと同じように、崩壊や漆喰しっくいや破れ穴でいっぱいでした。「彼らはすべてを破壊してしまつてる……なんとという破壊的な民族だろう！」と私は言っていました。——ところが彼らは海狸ビーバーのような民族です。廃墟はいきよの上を荒らしまわつてると思ふうちに、その同じ廃墟でもつて、新たな都市の土台を築いています。四方に足場が立てられる今となって、私にもそのことがわかつてきました……。

事が起こつたその時には、

馬鹿までそれを悟るとぞ……。

実を言えば、やはり同じフランス式の無秩序です。四方に入り乱れてる群集の中で、そ

れぞれ自分の仕事におもむいてる労働者の組を見分けるには、それに慣れなければなりません。御存じのとおり彼らは、何かするときにはかならずそれを屋根の上で叫ばずにはいられない連中です。また彼らは、何かするときにはかならず隣人のやつてることを貶けなさずにはいられない連中です。もつとも丈夫な頭の人をも当惑させるほどのものがあります。けれど私のように十年近くも、彼らのうちで暮らした者なら、もう彼らの喧騒けんそうに欺かれはしません。それが仕事に熱中する彼らのやり方であることに気づきます。彼らはしゃべりながら働いています。そしておのおのの仕事場で自分の家を建てながら、ついには都市全体が建てられるのです。もつともよいことには、建築の全体があまり不調和ではありません。彼らは相反した種々の問題をいくら主張しても、みんな同じようにでき上がってる頭をもっています。したがって、彼らの無政府状態の下には共通の本能がありますし、規律の代わりになる民族的論理があります。そしてこの民族的論理の規律は、結局、プロシア連隊の規律よりもいっそう強固であるかもしれませぬ。

同じ勢いが、同じ建設の熱が、至る所にこもっています。社会主義者や国家主義者が、ゆるんだ国権の機関を締め直そうと競って働いてる、政治界においても、または、ある者は特権者のために貴族的な旧館を建て直そうとし、ある者は民衆に開かれて集团的魂が歌

うべき大広間を作ろうとして、過去の改造者と未来の建設者とが共に働いてる、芸術界において、みなそうです。それにまたこの巧妙な動物らは、何をなさうと常に同じ巢ばかりを作るのです。海狸や蜜蜂みつばちのような彼らの本能は、いかなる時代にあつても、彼らに同じ動作をさせ、同じ形を見出させるのです。もつとも革命的な者もおそらく、みずから知らず知らずに、もつとも古い伝統に執着してゐる者かもしれません。産業革命主義者やもつとも特異な新進著作家などのうちに、私は中世紀の魂を見出したことがあります。

今や私は彼らの騒々しいやり方にふたたび馴なれましたので、彼らが働くのを愉快にながめています。けれどもうち明けて言いますと、私はあまりに年老いてる厭えんせい世家ですから、彼らのどの家にはいつても安楽な心地はしません。私には自由な空気が必要です。とは言え、彼らはなんとというりっぱな労働者であることでしよう！それが彼らのもつともすぐれた美点です。その美点のために、もつとも凡庸な者や腐敗した者までが奮起させられています。それにまた、彼らの芸術家らのうちにはなんとという美の官能があることでしよう！私はそれに昔はさほど気づきませんでした。あなたは私に物を見ることを教えてくださいました。私の眼はローマの光によつて開かれました。あなたの国の文芸復興期の人たちは、私にこの国の人々を理解さしてくれました。ドビュッシーの音、ロダンの像、シユ

アレスの句は、あなたの国の一五〇〇年代の芸術家らと同じ系統のものです。

それでも、私に不快なものが当地にはあまりないというのではありません。昔私をひどく怒らした広場の市の旧知を、私はふたたび見出しました。彼らは昔とほとんど変わってはいません。しかし私のほうは悲しいかな、すっかり変わってしまった。私はもう峻しはいけません。ゆんれつ 烈れつな態度をとり得ません。彼らのうちのだれかを苛酷かこくに批判したくなるときに、私はみずから言います、「お前にはそんな権利はない、お前は強者だと自信しているが、彼らよりもつとひどいことをしてきたではないか、」と。それからまた、無用なものは何一つ存在していないこと、もつとも下賤げせんなものも劇の筋書きのうちに一つの役目をもつてること、などを私は見てとることを覚えました。顔たいはい 廃はいした享樂家も悪臭紛々たる不道德家も、白蟻しろありの役目を果たしたのでした。ぐらついている家屋を建て直すにはまずそれをこわさねばなりませんでした。ユダヤ人もその神聖な使命に服従したのです。すなわち他の民族の間に他国の民衆として、世界の端から端まで人類統一の網を編む民衆として、いつまでも残っていることです。彼らは崇高な理性に自由な天地を与えんがために、各国民間の知的境界を打倒しています。われわれの過去の信仰を滅ぼし、われわれが愛する過去の人々を殺害する、皮肉な破壊者、最悪の腐敗者も、神聖なる事業のために、新しき生のため

に、みずから知らずして働いているのです。それと同様に、超国境主義の銀行家の恐ろしい利益心も、反対の立場にある革命者と相並んで、また幼稚な平和論者とはいっそうよく相並んで、世界の未来の統一を、幾多の災害の価によって、否^{いや}応^{おう}なしに築き上げています。

御存じのとおりに、私は年老いました。私はもう嚙^かみつきません。私の齒は磨滅^{まめつ}していません。芝居へ行きましても、私はもう無邪気な観客のように、役者をののしつたり^{はんぎや}逆^く者を侮辱したりはいたしません。

静けき優雅の君よ、私はあなたに自分のことばかり語りました。けれども、私はただあなたのことばかり考えています。私がいかに自分の自我をうるさがつてるかをあなたが知ってくださいたら！ 私の自我は圧制的で呑^{どん}噬^{ぜい}的なのです。それは神が私の首に結びつけた鉄^{てつ}枷^{かせ}です。どんなにか私はそれをあなたの足下に差し出したかったことでしょう！

でもそれはつまらない贈り物です……。あなたの足は柔らかい地面を踏むようにできおり、美妙的な音をたてる砂を踏むようにできています。私の眼に見えるあなたのなつかしい足は、アネモネの交^べじり咲^{しよ}いてる芝の上を、そぞろに通^とり過ぎてゆきます……。あなたはドリアの別墅^{べつしよ}にあの後また行かれましたか？）……するともうあなたの足は疲れます。

そしてこんどは、客間の奥のあなたの好きな隠れ場所で、読むでもない書物を手にして肱（ひじ）をつきながら、半ば横になつてゐるあなたの姿が、私には見えてきます。私がうるさい男なものだから、あなたは私の言うことなんかに注意を向けはなさらないが、それでも親切に耳を貸してくださいます。そして辛抱するために、ときどき、自分自身の考えにふけられます。けれどもあなたは愛想がよくて、ふと私の一言で遠い思いから我に返られると、私の氣に逆らわないように用心しながら、ぼんやりした眼に急いで気乗りの色をお浮かべになります。そして私も実はあなたと同じに自分の言つてることから遠く離れています。私も自分の言葉の響きをほとんど耳にしていません。あなたの美しい顔の上に現われる自分の言葉の反映を見守りながら、心の奥底では、あなたには言わない別な言葉を聴（き）いています。静けき優雅の君よ、私が口にしてゐる言葉と背中合わせのその言葉は、あなたの耳にもよくはいつています。けれどあなたはそれが聞こえないようなふうをされます。

これで筆止めます。間もなくまたお目にかかれることと思ひます。私はこの地でやきもきいたしますまい。音楽会が開かれてゐる今ではしかたありません。——お子さんたちの美しい小さな頬（ほお）に接吻（せつぶん）いたします。あなたから生まれたお子さんたちです。それで満足しなければなりませんから……。

「静けき優雅」の彼女は答えた。

わが友よ、あなたがよく思い出されましたあの客間の片隅かたすみで、私はあなたのお手紙を受け取りました。そして物を読むときによく私がいたしますように、お手紙をときどき休ませ、自分でもときどき休みながら、読んでゆきました。お笑いなすつてはいけません。それは手紙が長くつづくようにといたしたのですから。そういうふうにして私はあなたと午後じゆうを過ごしました。子供たちは私を読みつづけているのか尋ねました。私はあなたのお手紙だと申しました。オーロラは気の毒そうに手紙をながめまして、「こんな長い手紙を書くのはさぞ嫌いやなことでしょうね、」と申しました。それで私は、私があなたに罰の課業として手紙を書かしたのではなくて、私とあなたとはいっしょに話をしてるのだということを、彼女に言っつきかせました。彼女はなんとも言わないで私の言葉を聞いていましたが、それから弟といっしょに次の室へ行って、遊んでいました。しばらくたってリオネロが大声を出しますと、オーロラがこう申しているのが聞こえました。「騒いじ

やいけません。お母さまがクリストフさんとお話をしていらつしやるから。」

あなたがフランス人についておつしやつたことに、私は興味を覚えます、そして別に意外とは存じません。フランス人にたいするあなたの不当な御意見を私がたびたびとがめましたことは、覚えていらつしやいませうね。フランス人を愛さないということはできません。けれども彼らはなんとという^{れいり}惻愴な民衆でしょう！ 善良な心と強健な肉体とに救われている凡庸な民衆はいくらもあります。ところがフランス人は知力で救われております。知力は彼らのあらゆる弱点を洗い清めます、知力は彼らを生き返らせます。彼らは没落し倒壊し腐敗しているように見えるときにも、自分の精神から不断に湧^わき出している泉の中に、新しい若さをふたたび見出すのです。

私はあなたに小言^{こご}を申さなければなりません。あなたは自分のことばかり語るのを許してくれとおつしやいました。あなたはほんとに瞞着家です。少しも御自分のことを私に聞かしてはくさいません。あなたのなすつたことは何にも、あなたの御覧なすつたことは何にも、私に聞かしてはくさいません。従姉^{いとこ}のコレットが——（なぜあなたは彼女を訪^{たず}ねてはくさいのですか）——あなたの音楽会に関する新聞の切り抜きを送ってくれましたので、私はようやくあなたの成功を知ったのでした。そんなことをあなたはついで

に一言おつしやつたきりです。それほどあなたはいつさいのことに無頓着むとんじゃくなのでしようか？……いえそうではありません。成功したのは愉快だとおつしやつてください……。あなたには愉快なはずですもの。なぜなら第一に私に愉快ですから。私は悟りすましたあなたの様子を見たくはございません。あなたのお手紙は悲しい調子でした。それはいけません……。あなたが他人にたいしていつそう正当な意見をもたれるようになりましたのは、ほんとうによいことです。けれどもそれは、あなたがなすつてるように、自分は彼らのうちの劣等な者よりもいつそう劣等だと言つて、しおれ返る理由とはなりません。りっぱなキリスト教徒ならあなたをほめるかもしれません。けれど私はそれはいけないと申します。私はりっぱなキリスト教徒ではございません。私はまさしくイタリーの女ですから、過去を苦にすることは好みません。現在だけでたくさんです。あなたが昔どんなことをなすつたか、それを私はよく存じてはおりません。あなたはそれを少しばかりおつしやつたきりで、その他のことはみな私の推察です。それはあまりりっぱな事柄ではありませんでした。それでも私にはやはりあなたが貴いのです。ねえあなた、私ほどの年齢に達した女は、りっぱな男の方はたいがい弱いものだということをおつしやつておられます。その弱さを知らなかつたら、さほど愛せられるものではありません。昔なすつたことはもうお考えなさい

な。これからなさることをお考えなさいませ。後悔はなんの役にもたちませせん。後悔とはあとにもどることです。そして善においても悪においても、常に前へ進まなければいけません。前へ進め、サヴォア兵！ です。……あなたは、私があなたをローマへもどらせるともお思いになつてはしませんか。この地ではあなたのなさることは何にもありません。パリーにとどまつて、創作し、活動し、芸術的生活に交わりなさいませ。あなたが断念なさることを私は望みません。私はただ、あなたがりっぱなものをお作りなさること、それが成功を博すること、あなたが強くしつかりしていられて、同じ戦いをくり返し同じ苦難を通つてゆく、新しい若いクリストフたちをお助けなさること、それが望みです。彼らを捜し出し、彼らをお助けなさい。先輩の人たちがあなたに尽くしてくれたよりも、もつとよく、後輩の人たちに尽くしておやりなさい。——そして最後に、あなたの強者であることが私にもよくわかるように、あくまでも強者であられることを望みます。そのことが私自身にどんなに力を与えるか、あなたは夢にも御存じありません。

私はほとんど毎日のように、子供たちといつしよにボルゲーゼの別墅べつしよへまいります。

一昨日は、馬車でモーレ橋へまいりまして、それから徒歩でマリオ丘を一周しました。あなたは私の足を悪口おつしやいましたね。私の足はあなたに怒っております。——「ドリ

アの別墅を十歩も歩くとすぐに疲れてしまうなどと、あの方はまあ何をおっしゃるのだろう！ あの方は私を御存じないのだ。私が骨折るのをあまり好かないのは、怠け者だからで、できないからではない……。」「——ねえあなたは、私が田舎娘いなかむすめであることを忘れていらつしやいますのね。

従姉のコレットへ会いに行つてくださいますか。あなたはまだ彼女を恨んでいらつしやるのですか？ 彼女は本来はよい人でございますよ。そして今ではもうあなたのことを口癖のようにしております。パリーの婦人たちはあなたの音楽に気違ひのようになってるらしく思われます。私のベルンの熊くまがパリーの獅子ししとなるのはその心次第です。手紙をもらいにはなりませんでしたか。何かよいことを聞かされはなさいませぬでしたか。あなたは女のことを私に少しもおっしゃいませんでしたね。恋でもなすつてるのではありませんか。私にお聞かせくださいね。嫉妬しつとなんかいたしませんから。

あなたの友 グラチア

あなたは私がお手紙の最後の句に感謝してるとでも思つてはいられますか！ 皮肉なる優雅の君よ、あなたが嫉妬でもされたらほんとに面白いでしょうけれど。しかし嫉妬を

知るために私を当てにしていけません。あなたがおっしゃったとおり気違いであるパリ
ーの婦人たちに、私はなんらの興味をも覚えません。でもまったく彼女らは気違いでし
うか？ 自分では気違いになりたがっています。がそれはあまり気違いでないという証拠
です。彼女らが私を悩殺すると思われてはいけません。もし彼女らが私の音楽に無頓着で
あったら、それでもまだ魅力があるでしょう。けれど実際のところ彼女らは私の音楽を好
んでいません。それで幻がかけられるでしょうか。人に向かつてあなたを理解してると言
者があつたら、それはまさしくその人をけつして理解しているではありません……。

でも私のこの冗談をあまり真面目まじめにとつてはいけません。あなたにたいしていただいてる
感情のために、私は他の婦人にたいして不正な批判をくだしはしません。彼女らを有情の
眼で見なくなつてからは、ほんとうの同情をより多くいただくようになりました。われわれ
男子の愚かな利己心が、彼女らを賤いやしい不健全な半下婢かひの身分おとしに陥おとしれて、彼女らの不幸と
われわれの不幸とを共に醸かもし出し出してる、その状態から脱せんために、三十年來彼女らがな
してる大努力は、現代のもつとも高尚な事柄の一つであるように私には思われます。パリ
ーのような都会では、新時代の若い娘たちを感嘆することができません。その娘たちは、多
くの障害があるにもかかわらず、学問と資格とを得んがために、誠実な熱心をもって突進

しています。その学問と資格こそ、彼女らの考えによれば、彼女らを解放し、未知の世界の秘奥を開いてくれ、彼女らを男子と同等ならしむるものであります……。

もちろんそういう信念は、空想的でまた多少滑稽こっけいなものです。しかし進歩というものは、人の希望するがようには実現されるものでありません。また希望しなくてはなおさら実現されるものではありません。この婦人たちの努力も無効ではないでしょう。それは彼女らを、かつての偉大な世紀におけるがように、より完全により人間的になすでしょう。彼女らはもはや世の中の生きた問題に無関心ではなくなるでしょう。生きた問題に無関心であることこそ、慨嘆すべき呪のろわしいことです。なぜならば、家庭の義務にもつとも心を用いてる婦人でさえ、現代社会における義務を考える要はないと思うのは、許すべからざることですから。ジャンヌ・ダルクやカテリーナ・スフォルツアの時代の先祖たちは、そういうふうにしてはしませんでした。その後婦人はいじけてしまったのです。われわれ男子は婦人に空気と日光とを分かち与えませんでした。それで婦人はわれわれからそれを強しいて取りもどそうとしています。実に健気けんげな者ではありませんか！……もとより、今日戦つてゐる彼女らのうちの、多くの者は死ぬでしょうし、多くの者は迷うでしょう。危あぶない年齢期にあるのです。その努力はあまりに弱々しい力にとつては激しすぎます。植物でも長

く水を得ないでいるときには、最初の雨に焼きつくされる恐れがあります。しかしそれが
なんでしょう！ 進歩の賠償なのですから。後から来る者たちは彼女らの苦しみから花を
咲かすでしょう。現在戦っているこの憐れな処女たちは、たいてい結婚なんかしないでし
ようけれど、多くの子を生んだ過去の夫人たちよりも、未来にたいしてはいつそう多産で
しよう。なぜなら、彼女らから、彼女らの犠牲によって、新たなクラシック時代の女性が
出て来るでしょうから。

そういう勤勉な蜜蜂たちを見出す好機が得らるるのは、あなたの従姉のコレットの客間
においてではありません。どうしてあなたは私を彼女のところへ強いて行かせようとなさ
るのですか。でも私はあなたの命に服さなければなりません。それはありがたいこ
とではありません。あなたは私にたいする権力を濫用なさるというものです。私は彼女の
招待を三度断りました。そのうち二度は返事も出しませんでした。すると彼女のほうか
ら管絃樂の下稽古したげいこのおりに私をとらえに来ました——（私の第六交響曲をやっているとき
でした。）——幕間に彼女に会いましたが、彼女はやって来るとき、鼻をつき出して空気を
嗅かぎながら叫んでいました。「愛の香りがしている。ほんとに私はこの音楽が大好きで
す！……」

彼女は肉体的にも変わってしまいました。ただ瞳の脹れ上がった猫のような眼と、いつも動きを見せてる顰めた奇妙な鼻とだけが、昔のとおりです。けれどその顔は広くなり、頑丈な骨立ちになり、色艶がまして、丈夫そうになっています。戸外運動のために彼女は一変してしまったのです。無性に戸外運動にふけています。夫は御存じのとおり、自動車クラブと飛行クラブとの大立者の一人です。どんな遠距離飛行にも、空中や陸上や水上のどんな周遊にも、ストウヴァン・ドレストラード夫妻が加わっていないものはありません。彼らはいつも旅にばかり出ています。人と会話を交える隙なんかはありません。彼らの話題となるものはただ、競走や漕艇や蹴球や競馬ばかりです。それは社交界の一つの新しい連中です。ペレアスの時代は女にとつては過ぎ去ってしまいました。流行はもはや魂から離れています。若い女たちは戸外遊歩や日向の遊戯で焼けた赤い顔色をしています。男のような眼で人をながめます。多少荒っぽい笑い方をします。調子はいつも粗野に生硬になっています。あなたの従姉は時とすると、無作法なことを平気で口にしています。昔はほとんど食うか食わずだったのに、非常な大食になっています。なお習慣を守って胃の弱いことを並べたてていますが、それでもやはりごく健啖です。書物なんかは少しも読んでいません。この社会ではもう読書なんかは廃っています。ただ音楽だけ

が鼻^{ひいき}根にされています。音楽は文学の失^{しつちよう}寵にかえつて利を得た形です。疲れきつて、る彼らにとつては、音楽はトルコ風呂^{ぶろ}であり、なま温かい湯気であり、マッサージであり、長煙管^{ぎせる}です。思索の必要なんかはありません。それは戸外運動と恋愛との間の過渡期です。そしてまた一種の遊戯です。しかし美的娯楽のうちでももつとも広く知られてるのは、現在では舞踏^{ダンス}です。ロシア舞踏、ギリシャ舞踏、スイス舞踏、アメリカ舞踏、すべてのものがパリーで行なわれています。ベートーヴェンの交響曲^{シンフォニー}、アイスキュロスの悲劇、いともものどけきクラヴサン、ヴァチカン宮殿の古代像、オルフェウス、トリスタン、キリスト受難、体操、その他すべてのものが踊られています。彼らは逆上しています。

あなたの従姉^{いしこ}が、その審美心と戸外運動と実務の才（というのは、実務的能力と家庭的専横性とを彼女は母親から受け継いでいますから）のすべてを、いかにうまく調和させるかを見ると、実に不思議なほどです。そんなものを一つに混合することは考え得られません。しかし彼女はそれらを混合して平然としています。彼女は狂気に近い風変わりな性質でありながら明^{めいせき}晰な精神を失わないと同様に、自動車でめまぐるしく飛び回つても常に確実な眼と手とを失いません。まったく一個の女丈夫です。夫や来客や家人などすべてのものを旗鼓堂々と統率しています。彼女はまた政治にも関係しています。彼女は

「殿下」の味方です。と言って私が彼女を王党だと思ってるのではありません。それはただ彼女にとつては動き回る口実の一つにすぎません。そしてもう書物を十ページと読むこともないのに、アカデミーの選挙をしています。——彼女は私を保護してやろうという考えを起こしました。そんなことを私が好まないということはあなたもお思いなさるでしょう。そしてもっともたまらないことには、私はただあなたの言葉に従って彼女のところへ行きましたのに、彼女はもう私にたいして勢力をもつてると思い込んだのです……。私はその腹癒せはらひに、ありのままのことを言ってやりました。彼女はただ一笑に付し去つて、平然と私に答え返します。「彼女は本来はよい人……」とあなたは言われますが、まさしく、何か仕事さえしておればそうです。彼女は自分でそれを認めています。もう機械につき碎くべきものがなくなつたら、新たな材料をそれに与えるためにどんなことでもするでしょう。——私は二回彼女の家へ行きました。そしてもうこれからは行かないつもりです。二回行つただけであなたにたいする私の従順さを示すに十分です。あなたは私の死滅をお望みにはならないでしょう。私は彼女の家から出て来るときには、気持がくじけ砕けがっかりしています。二度目に彼女と会ったとき、私はその晩恐ろしく魘うなされました。彼女の夫となつてその生きた旋風に生しょうがい涯結びつけられてるところを夢みました……。馬鹿げた

夢で、彼女の實の夫はそんなことに苦しめられていないに違いありません。なぜなら、その家の中で見かけるすべての人たちのうちで、彼はおそらく彼女といっしょにいることがもつとも少ないようです。そして二人いっしょにいるときには、ただ戸外運動スポーツのことがばかり話しています。二人はたいへん気が合っています。

そういう人たちが、どうして私の音楽に成功を得さしたのでしょう？ 私はそれを理解しようとはつとめません。私はただ私の音楽が彼らに新たな刺激を与えたことと思います。彼らは私の音楽から手荒いものを受けて感謝しています。彼らは今のところ肉付きのよいたく体軀をもつてる芸術を好んでいます。しかしその中にこもつてる魂には夢にも気づきません。今日心酔していて明日は冷淡になり、明日冷淡であつて明後日は誹謗ひぼうするようになり、しかもけつして中の魂を知ることはありません。芸術家はみなそういう目に会わされるものです。私は自分の成功に幻をかけはしません。私の成功は長くつづくものではありません。そして彼らからきつとひどい報いを受けるでしょう。——まずそれまでの間、私は不思議なことを見せつけられています。私の崇拜者らのうちでもつとも熱心なのは……（多数のうちの一人としてあげるのですが）……あのレヴィー・クールです。昔私と滑稽こっけいな決闘をやつたあの好男子を、あなたは覚えていられるでしょうね。あの男が今では私の作

をまだ理解していない人々に教えをたれています。しかもきわめてよくやっています。私のことを云々^{うんぬん}するすべての者のうちで、彼はまだいちばん賢明です。他の連中がどれくらいの人か御判断に任せます。確かに私は傲慢するほどのことはありません。

私はみずから誇りたくありません。人がほめてくれるそれらの作品を聞くと、あまりに気恥ずかしくなります。私はその中に自分の姿を見てとり、そしてそれがりっぱだとは思われません。ほんとうに見ることを知ってる者にとつては、音楽の作品はなんとという無慈悲な鏡でしょう！ 彼らが盲目で聾であるのは幸いなるかなです。私の作品の中には自分の惑乱と弱点とが多くはいっていますので、時としますと、それらの悪魔の群れを世に放^{はな}つて悪い行ないをしてるように、我ながら思われることがあります。聴衆が落ち着いてるのを見ると初めて安堵^{あんど}します。彼らは二重も三重もの鎧^{よろい}をつけています。何物からも害せられることがありません。もしそうでなかったら私は天罰を受けることでしょう……。あなたは私が自分自身にたいしてあまりに厳格だとおとがめなさいます。けれどそれは、私ほどによく私自身を御存じないからです。人はわれわれがどういうものになつてるかを見てとります。しかしわれわれがどういうものになり得たろうかを見てとりはしません。そして人々がわれわれをほめるのは、われわれ自身の価値から来たところのものについてよ

りもむしろ、われわれを運ぶ事変やわれわれを導く力などから来たところのものについてです。私に一つの話述べさせてください。

先日の晩、私はある珈琲店コーヒーへはいました。この種の珈琲店では、変なふうにはあるがかなりいい音楽がやられています。五、六の楽器をピアノに添えて、交響曲シンフォニーやミサ曲オラトリオや聖譚曲などが演奏されています。ちょうどローマのある大理石細工商のうちで、暖炉の置物としてメデイチ礼拝堂を売つてると同じです。そんなことは芸術に役だつようです。芸術を世の中に普及させるためには、その合金の通貨を作らなければいけません。それにまたこれらの音楽会では期待が裏切られることはありません。番組は豊富で演奏は真面目まじめです。私はそこで一人のチェリストに会つて、交わりを結びました。彼の眼は不思議に私の父の眼を思い出させました。彼は私に身の上を語つてきかせました。彼の祖父は百姓であつて、父は北方のある村役場に雇われてる小役人でした。親たちは彼をりっぱな者に、弁護士になすつもりでした。そして近くの町の学校にはいらせました。しかし強健粗野な彼は、弁護士なんかになろうとする熱心な勉強には不適當でして、窮屈な所にじつとしてることができませんでした。彼は壁を乗り越えて外に出で、野の中を歩き回り、娘たちを追っかけ回し、自分のたくましい力を喧嘩けんかに費やしました。その他の時はただぼん

やり彷徨ほうこうして、とうていできもしないような事柄を夢みました。そしてただ一つ彼の心をひきつけるものがありました。それは音楽です。なぜだかは神にしかわかりません。彼の身内には音楽家は一人もいませんでした。ただ一人は大伯父おおおじだけが例外でした。この大伯父は多少調子の違った人物で、田舎いなかの変人とも言わべき人でした。そういう変人たちは、往々きわ際立つた知力と天性とをもちながら、傲然ごうぜんと孤立してうちに、狂的なくだらない事柄にそれを使ってしまふものです。ところでこの大伯父は、音楽に革命をきたすほどの新しい記号法を一つ——（それからなおも一つ）——発見したのでした。言葉と歌と伴奏とを同時にしるし得る速記法を見出したとまで自称していました。しかも自分では一度もそれを正確に読み返すことができなかったのです。家の者たちはこの好々爺こうこうやを馬鹿にしていましたが、それでもやはり自慢にしていました。「これは氣違じいい爺さんだ、けれど、天才であるかもわかつたものではない……」と皆は考えていたのです。——そしてたぶん彼から音楽癪おおいがその甥孫おひに伝わったのでしよう。その町ではどういふ音楽を聞くことができただでしょうか……。とは言え、悪い音楽もよい音楽と同じくらいに純潔な愛を人に起こさせるものです。

不幸なことには、音楽にたいする熱情なんかはその地方では認められなかったようです。

しかも少年の彼は、大伯父のような堅固な狂癪をもっていませんでした。彼は音楽狂の大伯父の労作を人に隠れては読みふけて、それが彼の不規則な音楽教育の根底となりました。彼は虚栄心が強く、父や世評の前におずおずしていましたが、成功しないかぎりには自分の野心をもらさないようにしました。フランスの多くの小中流人のうちには、気弱さのために、家の者たちの意志に反抗することができず、表面上それに服従して、自分のほんとうの生活のほうは、たえず人に隠れて営んでいるような者が、非常にたくさんありますが、善良な彼も家の者たちに圧迫されて、それと同じことをしました。自分の好む道へは進まないで、人から課せられた仕事へ趣味もないのにはいつてゆきました。けれどもその方面では、成功することも華^{はな}やかに失敗することもできませんでした。どうかこうか必要な試験にだけは及第しました。それによつて彼が見出したおもな利益は、田舎の社会と父親との二重の監視からのがれたことでした。法律はつくづく嫌^{いや}でしたから、それを自分の職業とはすまいと決心していました。しかし父が存命してゐる間は、あえて自分の意志を表明しかねました。断然たる処置をとるまでにはまだ時を待たねばならないことを、彼はおそらく苦にはしなかつたでしょう。将来自分のなすことやなし得ることなどをぼんやり空想して、一生を過ごしてしまうような者が世にはありますが、彼もその一人でした。さ

し当たり何にもしませんでした。新しいパリ―生活のために惑わされ酔わされて、若い田舎者の乱暴さで、女と音楽との二つの情熱にふけりました。逸楽と音楽会とのぼせ上がってしまいました。そして幾年も無駄むだに送って、自分の音楽教育を完成するような手段をも講じませんでした。猜疑さいぎ的な高慢心と独立的な短気な悪い性質とのために、なんらの稽古をもなしつづけることができず、だれにも助言を求めることができませんでした。

父が死んだときに彼はテミスとユステイニアヌスとを共に追っ払ってしまいました。そして作曲し始めました。けれど必要な技能を修得するだけの元気はありませんでした。怠惰な彷徨ほうこうと快樂の趣味との根深い習慣のために、真面目まじめな努力ができなくなっていたのです。物を感じることはきわめて鋭敏でしたが、思想は形式とともにすぐ逃げ去ってしまいました。そして結局平凡なことしか表現できませんでした。もっともいけないのは、この凡庸人のうちに何かある偉大なものが実際に存在していたことです。私は彼の旧作を二つ読んでみました。所々に奇警な觀念がこもっていて、しかもそれが荒削りの状態のままですぐに変形させられています。泥炭でいたん坑の上に鬼火が燃えてるようなものです……。そして彼は実に不思議な頭脳の所有者です。私にベートーヴェンの奏鳴曲ソナタを説明してくれましたが、その中に子供らしい奇体な物語があるのだと見ています。しかし彼は実に熱情家

で、どこまでも真面目な男です。ベートーヴェンの奏鳴曲のことを話すときには、眼に涙を浮かべます。愛するもののためなら死んでも恨みとしますまい。滑稽こっけいでまた人の心を打つ人物です。私は彼を面と向かつてあざけてやりたくなるかと思えば、すぐに抱擁してやりたくなるのが常です……。真底から正直な男です。パリーの各流派ほらの法螺ほらと虚偽の光栄とをひどく軽蔑けいべつしています——それでも、成功してる人々にたいしては、小中流人風の無邪気な感嘆の念をいだかせられるのです……。

彼はわずかな遺産を得ましたが、数か月のうちに早くもそれを使い果たしてしまいました。そして生活に困つてくると、こういう種類の人にありがちな罪深い正直さで、貧乏な娘を誘惑して結婚しました。彼女は音楽を愛してはしませんが、美しい声をもって音楽をやっていました。彼は彼女の声とチェロをひき覚えてる凡庸な才能とで生活しなければなりませんでした。もとより彼らはすぐにおたがいの平凡さを見てとって、たがいに我慢できなくなりました。女の児こが一人生まれました。父親はその娘に幻をかけました。自分のなれなかつたものに娘がなつてくれるだろうと考えました。娘は母親に似ていました。一片の才能もないピアノひきになりました。彼女は父を敬慕していて、父の気に入るように仕事を励みました。彼らは幾年もの間温泉町の旅館を回り歩いて、金銭よりもむしろ多

く恥辱を集めてきました。娘は病弱な上に過労のため死にました。細君は力を落として日に日にいらだたしくなりました。それは実に底知れぬ悲惨で、それから脱せられる望みもないし、とうてい実現できないとわかつてる理想にたいする感情のために、いつそうひどくなされてる悲惨でした……。

一 生しょうがい 涯がい 憂苦ゆうこの連続であるこの憐あわれな落伍らくご者を見ながら、わが友よ、私はこう考えたのです。「自分もこうなったかもしれないのだ。その男と自分との幼時の魂には共通の特質がある。そして身の上のある事件も似通っている。音楽上の思想にもある類似点が見出される。ただ彼の思想は途中で止まってしまっただけだ。自分が彼のように没落しなかったのは何によるのか？ もちろんそれは自分の意志によるのである。しかしまた人生の偶然事にもよるのである。またたとい意志だけだとしても、自分がその意志を得ているのは、ただ自分の価値だけによるのであろうか？ 否むしろ、自分の民族、自分の友人ら、自分を助けてくれた神、によるのではないだろうか？……」こういう考えは人を卑下させます。芸術を愛し芸術のために苦しんでるすべての人にたいして、兄弟らしい感じを起こさせます。もっとも低い者ともっとも高い者との間の距離は大きいものではありません……。

そこで私は、あなたが手紙に書かれていたことを考えました。あなたの言われるところ

は道理です。芸術家たる者は他人を助け得る間は隠退してはいけない。それで私は踏みとどまることにしましょう。当地やウィーンやベルリンなどで、一年のうち数か月は暮らすことにつとめましょう。それらの都会にふたたび住むことは苦痛ですけれど、しかし断念してはいけないのです。私は大して世の中に役だち得なくとも、そして実際役だちそうもありませんが、しかし当地に滞在することはたぶん私自身のためになるでしょう。そしてあなたがそれを望まれたのだと考えてみずから慰めましょう。それにまた……（嘘をつきたくありませんから申しますが）……私は当地が面白くなり始めています。さようなら、私の暴君よ。あなたは勝利を得ました。私はあなたの望まれてることをするようになってるばかりでなく、それを好むようにさえなっています。

クリストフ

かくて彼は踏みとどまった。半ばは彼女の気に入るためにであったが、また一方には、眼覚めてきた芸術的好奇心が、更新してる芸術を見てひきつけられたからだだった。そして彼は自分の見ることをなすことすべてを、頭の中でグラチアにささげていた。それを彼女に書き送った。彼女がそれに興味を覚えるだろうと考えるのは、自分の自惚れであることを

彼はよく知っていた。彼は彼女の多少の無関心に気づいていた。しかしそれをあまり見せつけられないのがありがたかった。

彼女は規則正しく半月に一回返事をくれた。彼女の挙措と同じように愛情深い慎ましい手紙だった。彼に自分の日常を語ってきかせながら、高くとまったやさしい控え目を失わなかった。彼女は自分の言葉がいかに激しく彼の心に響くかを知っていた。彼から激情の中へ引き込まれるのを欲しなかったので、彼を激情に狩りたてるよりも冷やかな様子をしたがよいと思っていた。しかし彼女は女だったから、友の愛を落胆させることなく、冷淡な言葉がひき起こす内心の失意を、すぐにやさしい言葉で癒してやるだけの秘訣を、知らないではなかった。クリストフはやがてそういう手段を察し知った。そして愛の狡猾な策略によつて、こんどは自分のほうでつとめて興奮を押しつけ、いっそう慎ましい手紙を書いて、彼女に遠慮しないで返事を書かせるようにした。

彼はパリーに長く滞在するに従つて、その巨大な蟻の巣を揺るがして新しい活動力に、ますます興味を覚えてきた。自分にたいする同情を若蟻らのうちに見出すことが少ないだけに、いっそう興味が深かった。彼の考えは間違っていないなかった。彼の成功はピュロス風の勝利だった。十年間姿を隠したあとでもどつてきたことが、パリー人らの心をそそった

のだった。しかし世に珍しくない皮肉な現象として、彼はこんどは軽薄才士や流行児などの旧敵によって保護された。芸術家は彼にひそかな敵意をいだいたり、あるいは彼を疑ったりしていた。彼はすでに過去のものとなつてゐる自分の名声によって、多くの作品によつて、熱烈な確信の調子によつて、真摯しんしの激しさによつて、人を威圧してゐるのだった。けれども、余儀なく彼を重んじてはいるものの、賞賛や尊重を彼から強しいられてはいるもの、人は彼を誤解してゐて少しも愛してはいなかった。彼は当時の芸術の圏外にあつた。一つの怪物であり、生きてゐる時代錯誤であつた。彼はいつもそうだつた。そして十年間の孤独はその対比をなお強めていた。彼がいない間に、ヨーロッパには、そしてことにパリーには、彼がよく見てとつたように、改造の仕事がなし遂げられていた。一つの新しい社会が生まれてゐた。理解よりも活動を欲し、真理よりも獲得に飢えてゐる、一つの時代が頭をもたげてゐた。この時代の人々は生きんことを欲し、たとい虚偽をもつてしても生を奪い取らんと欲してゐた。驕きょう慢まんの虚偽——民族の驕慢や、階級の驕慢や、宗教の驕慢や、文化や芸術の驕慢など、あらゆる驕慢の虚偽は、それが鉄の鎧よろいとなり、剣と楯たてとを供給し、彼らを保護して勝利のほうへ進ましむるならば、彼らにとつてはよいものとなるのであつた。それゆえまた、苦悩や疑惑の存在を思い出さすような苦しい大声を聞くのは、彼らに

は不愉快だった。彼らがようやくやくぬけ出してきた闇夜やみよを騒さわがしていた。風ひようふう、彼らがいかに否認してもなお世界を脅かしつづけている。風、それを彼らは忘れたがっていた。しかしその声を聞かないわけにはゆかなかつた。まだその声から遠ざかつていないのだった。そこで若い彼らは怒って顔をそむけた。そしてみずから耳を聳そずるために力の限り叫んだ。しかし声のほうはいっそう強く語っていた。それで彼らはその声を憎んだ。

クリストフのほうは反対に、彼らを親しげにながめた。一つの確信と秩序のほうへ世界がむりにも上昇するのを、彼は祝した。その動向のうちに故意の偏狭さがあるのを気にしなかつた。目的に向かつて直進せんとするときには、前方をまっすぐに見ていなければならぬ。彼自身は世界の転向する角のところすわって、後方には闇夜の悲壮な光輝を、前方には若々しい希望の微笑ほほえみ、清新な熱ねつっぽい曙あけぼのの漠ばくぜん然たる美しさを、樂しげにうちながめた。彼は振子の軸の動かない地点に身を置いているが、振子は動きだしていた。そして彼はその動きについて行くことをしないで、生の律動リズムの音に喜んで耳を傾けた。彼の過去の苦悶くもんを否定して彼らの希望に参加した。彼が夢想していたとおりに、あるべきこととはあるだろう。十年前に、闇夜と労苦とのなかでオリヴィエは——このゴールの憐あわれな小さな雄鷄おんどりは——その弱々しい歌で、遠い夜明けを告げたのだった。歌の主はもう世に

いなかつたが、その歌は実際に現われていた。フランスの庭のうちに小鳥どもが眼を覚ましていた。そしてクリストフは、復活したオリヴィエの声が、他の囀りを圧してひととき強く明らかに響くのを、突然聞きとつた。

彼はある本屋の店先で、一冊の詩集を何気なく読んでみた。著者はまだ彼が知らない名前だった。彼はある言葉に心を打たれてひきつけられた。まだ切つてない紙の間を読みつづけてゆくにつれて、聞き覚えのある声が、親しい顔たちが、そこに浮かんでくるような気がした……。彼は自分の感じることがなんであるかはつきりわからなかつたし、またその書物と別れる気にもなれないで、それを買い求めた。家に帰つてまた読み始めた。やはり気をひかれた。その詩の一徹な息吹きは、もろもろの広大な古来の魂——われわれが葉となり果実となつてゐるもろもろの巨大な樹木——もろもろの祖国を、幻覚者がみるような正確さで描き出していた。母なる女神の超人間的な顔貌が——現今の生者より以前にも存在し、以後にも存在し、ピザンティン式のマドンナに似て、麓には人間の蟻どもが祈つてゐる山岳のように高く君臨してゐるものの顔貌が——そのページから現われ出ていた。原始時代から鎗を交えて戦つてゐるそれらの偉大な女神らのホメロス式な決闘を、著者はほめ

たたえていた。それは実に永遠にわたるイーリアスであつた。トロイのそれに比ぶれば、アルプス連山とギリシャの小丘との対比に等しかった。

驕きょうまん 慢まん

と戦鬪行為とのそういう叙事詩は、クリストフの魂のようなヨーロッパ的魂には縁遠かつた。それでも、フランス魂の幻像——たて楯をもつてる窈窕ようちよう 窈窕ちようたる処女、闇の中やみに輝く青い眼のアテネ、労働の女神、類たぐいまれなる芸術家、または、喧騒けんそうしてる蛮人らを煌々こうこうたる鎗でなぎ倒す至上の理性など——のうちに明滅する、かつて愛したことのあ
る見馴なれた一つの眼つきを、一つの微笑を、クリストフは見てとつた。けれどその幻像をとらえようとすると、それはすぐに消え失うせてしまった。そして彼はいらだつてそのあとをいたずらに追つかけながら、ふとあるページをめくってみると、オリヴィエが死ぬる数日前に話してくれた物語を見出した。

彼は心転倒した。その書物の出版所に駆けつけて詩人の住所を尋ねた。出版所では慣例によつてそれを教えてくれなかつた。彼は腹をたてたがどうにもできなかつた。最後に年鑑によつて手掛りを得ようと思いついた。果たしてそれが見つかったので、すぐに詩人の家へやつていった。彼は何かしたくなるかどうかどうしても待つことができないのだった。

バティニョール町のある最上階だった。幾つもの扉とびらが共通の廊下についていた。クリス

トフは教わった扉をたたいた。すると隣の扉が開かれた。濃い栗毛の髪を額に乱し、曇った色艶をし、眼の鋭い顔のやつれた、少しもきれいでない若い女が、なんの用かと彼に尋ねた。疑念をいだいてるらしい様子だった。彼は訪問の目的を述べ、名前を尋ねられたのでそれを明かした。彼女は自分の室から出て来て、身につけてる鍵で隣の扉を開いた。しかしすぐには彼をはいらせなかった。廊下で待つてるようにと言って、自分一人中にはいりながら彼の鼻先に扉を閉めた。ついに彼はその用心のいい住居の中に通された。食事室になつて半ばがらんとした室を通った。破損した家具が少し並べてあるきりだった。窓掛もない窓ぎわに、十羽余りの小鳥が籠の中で鳴いていた。そのつぎの室の中に、一人の男が擦れ切れた長椅子の上に横たわっていた。そしてクリストフを迎えるために身を起こした。魂の輝きを浮かべてる憔悴したその顔、熱い炎が燃えてるピロードのような美しいその眼、惻然そうな長いその手、無格好なその身体、暖れた鋭いその声……クリストフは即座に見てとつた……エマニユエルを！ あ……罪はないが原因となつた不具の少年労働者。そしてエマニユエルのほうでもクリストフを見てとつて、にわか立ち上がった。

二人はしばし言葉もなかつた。二人ともそのときオリヴィエを眼の前に浮かべた……。

握手をすべきかどうか決しかねた。エマニユエルはあとに退るさがような身振りをしたのだった。十年たった後にも、ひそかな怨恨えんこんが、クリストフにたいする昔の嫉妬しつとの念が、本能の薄暗い奥から飛び出してきたのである。そして彼は疑い深い敵意ある様子でじつとしていた。——しかし、クリストフの感動を見てとったとき、二人とも考えている「オリヴィエ」という名前を、クリストフの唇くちびるの上に読みとったとき、彼はもう抵抗することができなかつた。自分のほうへ差し出されてる両腕の中に身を投じた。

エマニユエルは尋ねた。

「あなたがパリーに来ていられることは知っていました。けれどあなたは、どうして私を見つけて出されたのですか。」

クリストフは言った。

「君の最近の著書を読んだところが、その中から、彼の声を聞きとったよ。」

「そうでしょう？」とエマニユエルは言った、「あの人だとおわかりになったんですね。現在の私はみなあの人のおかげです。」

（彼はその名前を口に出すのを避けていた。）

やがて彼は陰鬱いんうつになつて言葉をつづけた。

「あの人は私よりあなたのほうを多く愛していました。」

クリストフは微笑ほほえんだ。

「ほんとうに愛する者は、より多くとかより少なくてかいうことを知るものではない。自分の愛する人たちすべてに自分の全部を与えるものだ。」

エマニユエルはクリストフをながめた。その意固地な眼の悲壮な真摯しんしさは、深い和らぎの色に突然輝かされた。彼はクリストフの手を取って、長椅子の上に自分のそばに彼をすわらせた。

二人はたがいの身の上を語り合った。エマニユエルは十四歳から二十五歳までの間に、いろいろな職業をやった。活版屋、経きよつじ師屋、小行商人、本屋の小僧、代言人の書記、ある政治家の秘書、新聞記者。……そしてどの職業にいても、彼は何かの方法を講じて熱烈に勉強した。時には、小男の彼の精力に感心した善良な人々の支持を得たが、またさらにしばしば、彼の困窮と才能とを利用せんとする人々の手にかかった。そして多くの苦しい経験を積み、虚弱な健康の残りを失っただけで、さほど悲観もしないで通りぬけてきた。古代言語にたいする特別な能力（古典崇拜の伝統が沁しみ込んでる民族においては、それは人が思うほど異常なものではないが）のために彼は、ギリシャ研究家である一老牧師の同情

と支持とを得た。彼はその研究をあまり進めるだけの隙を得なかつたが、それは彼のために精神の訓練となり文体の習得となつた。民衆の泥どろの中から出て来た彼の教育は、すべてその時々独習されたものであり、非常な欠陥を示してはいたが、それでも彼は、中流の青年が十年間の大学教育によつても得られないほどの、言辞上の表現の才と思想による形式の駆使とを、得てきたのだつた。彼はそれをオリヴィエのおかげだとしていた。他にも彼をもつと有効に助けてくれた者は幾人かいた。しかし彼の魂の闇夜の中に永遠の燈火を点じた火花は、オリヴィエから来たのだつた。他の人々はただその燈火に油を注いでくれたばかりだつた。

彼は言つた。

「私はあの人がこの世を去るときになつてようやく、あの人を理解し始めました。けれどもあの人が私に言つてきかしたことは、みな私の中にはいつていました。あの人の光は、かつて私から離れたことはありません。」

彼は自分の作品のことを話した。オリヴィエから譲り受けたと自称してゐる仕事のことを話した。すなわち、フランス人の精力の覚かくせい醒、オリヴィエがあらかじめ告げていた勇壮な理想主義の火種、などのことを話した。争闘の上を翔かけつて来るべき勝利を告ぐる高らかに

な声に、みずからなろうと欲していた。復活した己おのが民族の叙事詩を歌っていた。

その不思議な民族は、征服者たるローマの古着と法則とを己が思想に着せかけて、妙なほこ慢りを感じながらも、古いケルトの香気を幾世紀間も強く保存してきたのであった。そしてエマニユエルの詩は、まさしくその民族の所産であった。あのゴール人特有の大胆さ、狂気じみた理性と皮肉と勇壮との精神、ローマ元老院議員らの髻ひげをむしりにゆき、デルポイの寺院を略奪し、笑いながら天に向かって投なげ鎗やりを投ずる、あの高慢と馬鹿元氣との混合、などがまったくそのまま彼の詩の中に見えていた。しかしパリーの靴屋くつの小僧である彼は、鬢かつらをつけていた先人らがなしたように、また後人らがかならずなすだろうように、二千年前に死んだギリシヤの英雄らや神々の身体のうちに、自分の熱情を化身せしむることが必要だった。それは実に、自分の絶対要求と合致するこの民族の不思議な本能である。自分の思想を過去の時代の痕跡こんせきの上にすえながら、その思想をあらゆる時代に課そうとしてるがようである。そういう古典的形式の束縛はかえって、エマニユエルの熱情にいつそう激しい勢いを与えていた。フランスの運命にたいするオリヴィエの平静な信念は、その子弟たるこの青年のうちでは、行動を渴望し勝利を信じてる燃えたった信念に変わっていった。彼は勝利を欲し、勝利を眼に見、勝利を要求していた。その誇大な信念と樂觀的思

想とによつて、彼はフランス民衆の魂を奮起させたのだった。彼の書物は戦鬪ほどの効果があった。彼は懷疑と恐怖とからの出口を開いた。若い時代の人々は皆彼のあとにつづいて、新しい運命のほうへ飛び出していった……。

エマニユエルは話してゐるうちに興奮していった。眼は燃えたとてき、蒼あおざめた顔には赤味がさしてき、声は疝かんだか高たかになつてきた。その焼きつくすような情火とその薪まきになつてゐる惨みじめな身体との対照を、クリストフは眼に止めざるを得なかつた。そしてその運命の痛ましい皮肉にはあまり注意しなかつた。精力のこの歌人、果敢な遊戯と行動と戦争との時代を賞揚してゐるこの詩人は、少し歩いて息切れがし、質素な生活をし、きわめて厳格な撰生を守り、水を飲み物とし、煙草たばこを吸うことができず、女に近づかず、あらゆる情熱を内に蔵しながら、健康のために禁欲主義を事としなければならなかつた。

クリストフはエマニユエルを観察しながら、感嘆と親愛な憐れんびん憫びんとの交じり合つた気持ちを覚えた。彼はそれを少しも様子に示そうとはしなかつた。しかし彼の眼はそれを多少現わしてゐたに違ひなかつた。あるいはまた、脇腹わきに常に開いてゐる傷口をもつてゐるエマニユエルの自負心は、憎悪よりもいつそう嫌いやな憐れんびん愍びんの念を、クリストフの眼の中に読みとれるように思つた。そして彼の熱は突然さめた。彼は話しやめた。クリストフは彼をまた

打ち解けさせようとしたが駄目だった。彼の魂は扉を閉ざしてしまっていた。クリストフは自分が彼の気持を害したことに気づいた。

對抗的な沈黙がつづいた。クリストフは立ち上がった。エマニユエルは一言もいわずに扉口とぐちまで送ってきた。彼の足取りは彼が不具なことを示していた。彼はそれをみずから知っていたし、自負の念からそれを気にかけない様子をしていた。しかしクリストフから観察されてると考えて、ますます恨みの念を含んだ。

彼がクリストフと冷やかな別れの握手をかわしているとき、優美な若い婦人が訪れてきた。彼女は生意気な洒落者しやれを一人引き連れていた。クリストフはその男に見覚えがあった。芝居の初演のおりによくその男が微笑ほほえんだりしゃべったり、手をあげて挨拶あいさつをしたり、婦人たちの手に接吻せつぶんしたり、舞台前の自席から劇場の奥まで微笑を送ったりしてのを、クリストフは見かけたことがあった。そして名前を知らないのです、ただ「馬鹿者」だと呼んでいた。——その馬鹿者と連れの水とは、エマニユエルの姿を見て、追ついで従しゅう的な馴れ馴れしい言葉を述べたてながら、「親愛なる先生」のほうへ飛びついていった。クリストフは遠ざかりながら、ただいま用があつて面会できないと答えてるエマニユエルの冷淡な声を聞いた。そしてこの男の人をいやがらせる才能に感心した。無遠慮な訪問を与えに来

る富裕な軽薄才士らに嫌な顔をしてみせる理由が、彼にはよくわからなかった。彼らはいつぱな言葉や贅辞をやたらに振りまくではないか。しかしエマニユエルの悲惨を和らげようとは少しもしないのだった。セザール・フランクの有名な友人らがピアノの出稽古を少しも彼にやめさせようとはしないで、最後の日まで生活のためにつづけさせたのと、ちょうど同じであった。

クリストフはそれから何度もエマニユエルを訪れた。しかし最初の訪問のときのような親しみをよみがえらせることはできなかった。エマニユエルは彼に会って少しもうれしい様子を示さないで、疑念深い控え目を守っていた。ただ時とすると、才能の発露に駆られることがあった。クリストフの一言に奥底まで揺られた。そして夢中になって心の中を披瀝した。彼の理想主義はその隠れたる魂の上に、閃々たる詩の光輝を投げかけた。けれどもそれから突然彼はふたたび沈み込んだ。意固地な沈黙のうちに固くなった。そしてクリストフはふたたび敵対者を見出すのだった。

あまりに多くのことが二人を隔てていた。年齢の差異もその一つだった。クリストフは豊満な意識と自己統御とのほうへ進みつつあった。エマニユエルはまだ自己形成中であった。クリストフのいつの時代よりもいっそう渾沌としていた。彼の独特な風格は、たが

いに取り組み合つて種々の矛盾した要素から来ていた。遺伝的欲望にさいなまれてる性質を——（アルコール中毒者と売笑婦との子供を）——制御せんとなつて力強い堅忍主義、鋼鉄のような意志の轡くわの下に荒立つて熱狂的な想像力、どちらも広大な——（いずれが勝つともわからない）——利己心と他愛心、勇壮な理想主義と優秀な他人に病的な不安を覚える貪どんらん婪らんな名誉心。オリヴィエの思想や独立心や清廉などが彼のうちにあつたし、また彼は行動をけつしていやがらない平民的な活力によつて、詩的才分によつて、いかなる嫌悪けんおにも平然たるだけの厚顔さによつて、オリヴィエよりすぐれていたけれど、しかしアントアネットの弟たるオリヴィエの静朗さには、なかなか達することができなかつた。彼の性格には虚栄と不安とがあつた。そして他の人々の混濁がさらに彼の混濁に加わつていた。

彼は隣の若い女と落ち着かない共同生活をしていた。クリストフが初めて来たとき出迎えた女がそれだつた。彼女はエマニユエルを愛して、細心に彼のめんどうをみてやり、彼の生活を整え、彼の作品を写し直し、彼の口述を書き取つていた。彼女はきれいではなかつた。そして熱烈な魂をもつていた。平民の出であつて、長い間ボール紙工場の女工をし、つぎには郵便局の雇員になつて、その幼年時代に、パリーの貧しい労働者に通例な環

境に苦しんできた。魂も身体も他人といっしよにつみ重ねられ、疲労の多い仕事をし、たえず人中に混じり、空気もなく、沈黙もなく、一人きりのこともなく、思いを澄ますこともできず、心の神聖な隠れ場を保つこともできなかつた。けれども彼女は高慢な精神をもつていて、漠然^{ぼくぜん}たる真理の理想にたいして敬^{けい}虔^{けん}な熱情をいだいていたので、眼が疲れきるのもいとわずに、夜中、時とすると燈火もなく月の光で、ユーゴーのレ・ミゼラブルを写し取っていた。彼女がエマニユエルに会ったとき、エマニユエルは彼女よりもいっそう不幸で、病気にはかかるし生活の手段もなかつた。彼女は彼に一身をささげた。その情熱は彼女には最初のものであり、生涯^{しょうがい}にただ一度の恋愛だつた。それで彼女は飢えたる者の執念をもつてそれにすがりついた。その愛情は受けるよりも与えるほうが少ないエマニユエルにとつては、恐ろしい重荷だつた。彼は彼女の献身に心打たれてはいた。彼女は彼にとつて女友だちのうちのもつともよいものであり、彼を全世界とも見なして彼なしでは生きられないただ一人の者である、ということを知っていた。しかしその感情がまた彼を圧倒した。彼には自由が必要であり孤独が必要だつた。むさぼるように彼の眼つきを求めてる彼女の眼が、うるさく彼につきまとつた。彼は彼女に荒々しい口をきいた。「行つちまえ！」と言つてやりたかつた。また彼女の醜さや粗暴さにもいらだたせられた。

彼は上流社会を見たことはあまりなかったし、また上流社会にたいして多少軽蔑の念を示していた——（なぜなら、上流社会にはいつて自分の醜さと滑稽さとがいつそう目立つのを苦にしていたから）——けれども優美な姿態には感じやすかった。そして彼が自分の女の友にたいしていただいているのと同じ感情を、彼にたいしていただいている（それを彼は少しも気づかなかつたが）女たちに、心をひかれていた。彼は彼女に愛情を示そうとつとめた。しかしその愛情を実際にもつてはいなかつたし、たといもつていてもそれは無意識的な憎悪の激発によつてたえず暗くされた。そして彼は愛情を示すことができなかつた。彼は胸の中に、善をなしたいというりっぱな心をもつてはいたが、また悪をなしたがる暴虐な悪魔をもつていた。その内心の戦いと、自分の有利には戦いを終え得ないという意識とが、彼を駆つて暗黙な激昂に陥らしていた。そしてその飛沫をクリストフは受けたのだつた。

エマニユエルはまたクリストフにたいして、二重の反感をみずから禁じ得なかつた。一つは昔の嫉視から出てきたものだつた。（幼年時代のそういう熱情は、虜囚が忘れられたときにもなおその力が残存しているものである。）も一つは熱烈な国家主義から出て来たものだつた。前時代のすぐれた人々によつて考えられた正義や憐憫や人類親和などの夢

想を、彼はことごとくフランスのうちに化身せしめていた。他の国民の没落によって運命が栄えるフランスというものを、ヨーロッパの他のすべての国に対立さしてはいなかった。がフランスを他の国々の上に置いて、全部の国々の幸福のために君臨してゐる正当なる主権者——人類の指導者たる理想の剣としていた。フランスが不正を行なうくらいならば、むしろフランスが滅亡するほうが好ましかった。しかし彼はフランスにたいしていささかも疑念をもつていなかった。彼はその教養も心も徹頭徹尾フランス式であり、フランスの伝統だけに育てられていて、フランス伝統の深い理由を自分の本能のうちに見出していた。他国の思想を生真面目きまじめに否認して、それにたいして軽蔑けいべつ的な寛容さをいだいていた。もし他国人がその屈辱的な地位に甘んじないときには、憤慨の念をいだいていた。

クリストフはそれらのことをみな見てとつた。しかしもう年取っているし世馴よなれているので、それを少しも気にしなかった。その民族的傲慢ごうまん心は人の気を害するものではあつたが、彼は別に心を痛められはしなかった。彼は祖国にたいする赤子の愛から来る幻を考量してやって、神聖な感情の誇張を非難しようとは思わなかつた。その上に、自己の使命にたいする民衆の誇大な信念は人類のためになるものである。けれども、エマニュエルから遠く離れてる心地を起こさせるすべての理由のうちで、ただ一つ我慢しがたいものがあ

った。それはエマニュエルの声だった。その声は時とすると極度に鋭い音調に高まっていた。クリストフの耳にはそれがひどくさわった。彼は澁面をせずにはいられなかった。そしてエマニュエルにそれを見つけられないようにつとめた。彼は樂器の音を聞かずに音楽だけを聞こうと骨折った。この不具の詩人が、他の勝利の先駆として精神の勝利を描き出し、また、群集を奮起さして、歡喜せる彼らを、遠い空間のほうへ、あるいは來たるべき復讐ふくしゅうのほうへ、ベツレヘムの星のように引き連れてゆく、空中の征服を、「飛行の神」を、描き出すとき、いかに勇壯の美が彼から輝き出したことだろう！ けれども、そういう精力の幻影がもつてる光輝を見るにつけてもクリストフは、その危険を感じずにはいられなかった。その襲撃とその新しいマルセイエーズのしだいに高まる叫び声とが、どこにたどりつくかを予見せずにはいられなかった。彼は多少の皮肉をもつて（過去にたいする愛惜も未來にたいする恐怖もなしに）考えた、その歌は歌手が予見していない反響を伴うだろうということ、そして、消え失うせた広場の市の時代を人があこがれる日が来るだろうということ……あの当時人は実に自由であった。それは自由の黄金時代であった。人はもうけつしてそういう時代を知らないだろう。世界が向かって行きつつある時代は、力と健康と雄々しい活動との時代であり、またおそらく光榮の時代でもあろうが、し

かし冷酷な権力と偏狭な秩序との時代であった。その時代を、われわれはいくら希望どおりに、鋼鉄時代、クラシック古典時代、と呼んでも詮せんないことだ。偉大なる古典時代は——ルイ十四世もしくはナポレオンの時代は——遠くより見れば人類の絶頂のようにも思われる。そしておそらく国民はその国家的理想をそこにもっともりっぱに実現してるようである。しかしその時代の偉人らになんと考えていたかを尋ねてみるがよい。あのニコラ・プーサンはローマに立ち去つてそこで死んだではないか。彼はこの国では息がつけなかつたのである。またあのパスカルやラシーヌは世間に別れを告げたではないか。そして他にもとても偉大なる人々のいかに多くが、世に合わず迫害せられて孤独な生活を送つたことだろう！ モリエールのごとき人の魂の中にも多くの憂苦が潜んでいたではないか。——諸君があれば愛惜しているナポレオン時代にも、諸君の父祖はみずから幸福だと思いはしなかつたようである。そしてナポレオン自身も誤つた見解をもつてはいなかつた。彼は自分の死後に人々がほつと息をつくだろうことを知っていた……。皇帝の周囲にはいかに思想の沙漠さばくが横たわつていたことであるか！ それは広漠たる砂原の上に照るアフリカの太陽であつた。

クリストフは自分の考えめぐらしてゐることを少しも口に出さなかつた。それとなく匂わ

せるだけでエマニユエルを怒らせるに足りた。そして彼はもう二度とそれを繰り返さなかつた。しかし自分に自分の考えを押えても、エマニユエルは彼がそう考えてることを知っていた。その上クリストフが自分よりも遠くまで見通しておることをおぼ臆ろに意識していた。そしてますますいらだつばかりだった。若い人々は、自分の先輩から、二十年後には自分がどうなるだろうかを強しいて見させられるのを、許しがたく思うものである。

クリストフはエマニユエルの心中を読み取つてみずから考えた。

「彼にも理由がある。人は各自に信念をもっている。人の信じてることを信じてやらなければいけない。未来にたいする彼の信頼の念を私は乱したくないものだ！」

しかし彼が眼前にただでエマニユエルの心は乱れた。二つの人格がいつしよにいるときには、両者がいにおのれを潜めようといかに努めても、常に一方は他方を圧迫し、そして他方は屈辱の恨みをいだくものである。エマニユエルの高慢心は、クリストフの経験と性格との優越に苦しめられた。またおそらく彼は、クリストフにたいしてしだいに愛情が生じてくるのを押えてもいたであらう……。

彼はますます粗暴になつていった。とびら扉を閉ざしてしまった。手紙をもらつても返事を出さなかつた。——クリストフは彼に会うことを断念しなければならなかつた。

七月の初めとなった。クリストフはパリに数か月滞在して、多くの新しい観念を得たが友人をあまり得なかつたことどもを、考えまわしてみた。赫々たるしかもばかげた成功だった。弱められもしくは滑稽化された自分の面影を、自分の作品の反映を、凡庸な人々の頭脳の中に見出すこと、それは少しも愉快なことではなかつた。そして理解してもらいたい人々からは同感を寄せられなかつた。彼らは彼のほうから進んできても受けいれなかつた。彼は彼らの希望に自分も加わつてその味方の一人になろうといかに願つても、彼らの仲間にはいることができなかった。あたかも彼らの不安な自負心は、彼の友情をしりぞけて彼を敵とするほうを好んでるかのようだった。要するに彼は、時代の流れをやり過ごしてそれとともに移り行かなかつたし、またつぎの時代の流れからは好まれなかつたのである。彼は孤立していた。そして生涯涯それに馴れていたから別段驚かなかつた。しかし彼は今や、この新たな試みのあとに、スイスの草廬に立ちもどつて、近來ますますはつきりしてきたある計画の実現を待つことにしても、もうさしつかえあるまいと考えた。彼は年を取るに従つて、故郷の土地に帰り住みたい願ひに悩まされた。もう故郷にはだれも知人はなかつたし、この他国の都におけるほどの精神的縁故をも見出し得ないに違いな

かった。しかしそれでもやはり故郷であった。人は自分と血を同じゆうする人々に向かつて同じ考えをもてよとは求めない。彼らと自分との間には多くのひそかな繋がり^{つな}が存している。官能は同じ天地の書物を読むことを知っているし、心は同じ言葉を話している。

彼は自分の違算を快活にグラチアへ書き送って、スイスへ帰るつもりであると言った。そしてパリーを去る許可を戯れに彼女に求めて、翌週出発すると告げた。しかし手紙の終わりに、二伸としてつけ加えた。

——私は意見を変えました。出発を延ばします。

彼はグラチアに全然の信頼を寄せていた。もつともひそかな考えまでも打ち明けていた。それでも彼の心の奥には鍵^{かぎ}をかけた一つの室があった。それはただに自分自身ばかりでなくまた自分の愛した人々に関する、思い出の室であった。かくて彼はオリヴィエに関係する事柄は語らなかつた。その控え目は故意にしたものではなかつた。オリヴィエのことを彼女に語ろうとしても言葉が出なかつた。彼女はオリヴィエと面識もなかつたのである……

さてその朝彼がグラチアに手紙を書いていると、扉^{とびら}をたたく者があつた。彼は邪魔されたのを怒りながら行って開いた。十四、五歳の少年がクラフト氏を尋ねてきたのだつた。

クリストフは不平ながらも室に通した。少年は金髪で、青い眼をし、繊細な顔だちをし、背はそう高くなく、や瘦せた身体をしていた。クリストフの前にたたずんで、やや気おくれがしたように黙っていた。がすぐに気を取り直して、澄んだ眼を挙げてクリストフを珍しげにうちながめた。クリストフはそのかわいらしい顔を見て微笑ほほえんだ。少年も微笑んだ。

「ところで、」とクリストフは言った、「なんの用ですか。」

「私が来ましたのは……。」と少年は言った。

（彼はまたおどおどして、顔を赤め、口をつぐんでしまった。）

「あなたが来たことはよくわかっています。」とクリストフは笑いながら言った。「けれど、なんで来たのですか。私のほうを見てごらんなさい。私が恐こわいんですか。」

少年はまた微笑を浮かべ、頭を振って音った。

「いいえ。」

「豪えらい！……ではまず、あなたはどのような者であるか言ってごらんなさい。」

「私は……。」と少年は言った。

そして彼はまた言いやめた。彼の眼は不思議そうに室の中を見回していたが、その暖だ炉棚の上にオリヴィエの写真を一つ見つけた。クリストフは何気なく彼の視線の方向をた

どった。

「さあ、」と彼は言った、「元氣を出して！」

少年は言った。

「私はあの人の子供です。」

クリストフははつと驚いた。席から立ち上がって、少年の両腕をとらえて引き寄せ、しっかりとつかまえたまままた椅子いすに腰をおろした。二人の顔はほとんど触れ合った。そして彼は少年をじつと見守りながら繰り返した。

「君……君……。」

突然彼は少年の頭を両手にかかえて、額や眼や頬ほおや鼻や髪に接せつ吻ぶんした。少年はその激しい仕打ちに驚きかついやがって、彼の両腕から抜け出そうとした。クリストフはするままにさせた。そして両手に顔を隠し、額を壁に押しあてて、しばらくじつとしていた。少年は室の隅すみに逃げていた。クリストフは顔をあげた。その顔つきはもう落ち着いていた。彼はやさしい微笑ほほえみを浮かべて少年をながめた。

「君はほんとうにびっくりしたろうね。」と彼は言った。「許してくれたまえ……。ねえ、それも私が彼を深く愛してたからだよ。」

少年はまだ気が和らがないで黙っていた。

「君は実によく彼に似てる！」とクリストフは言った。「それでも私には君がわからなかった。何が違つてるのかしら？」

彼は尋ねた。

「君の名はなんというの。」

「ジオルジュです。」

「なるほど、私は覚えている。クリストフ・オリヴィエ・ジオルジュ……。何歳いくつになる？」

「十四です。」

「十四だつて！ そんなに昔のことだつたかしら？……私には昨日のことのように思える——あるいはいつとも知れない時のことのような気もする……。ほんとに君はよく似てる。同じ顔だちだ。同じ人で、でもやはり別な人だ。眼の色は同じだが、同じ眼じゃない。同じ笑顔で同じ口だが、同じ声音じゃない。君のほうがつつと丈夫だし、まっすぐな身体をしている。君のほうがつつと豊かな顔をしているが、でも君は彼と同じように顔を赤らめる。ここへ来てすわりたまえ、話をしよう。だれが君を私のところによこしたんだい。」

「だれでもありません。」

「君一人で来たのかい。どうして私を知ってるの？」

「あなたのことを聞きましたから。」

「だれから？」

「お母^{かあ}さんから。」

「ああ！」とクリストフは言った。「お母さんは君が私のところへ来たことを知ってるの？」

「いいえ。」

クリストフはちよつと黙った。それから尋ねた。

「君たちはどこに住んでるの？」

「モンソー公園のそばです。」

「歩いて来たの？ そう。かなり遠いのに。疲^{くたぶ}れたらうね。」

「私は疲れたことはまだありません。」

「それはけっこうだ。腕を見せてごらん。」

（彼はその腕にさわってみた。）

「君は丈夫な若者だ……。そして、なんで私に会いに来ようと思いついたの？」

「お父とうさんがあなたをいちばん好きだったからです。」

「彼女が君にそう言ったの？」

（彼は言い直した。）

「お母さんが君にそう言ったの？」

「ええ。」

クリストフは物思わしげに微笑ほほえんだ。彼は考えた。——彼女もそうなんだ！……いかに彼らは皆彼を愛していたことだろう！ それなのになぜ彼らはそのことを彼に示さなかったのだろうか？……

彼は言葉をつづけた。

「なぜ君は私のところへ来るのをこんなに長く延ばしたの？」

「私はもつと早く来たかったんです。でもあなたが会ってほくださらないだろうと思いましたが。」

「私！」

「何週間か前に、シュヴァイヤールの音楽会で、私はあなたを見かけました。あなたから少ししか離れてないところに、お母さんといっしょにいました。そして私はあなたに挨拶あいさつ」

をしましたが、あなたは眉まゆをしかめて横目で見られたきりで、答えてくださいませんでした。」

「私が君を見たって？……まあ、君にはそう思えたの？……私は君を認めはしなかったよ。眼が弱っているからね。眉をしかめるのはそのせいだよ。……いったい君は私を意地悪な男だと思ってるの？」

「あなたもやはり意地悪になろうと思えばなれる方だと、私は思います。」

「ほんとに？」とクリストフは言った。「それじゃあ、私が会ってはくれまいと君は考えてるのに、どうして思いきって来たんだい。」

「私のほうで、あなたに会いたかったからです。」

「そしてもし私が君を追い出してたら？」

「私はそんなことをさせはしなかったでしょう。」

彼は決意と当惑と喧嘩腰けんかとの入り交じった様子でそう言った。

クリストフは放笑ふきだした。ジョルジュも笑った。

「君のほうで私を追い出したろうというのかい……。そうだろう。元氣者だね！……いや確かに君はお父さんに似てやしない。」

少年の変わりやすい顔は曇った。

「私がお父さんに似ていないと思われませんか？ でもあなたは先刻……。では、お父さんが私を愛してくれなかったと思われませんか？ では、あなたは私を愛してくださいませんか？」

「私が君を愛することが、君のために何になるんだい。」

「たいへん私のためになります。」

「どうして？」

「私があなを愛してるからです。」

彼の眼や口や顔だちなどは、一瞬間のうちに種々雑多な表情の色を浮かべていた。四月の日に春風に吹かれて野の上を飛ぶ雲の影に似ていた。クリストフは彼の顔を見彼の声を聞いて快い喜びを感じた。過去の心痛から洗い清めらるるような気がした。自分の悲しい経験や試練や苦悩、またオリヴィエのそれらのもの、すべてが消え失せてしまった。オリヴィエの生命から萌え出たその若い芽生えのうちに、彼は真新しくよみがえった。

二人は話し合った。ジヨルジュはこの数か月前まではクリストフの音楽を少しも知らなかった。しかしクリストフがパリイに来てからは、その作品が演奏される音楽会に一度も

欠かしたことはなかった。クリストフの作品を語るときには、生き生きした顔をし輝かしくいこやかな眼をして、しかもその眼には今にも涙を浮かべそうだった。恋をでもしてようだった……。自分も音楽が大好きで作曲したい旨を彼はクリストフに打ち明けた。しかしクリストフは少し尋ねてみてから、彼が音楽の要素をさえも知っていないことに気づいた。そしてこんどは学問のことを聞いてみた。小ジャンナンは中学校にはいっていた。そしてあまりりっぱな生徒ではないと快活に自白した。

「君は何がいちばん得意なの？ 文学かそれとも理学かね？」

「どれもみなたいてい同じことです。」

「でも、どうして、どうしてだい？ 君は怠^{なま}け者なのかい。」

彼は率直に笑って言った。

「たぶんそうでしょう。」

それから打ち明けて言い添えた。

「だけど、そうでないと自分では知っています。」

クリストフは笑わずにはいられなかった。

「ではなぜ勉強しないんだい。何にも面白くないのかい。」

「いいえ、なんでも面白いんです。」

「ではどうして？」

「なんでも面白いんですが、時間がありません……。」「

「時間がないって？ ではいったい何をしてるんだい。」

彼は漠然^{ばくぜん}とした身振りをした。

「いろんなことをしています。音楽をやったり、運動をしたり、展覧会を見に行ったり、本を読んだり……。」「

「教科書を読んだほうがいいだろう。」

「学校では面白いものなんか読ませやしません……。それから、私たちは旅行もします。

前月は、オクスフォードとケンブリッジとの競争を見に、イギリスへ行きました。」

「そんなことをしてるから学問が進むんだ。」

「でも、学校にじつとしてるよりずっとよく物を知ります。」

「そしてお母さんは、それをなんと云ってるんだい。」

「お母さんはたいへん物がわかっています。私の望みどおりしてくれませう。」

「しよがないね！……私のような者を父親にもたなくって君は仕合わせだ。」

「あなたこそ私のような者を……。」

そのかわいげな様子には敵することができなかつた。

「そしてそれほど旅行家の君は、」とクリストフは言った、「私の国を知ってるかい。」
「知っています。」

「でも君はきつとドイツ語を一言も知るまい。」

「ところがよく知っています。」

「では少しためしてみようか。」

二人はドイツ語で話し始めた。少年は不正確なたどどしい話し方をしたが、それでもおかしなほど勢い込んでいた。きわめて伶俐れいりで利発だったので、理解する以上に推察していた。往々誤った推察をしては、自分の勘違いをまつ先に笑い出した。彼は熱心に自分の旅行や読書のことを話した。彼はたくさん書物を読んでいた。それも大急ぎな皮相な読み方であつて、中途半端に読んでゆき、読まないところは想像してゆくのだつたが、しかし至る所に感激の理由を捜し求めてる、鋭い清新な好奇心から常に狩りたてられてるのだつた。彼の話は一つの事柄からつぎの事柄へと飛んでいった。彼の顔は自分が感動した光景や書物のことを話しながら活気だつてきた。その知識はなんらの秩序もないものだった。

つまらない書物を読んでいくせにもっとも名高い作品を少しも知らないでいるのは、実に訳のわからないことだった。

「まあけっこうなことだ。」とクリストフは言った。「しかし君は、勉強しないでは何にもなれやしないよ。」

「なあに、私は何かになる必要はありません。金がありますから。」

「馬鹿な！ そうなると大事な問題だよ。なんの役にもたない何にもしない人間に、君はなりたいのか。」

「いえ私は反対になんでもしたいんです。一生しょうがい涯がい一つの仕事に閉じこもるのは馬鹿げています。」

「しかしそうでなくちやその仕事をりっぱになすことはできない。」

「よく人がそう言います。」

「なんだって、人がそう言うって？……いや、この私がそう言うのだ。私は自分の仕事をもう四十年も勉強してる。そしてようやくそれがわかりかけてきたのだ。」

「自分の仕事を学ぶのに四十年ですって！ ではいつになつてその仕事がやれるんでしよう？？」

クリストフは笑いだした。

「理屈屋のフランス人だね！」

「私は音楽家になりたいんです。」とジョルジュは言った。

「それじゃあ、君はもう音楽をやり始めても早すぎはしないから、私が教えてあげようか。」

「ええ、そしたらどんなにうれしいでしょう！」

「明日^{あした}来たまえ。君の価値をためしてみよう。もし君にそれだけの価値がなかったらピアノに手を触れることを禁ずるよ。もし君に能力があったら、君がなんとかなるように骨折ってみよう……。しかし言っておくが、私は君に勉強させるよ。」

「勉強します。」とジョルジュは大喜びで言った。

二人は翌日会うことにきめた。しかしジョルジュは帰ってゆく間ぎわになって、翌日もまたその翌日も、他に約束があることを思い出した。彼はその週の終わりにならなければ^{ひま}隙がなかった。そして二人は日と時間をきめた。

しかしその日になりその時間になると、クリストフは待ち^{ぼう}呆けをくわされた。当てがはずれた。彼はジョルジュと再会することに子供らしい喜びを覚えていた。ジョルジュの不

意の訪問は彼の生活を明るくしたのだった。彼は非常にうれしくなり感動して、その晩は眠れないほどだった。オリヴィエのことで自分に会いに来てくれたその若い友を、しみじみと感謝の念で思いやった。そのかわいい顔を思い浮かべては微笑ほほえんだ。その自然な性情、その愛あい嬌きよう、その意地悪げな生一本な率直さは、彼の心を喜ばせた。オリヴィエと友情を結んだ初めのころ彼の耳や心を満たした、あの幸福の羽音に、あの無音の陶醉に、彼はまた身を任した。そのうえさらに、生者の彼方かなたに過去の微笑を見てとるといふ、いつそう真摯しんしなほとんど宗教的な感情までが加わっていた。——彼はジョルジュを待った、その翌日も、また翌日も。しかしだれも来なかつた。詫わびの手紙さえ来なかつた。クリストフは寂しくなつて、少年を許してやるべき理由をみずから考えめぐらした。彼はどこにあてて手紙を出してよいかわからなかつた。少年の住所を知らなかつた。もし知っていたとしても、あえて手紙を出し得なかつたであろう。若者に熱中してる老人の心は、その若者を求むる情を示すことに、一つの羞しゆう恥ちを覚えるものである。若者のほうには同じ要求がないことを彼は知っている。その関係は両者の間では同等でない。自分のことを念頭に置いていない者に向かつて押し付けがましい態度をとることを、人は何よりも恐れるのである。いつまでたつても音沙汰おとさたがなかつた。クリストフはそれを苦しんだけれど、こちらから

進んでジャンナン親子に会おうとする手段を差し控えた。そして来もしない者を毎日待ち受けた。彼はスイスへ出発しなかった。夏じゆうパリーにとどまった。自分がばかげたことをしてるとは思ったが、もう旅をするのも面白くなかった。ただ九月になって数日間、フォンテーヌブローに行ってみた。

十月の末ごろ、ジョルジュ・ジャンナンが訪れてきた。彼は違約のことなんか少しも恐縮せずに平気で弁解した。

「来ることができなかつたんです。」と彼は言った。「そしてつきには、私たちはパリを発^たつてブルターニュに行つたものですから。」

「手紙くらい書けたらうに。」とクリストフは言った。

「ええ私は手紙を上げたかつたんです。けれど、ちつとも隙^{ひま}がありませんでした……。それに」、と彼は笑いながら言った、「忘れちゃつたんです。私はなんでも忘れちゃうんです。」

「いつ帰つて来たんだい。」

「十月の初めです。」

「そして三週間もかかつて、ようやく私のところへ来ようと決心したんだね……。ねえ、

うち明けて言つてごらん。お母さんが引き止めたんだらう……お母さんは君が私に会うのを望まないんだろう？」

「いいえ、あべこべです。お母さんから言われて今日来たんです。」

「どうしてだい。」

「この前休暇前にあなたにお会いしたとき、私は家に帰つてすっかり話しちやったんです。それはよかつたとお母さんは言いましたよ。そしてあなたのことを知りたがつて、いろんなことを尋ねました。三週間前にブルターニュから帰つてくると、お母さんはまたあなたのところへ行けと勧めるんです。一週間前にもまた言い出しました。そして今朝、私がまだ行つていないことを知ると、きげん機嫌を悪くして、昼食のあとにすぐ行つて来いと言つたんです。」

「そして君はそんなことを私に話してきまり悪くないのかい。君は人に強いられて私のところへ来たのかい。」

「いえいえ、そう思つちやいけません……。ああ、あなたは私を怒っていますね。ごめんなさい……。まったく、私はうっかり者です。私をしかられてもいいが、恨んではいけません。私はあなたがほんとうに好きなんです。もし好きでなかつたら、けつして来やしま

せん。人に強いられたんじやありません。第一私は、自分のしたいことをしか人に強いられやしません。」

「しようのない人だね！」とクリストフは我にもなく笑いながら言った。「そして音楽をやる計画は、いったいどうしたんだい。」

「ああ、やはり考えていますよ。」

「考えていたって進歩するものか。」

「今からやり始めるつもりです。この数か月間はできなかつたんです、たくさん仕事があつたんですから。でも今なら、ほんとに勉強してお目にかけます。あなたがまだ私を相手にしてくださるなら……。」

(彼は甘つたれた眼つきをしていた。)

「君は茶番師だ。」とクリストフは言った。

「あなたは私の言うことを真面目まじめにとつてくださらないんですね。」

「そうさ、真面目にとるものかね。」

「困つちまうなあ！ だれも私の言うことを真面目にとつてはくれません。私はがっかりしてゐるんです。」

「君が勉強するのを見たら、真面目にとってあげるよ。」

「じゃあすぐにやりましょう。」

「今は隙ひまがない。明日にしよう。」

「いえ、明日じゃあまり長すぎます。私は一日でもあなたに軽蔑けいべつされるのを我慢できません。」

「困るなあ。」

「お願いしますから……。」

クリストフは自分の気弱さを微笑ほほえみながら、彼をピアノにつかして、音楽の説明をしてみた。いろいろ問いをかけてみた。和声ハーモニーのちよつとした問題を解かしてみた。ジョルジュは大して知ってはいなかった。しかしその音楽的本能は多くの無知を補った。クリストフが期待してる和音を名前も知らないでも見つけ出した。そして誤りまでが、その無器用さのうちにも、趣味を求むる心と妙に鋭い感受性を示していた。彼はクリストフの注意を議論せずには受けいれなかった。そして彼のほうからもち出す伶俐れいりな質問は、芸術を口先だけで唱える信仰の文句として受けいれられないで、自分自身のために芸術に生きようとする、一つの真摯しんしな精神を示していた。——二人は音楽のことばかりを話しはしなかつ

た。和^{ハーモニー}声^ニに関してジョルジュは、絵画や風景や人の魂のことなどをもち出した。彼を制御するのは困難だった。たえず道のまん中へ引きもどさなければならなかった。そしてクリストフのほうにも、常にその勇気があるわけではなかった。機知と生気に満ちてる少年の愉快な饒^{じょうぜつ}舌^つを聞くのが、彼には面白かった。この少年とオリヴィエとはいかに性質が異なっていたことだろう!……オリヴィエのほうでは生命は、黙々として流るる内部の河であった。ジョルジュのほうでは、生命はすべて外部にあって、日の下で遊び疲れる気まぐれな小川であった。それにしても、どちらもその眼と同じように美しい清い水だった。クリストフは微笑^{ほほえ}ましい心持で、ジョルジュのうちに見出した、ある種の本能的な反感を、自分がよく知ってるあの嗜好^{しこう}と嫌^{けん}厭^{えん}とを、そしてまた、無邪気な一徹さを、愛するものに傾倒してしまふ心の寛大さを……。ただジョルジュはあまりに多くのことを愛していたので、同じ一つのを長く愛するだけの隙^{ひま}がなかった。

彼は翌日もまたやって来たし、それから引きつづいて毎日やってきた。彼はクリストフにたいする若気の美しい情熱に駆られ、熱狂的に稽古^{けいこ}を励んだ……。——それから、熱狂は弱つてき、やって来ることも間遠^{まとお}になった。だんだん来なくなつた……。つぎにはまったく来なくなつた。そして幾週間も姿を見せなかつた。

彼は軽率で、忘れっぽくて、無邪気な利己主義者で、しんから人なつこかった。やさしい心と活発な知力とをそなえていて、それを日に日に少しずつ使い果たしていた。彼を見ると愉快だったから、だれでも彼に万事を許してやった。彼は幸福だった……。

クリストフは彼を批判すまいとした。そして不平を言わなかった。彼はジャックリーヌに手紙を書いて、子供をよこしてくれたことを感謝しておいた。ジャックリーヌは感動を押えつけた短い返事をくれた。ジョルジュに同情を寄せて世の中に導いてくれと、彼に願った。彼に会うことについては一言も述べなかった。憚はばかられる思い出と矜きようじ持とのために、彼に会おうと決心することができなかった。そしてクリストフのほうでは、彼女から招かれないかぎりはやって行けないと思った。——かくて彼らはたがいに離れたままでいて、ときどき音楽会で遠くから認め合ったり、少年のときおりの訪問で結ばれたりするきりだった。

冬は過ぎ去った。グラチアはもうまれにしか手紙をくれなかった。彼女はクリストフにたいして忠実な友情をなおいだいていた。しかしきわめて感傷的でなくて現実に執着する真のイタリー婦人だったから、多くの人に会わずにはいられなかった。それは彼らのこと

を思うためではないとしても、少なくとも彼らと話をする楽しみを得んがためであった。またときどき眼の記憶を新たにしなければ、心の記憶は消えがちだった。それで彼女の手紙はしだいに短くなり疎遠になった。クリストフが彼女を信じてると同様に、彼女もなおクリストフを信じてはいた。しかしその信頼は熱よりもむしろ光を多く広げるものであった。

クリストフはその新たな違算を大して苦しみはしなかった。音楽的活動は彼を満たすに十分だった。ある年齢に達すると、強健な芸術家は自分の生活のうちによりも多く自分の芸術のうちに生きる。生活は夢となり、芸術は現実となる。パリと接触して、クリストフの創作力は眼覚めたのだった。この勤勉な都会たるパリーの光景ほど、人に強い刺激を与えるものはない。もつとも冷静な者もその熱に感染する。健全な孤独のうちに多年休息してきたクリストフは、費やすべき多量の力をもつて来ていた。フランス精神の勇敢な好奇心が音楽技術の世界にたえずなしつづけている、種々の新しい獲物に彼は富ませられて、こんどは自分でも発見の道に突進していった。そして彼らよりもいっそう猛烈で野蠻だったから、彼らのだれよりもさらに遠くへ進んでいった。しかしその新たな冒険においては、もはや何一つ本能の偶然に委ねられたものはなかった。彼はもう明確の要求に支配されて

いた。彼の天才は生涯しょうがい中、ある交流的律動リズムに従ってきたのだった。一つの極端から他の極端へと代わる代わる移っていつて、両者の間のすべてを包括することが、彼の掟おきてであった。前期において彼は、「秩序の覆面を通して輝く渾沌の眼」に熱中した後、その眼をなおよく見んために覆面ヴェールを引き裂こうとした刹那せつな、このたびはその蠱惑こわくから脱せんといつとめ、主宰的精神の魔法の網を、スフィンクスの顔にふたたび投げかけようとしていた。ローマの帝王的息吹いぶきが彼の上を吹き過ぎたのだった。彼が多少感染してゐる当時のパリー芸術と同様に、彼は秩序を追い求めていた。しかしワルシャワにおける秩序をではなかつた——自分の睡眠を護まもることに残りの精力を使い果たす、あの疲れた反動保守家らとは異なつていた。それら人のよい連中は、サン・サーンスやブラームスに立ちもどるのである——慰安を求めて、あらゆる芸術のブラームスに、主題の堡壘ほうらいに、無味乾燥な新古典主義に。彼らは熱情に欠けると言つてはいけぬ。諸君とても、すぐに疲憊ひはいしてしまうではないか。……否、予が説くのは諸君の秩序をではない。予の秩序は諸君のそれと同様のものではない。予の秩序は、自由なる熱情と意志との調和のうちにある秩序である……。

クリストフは自分の芸術のうちに、生のもろもろの力の正しい平衡を維持しようとしてくふうしていた。鳴り響く深淵しんえんからほとばしり出させた、あの新しい和音、あの音楽の魔物、

それを彼は用いて、明快な交響曲シンフォニーを、丸屋根のあるイタリー大寺院のような広い明るい建築を、うち建てようとしていた。

そういう精神の働きと戦いとは、冬じゆうつづいた。時とすると夕方、彼は一日の仕事を終えて、日々の総和を顧みながら、それが長い間であつたかあるいは短い間であつたかみずからわからなかつたし、自分がまだ若いのかあるいはごく年老いたのかみずからわからなかつた。とは言え、その冬は早く過ぎ去つた。

すると、人間の太陽の新たな光が、夢の覆面を貫いて射さしてき、またもや春をもたらしてきた。クリストフはグラチアから手紙をもらつて、彼女が二人の子供といつしよにパリへ来る由を知らせられた。長い前から彼女はその計画を立てていた。従姉いとこのコレットからしばしば招かれたのだつた。けれども、自分の習慣を破り、呑気のんきな平和を見捨て、愛するわが家を去つて、よくわかつてるあのパリーの喧騒けんそうの中にはいるという、それだけの骨折りを彼女は恐れて、一年一年と旅を延ばしたのだつた。ところが、その春はある憂愁に襲われ、おそらくあるひそかな失意を感じて——（およそ女の心のうちには、他人には少しもわからないが、また往々彼女自身もそれと自認しないが、いかに多くの暗黙のロマ

ンスが存在してることだろう！——彼女はローマから離れたい気になった。流行病の脅威は、子供たちの出発を早めるための口実となった。彼女はクリストフへ手紙を出して幾日もたたないうちに、すぐそのあとを追って出発した。

クリストフは彼女がコレットの家に到着したことを知るや否や、すぐに会いに行った。彼女の心はまだぼんやりして遠くにあった。彼はそれが辛^{つら}かったけれど、様子には現わさなかつた。彼はもう今では自分の利己心をほとんど殺していた。そのため心の明察力が生じていた。彼は彼女が隠したがってる悲しみをもってるのを悟った。けれどそれがなんの悲しみであるか知ろうとはしなかつた。そしてただ自分の失敗を快活に話したり、自分の仕事や計画を言つてきかしたり、遠慮深く彼女を愛情で包み込んだりして、その悲しみから気を晴らさせようとした。押しつけがましいことを恐れてるその大きな愛情に彼女は心打たれた。自分の悲しみを彼から察せられることを直覚して心を動かされた。やや憂いに沈んでる彼女の心は、二人に関すること以外の事柄を話してくれてる友の心のうちに身を休めた。そしてしだいに彼は、彼女の眼から憂鬱^{ゆううつ}な影が消えてゆくのを見、二人の視線がますます近づいてゆくのを見てとつた。……そしてある日……彼は彼女に話をしながら、突然言葉を途切らして、黙って彼女をながめた。

「どうなさいましたの？」と彼女は尋ねた。

「今日、」と彼は言った、「あなたはすっかり私のところにもどって来られたんです。」
彼女は微笑^{ほほえ}んで、ごく低く答えた。

「そうです。」

落ちていて話をすることはあまりできなかった。二人きりのときはごくまれだった。コレットは二人が望む以上に始終そばにいた。彼女はいろんな欠点があるにしてもやはりよい人物で、グラチアとクリストフとを心から好きだった。けれど自分が二人の邪魔になつていようとは思いつかなかつた。彼女は彼女のいわゆるクリストフとグラチアとの艶^{つやご}事^となるものをよく見てとっていた——（彼女の眼はなんでも見てとつた。）そして艶事は彼女の畑だったので、非常に面白がつた。ますます勢いづけてやりたかつた。しかしこれこそ二人が彼女に求めない事柄だった。無関係なことに干渉してもらいたくなかつた。彼女が姿を現わすだけで、あるいは控え目な（出すぎた）言葉で二人のいずれかにその愛情^{ほの}を仄めかすだけで、二人は冷やかな様子をして他の事柄を話した。コレットはそういう遠慮のあらゆる理由を捜し回したが、ほんとうの理由には考え及ばなかつた。二人にとって幸いなことには、彼女は席にじつとしてることができなかつた。行ったり来たりし、室

から出たりはいたりして、一時にいろんなことをやりながら家の中の万事を監督していた。そして彼女のいなくなつた合い間に、クリストフとグラチアとは、子供だけしかそばにいないので、また無邪気な話を始めるのであつた。二人は自分たちを結びつけてる感情のことはけつして話さなかつた。日々の些細な出来事を包まず打ち明け合つた。グラチアは女らしい興味をもつてクリストフの家庭内のことを尋ねた。彼の家の中では万事がうまくいつていなかつた。彼はいつも家事女らと諍いばかりしていたし、雇い人らからはたえず瞞だまされ盗まれていた。彼女はそれを面白そうに笑いながら、この大坊っちゃんが實際的能力をあまりもたないのに母親らしい同情を寄せた。ある日、コレットがいつもより長く二人を焦じれさしてからようやく立ち去ると、グラチアは溜ため息をついた。

「まああの女ひとは！ 私大好きです……ほんとに人の邪魔ばかりして！」

「私もあの女ひとを好きです、」とクリストフは言つた、「あなたがおっしゃるように、好きというのは私たちの邪魔をするという意味になるんですたら。」

グラチアは笑つた。

「まあお聞きなさい、……私に許してくださいますか……（ここでは落ち着いて話をすることはまづたできません）……私に許してくださいますか、一度あなたのところへ伺う

のを？」

彼はびつくりした。

「私のところへ！ あなたがいらつしやるんですって！」

「お嫌いやじゃありませんか。」

「嫌ですって！ まあとんでもない！」

「では、火曜日はいかがでしょう？」

「火曜でも水曜でも、木曜でも、いつでもおよろしい日に。」

「それでは火曜日の四時ごろ伺います。ようございますか。」

「あなたは親切です、ほんとに親切です。」

「お待ちなさい、条件がありますわ。」

「条件？ そんなものが何になりましょう？ お望みどおりに私はします。条件があらうとあるまいと、私がなんでもお望みどおりにすることは、御存じじやありませんか。」

「私は条件をつけるほうが好きですから。」

「ではその条件を承知しました。」

「まだどんな条件だか御存じないじやありませんか。」

「そんなことは構いません。承知しました。なんでもお望みどおりです。」

「まあお聞きなさい。頑固がんこな方ですこと！」

「ではおつしやつてごらんなさい。」

「それはね、今からその時まで、あなたの部屋へやの中の様子を少しも変えないということですよ——少しもですよ。何もかもそっくり元のままにしておくことです。」

クリストフは茫ぼうぜん然ぜんたる顔つきをし、狼狽ろうばいした様子をした。

「ああ、とんでもないことです。」

彼女は笑った。

「それごらんなさい、あまり早くお約束なさるからですよ。でもあなたは御承知なさいましたね。」

「しかしどうしてそんなことをお望みですか。」

「私をお待ち受けなさらないで、毎日していらつしやるとおりの御様子を、拝見したいからですわ。」

「ついては、あなたも私に許してくださいますか……。」

「いえ、何にも。何にもお許ししません。」

「せめて……。」

「いえ、いえ。何にも聞きたくありません。もしなんなら、御宅へ伺わないことにしましょう……。」

「あなたが来てさえくだされば、私はなんでも承諾することを御存じじやありませんか。」

「では御承知なさいますね。」

「ええ。」

「確かですか。」

「ええ。あなたは暴君です。」

「よい暴君でしょう？」

「よい暴君なんてものがあるものですか。人に好かれる暴君ときらわれる暴君とがあるきりです。」

「そして私はその両方でしょう、そうじやありませんか。」

「いいえ、あなたは好かれるほうの暴君です。」

「不面目ふめんぼくなことですか。」

約束の日に、彼女はやって来た。クリストフは節義を重んじて、散らかってる部屋の中

の紙一枚をも片付けていなかった。片付けたら体面を汚すような気がした。しかし彼は心苦しかった。彼女がどう思うだろうかと考えると恥ずかしかった。いらいらしながら彼女を待った。彼女は正確にやって来て、約束の時間から四、五分しか遅れなかった。彼女はしっかりと小刻みな足で階段を上ってきた。そして呼鈴を鳴らした。彼は扉のすぐ後ろにいて、それを聞いた。彼女の身装は簡素な上品さをそなえていた。彼は彼女の落ち着いた眼をそのヴェール越しに見てとつた。二人は握手しながら小声で挨拶をした。彼女はいつもより黙りがちだった。彼は無器用でまた感動していて、心乱れを示さないようにと黙っていた。彼は彼女を室の中へはいらせたが、散らかっていることを弁解するために用意しておいた言葉も口に出せなかった。彼女はいちばんりっぱな椅子にすわり、彼はその横のほうにすわった。

「これが私の書齋です。」

それだけを彼はようやく言うことができた。

沈黙がつづいた。彼女は温良な微笑を浮かべながら、ゆっくりと室の中をながめ回した。彼女もやはり多少心乱れていた。（彼女があとで話したところによると、彼女は子供のころ彼のところへやって来ようと考えたことがあった。しかし中にはいろいろとずるときにな

つて怖気がさしたのだった。―彼女は部屋の寂しい悲しいありさまに心打たれた。狭い薄暗い控え室、安樂さがまったく欠けてること、眼に見えて貧しげなこと、などは彼女の心をしめつけた。たいへん働き苦労しながら、有名になっていながら、まだ物質的困窮の煩いから脱し得ないでいるこの老友にたいして、彼女はやさしい憐れみの念でいっぱいになった。そしてまた同時に、一つの敷物も画面も美術品も肱掛椅子もないこの無裝飾な室が示しているとおり、彼が生活の安樂ということにたいしてまったく無頓着なのを、彼女は面白がった。家具としてはただ、一つのテーブルと三つの堅い椅子と一つのピアノとだけだった。そして数冊の書物に交じって、紙片が至る所に散らかっていた、テーブルの上にも、テーブルの下にも、床の上にも、ピアノの上にも、椅子の上にも――（彼がいかに真面目に約束を守ったかを見て、彼女は微笑んだ。）

少したって彼女は尋ねた。

「ここですか――（と自分の座席をさし示しながら）――あなたがお仕事をなさるのは？」

「いいえ、」と彼は言った、「あそこです。」

彼は室のもつとも薄暗い片隅と明るみのほうに背を向けている低い椅子とをさし示した。彼女は一言もいわずにそこへ行っておとなしく腰をおろした。二人はしばらく黙り込

んで、どう言つてよいかわからなかつた。彼は立ち上がつてピアノのところへ行つた。三十分間ばかり即興演奏を試みた。愛する女に取り巻かれてる心地がして、限らないうれしさが胸いっぱいになつた。眼を閉じて靈妙な曲をひきだした。そのとき彼女は、神々しい諧調かいちように包まれてるその室の美を悟つた。彼女は彼の愛しまた苦しんでる心を、あたかもそれが自分の胸の中に鼓動してるかのように聞きとつた。

彼は和声ハーモニーをひき終えてから、なおしばらくピアノの前にじつとしていた。それから、泣いてる彼女の息づかいを聞いて振り向いた。彼女は彼のところへ寄つて来た。

「ありがとう。」と彼女は彼の手を取りながらつぶやいた。

彼女の口は少し震えていた。彼女は眼を閉じた。彼も同じく眼を閉じた。二人は手を取り合つてしばらくそのままだった。時の歩みも止まつた……。

彼女は眼を開いた。感動から脱しようとして尋ねた。

「ほかのところをも見せてくださいませんか。」

彼も激情からのがれるのを喜んで、隣室の扉とびらを開いた。しかしすぐに恥ずかしくなつた。そこには狭い堅い鉄の寝台が一つあつた。

——（あとになつて、自分の家に情婦を引き入れたことなんかないと彼がグラチアに打

ち明けたとき、彼女はひやかすような様子で言った。

「そうでしょうとも。女のほうにたいへんな勇気がいるでしょうから。」

「なぜですか。」

「あなたの寝台で眠るには。」——

そこにはまた、田舎風のいなか筆筒たんすが一つあり、ベートーヴェンの鑄物の頭像が壁にかかっている、寝台のそばの安物の額縁に、母親とオリヴィエとの写真が入れてあった。筆筒の上にはも一つ写真があった。それは十五歳のおりのグラチアの写真だった。ローマで彼女の写真帳の中に見つけて、盗んできたものだった。彼はそれを自白しながら許しを求めた。彼女は写真の姿をながめて言った。

「あなたはあれを私だとおわかりになりますか。」

「わかります。よく覚えています。」

「今の私とどちらがお好きですか。」

「あなたはいつでも同じです。私はあなたをいつまでも同じように好きです。どんなものでもあなたを見てとることができません。ごく小さなときの写真でも見てとることができません。この幼い姿の中にもあなたの魂をすっかり感じて、私がどんな感じに打たれてるか、

あなたは御存じありますまい。あなたが永久に変わらないことを、これほどよく私に知らしてくるものはありません。私があなたを愛しているのは、あなたの生まれない前からです、そしてずっと……後まで……。」

彼は口をつぐんだ。彼女は情愛をそられて返辞ができなかった。書斎にもどってきて、雀がさえずってる親しみ深い小さな木を、彼から窓の前にさし示されたとき、彼女は言った。

「これからどうするかおわかりになりました？ おやつをいただくんですよ。私はお茶とお菓子とをもってきました。そんなものはあなたのところがないだろうと思ったものからです。それからまだ他にもって来たものがありますよ。あなたの外套がいでうをかしてくださいね。」

「私の外套をですか。」

「ええ、ええ、かしてください。」

彼女は袋から針と糸を取り出した。

「なんですって、あなたは……？」

「先日私が危あぶないと思つたボタンが二つありましたわ。今日はどうなっていますかしら？」

「なるほど、私はまだそれを付け直そうとも思わなかったんです。嫌な仕事なものですか。」

「お気の毒にね！ かしてくださいよ。」

「恥ずかしい気がします。」

「お茶の用意をしてくださいよ。」

彼は彼女に一瞬間も無駄にさせまいと思つて、湯沸かしとアルコールランプとを室の中に運んできた。彼女はボタンを縫いつけながら、彼の無器用な仕事を意地悪く横目でながめていた。二人は罅のはいつた茶碗でお茶を飲んだ。彼女はひどい茶碗だとは思つたが容赦してやった。しかしそれはオリヴィエとの共同生活の名残りだったので、彼はむきになつて大事にしていた。

彼女が帰つて行こうとするときに、彼は尋ねた。

「あなたは私を嫌に思つてはいませんか。」

「なんで？」

「こんなに散らかっていますから。」

彼女は笑つた。

「これからは片付けることにします。」

彼女が出口へ行って扉を開きかけようとしたとき、彼はその前にひざまずいて、彼女の足先に唇をあてた。

「何をなさるんです？」と彼女は言った。「気違いね、かわいい気違いさん！ さようなら。」

彼女は毎週きまった日にやって来ることとなった。もう突飛な真似をしないということ、もうひざまずいたり足に接吻したりしないということ、彼に約束しておいた。いかにもやさしい静安さが彼女から発していて、クリストフは気分の荒立っているときでさえ、それにしみじみと浸された。そして彼は一人でいると、しばしば熱烈な情欲で彼女のことを考えたけれど、二人いつしよになると、いつも仲のよい友だちという調子になった。彼女を不安ならしむるような言葉も身振りも、かつて一つとして彼からもらされはしなかった。

クリストフの祝い日には、彼女は昔初めて彼と出会ったときの自分の姿どおりに娘を装わせた。そしてクリストフが昔彼女に繰り返し返さしたあの楽曲を、娘に演奏させた。

そういう優雅さ、そういう情愛、そういうやさしい友情には、それと矛盾する感情も交じっていた。彼女は軽佻けいちようであり、社交を好み、馬鹿な連中からでも追従ついでされると喜んでいた。彼女はかなり婀娜あだつぽかった、クリストフを相手のときは別だったが——しかし時にはクリストフを相手のときにも。彼が彼女にたいしてごくやさしいときには、彼女は好んで冷淡に控え目にした。しかし彼が冷淡で控え目なときには、彼女はやさしくなつて彼の情愛をそそるような態度をとつた。彼女はもつとも誠直な女だった。しかしもつとも誠直な女のうちにも、時とすると小娘の性質が現われてくるものである。彼女はほどよく人をあしらうことを心がけ、慣習に従うことを心がけていた。音楽にたいする天分が豊かであつて、クリストフの作品をよく理解していたが、しかし多くの興味を覚えてはしなかつた——（彼もそのことをよく知っていた。）——真のラテンの女にとっては、芸術が価値をもつてるのは、ただそれが生活に帰着するかぎりにおいてであり、そして生活が愛に帰着するかぎりにおいてである……愛に、うつとりとした逸樂的な肉体の底に醸かもさる愛に……。北方人が事とする、荒くれた交響曲や、悲壯な瞑想めいそうや、知的な愛情などは、彼女にとつてなんの役にたとう？ 自分の隠れた欲望がもつともわずかな努力で花を咲かせるような音楽、情熱を疲らせることのない熱烈な生とも言うべき歌劇、感傷的な肉感的

なしかも怠惰な芸術、それこそ彼女に必要なものである。

グラチアは意志が弱くて気が変わりやすかった。ときどきしか真面目な勉強にかかり得なかつた。気晴らしをせずにはいられなかつた。前日言ったことを翌日実行することもめつたになかつた。見戯に類する仕業しわざや張り合いのない気紛れがあまり多すぎた。女特有の曖昧あいまいな性質が、病的な無分別な性格が、ときおり現われてきた……。彼女はそれを自分でもよく知っていて、そんなときには人から遠ざかろうとした。彼女は自分の弱点をよく知っていた。その弱点のために友の心を苦しめるようになるのに、なぜ自分はもつとよくそれに抵抗しないかとみずから責めた。時とすると、彼に知らせないようにして、ほんとの献身的な行ないを彼のためにすることもあつた。しかし結局のところ天性は彼女自身の力よりも強かつた。そのうえ彼女は、クリストフから命令的な様子をされるのを許し得なかつた。そして、一、二度、自分の独立を肯定するために、彼の望みに反することをもなした。そのあとで彼女は後悔した。夜になると、彼をもつと楽しくさしてやらないことが心苦しくなつた。彼女は実際様子に示すよりもずつと多く彼を愛していた。彼との友誼ゆうぎは自分の生活のもつともよい部分であることを感じていた。ごく性質の異なつた二人の者が愛し合うときによく起こるとおり、彼らはいつしよにいないときにもつともよく結ばれ

ていた。実を言えば、たがいによく理解しなかったために二人の運命が別々のものとなつたのも、クリストフがすなおに考えているように、その罪は全部クリストフにあるのではなかつた。グラチアは昔クリストフをもつとも深く愛していたときでさえ、彼と結婚したであろうか？ おそらく自分の一生を彼にささげはしたろう。しかし彼とともに一生暮らすことを承諾したろうか？ 彼女は自分の夫を愛してきたこと、いろいろひどい目に会わされたあとの今日でもなお、クリストフにたいするのは違つた愛し方をしてること、それをみずから知っていた（クリストフへは打ち明けることを差し控えていたが）……。それはあまり誇りにはならない、心の秘密であり身体秘密である。そして自分の親愛な人々に向かつては、自分自身にたいする甘い憐れみあわの念とともにまた彼らにたいする尊敬の念から、人はそれを隠すものである……。クリストフはあまりに男性的だったから、それを察知することができなかった。しかしながら、自分をもつともよく愛してくれてる彼女が、いかに自分に執着していることが少ないかを——そして、人生においてはまったくだれをも当てにできないことを、ちらと感ぜさせらるることがよくあつた。それでも彼の愛は変わらなかつた。それでも彼はなんらの憂苦をも覚えなかつた。グラチアの和氣が彼の上にも広がっていた。彼はありのままを受け入れた。おう人生よ、なんじ汝が与え得ないものについて

なんで汝を非難しようぞ。汝はそのままできわめて美しくきわめて神聖ではないか。汝の微笑を愛さねばならないのだ、ジヨコンダよ……。

クリストフは友の美しい顔をしげしげと見守った。そしてそこに過去と未来との多くのものを読みとった。多年の間旅をしてあまり口をきかず多くながめて一人で暮らしてうちに、観相の術を、長い時代をへてでき上がった豊富複雑な言語を、彼は習得したのだ。それは口に話される言語よりもはるかに複雑なものであつて、種族がおのれを表現するのはその言語においてである……。ある顔だちの線とその口に上る言葉との間の不断の対照。たとえばある若い女の横顔は、さつぱりした輪郭をし、やや冷やかでバーン・ジョーンズ式で、悲壮味があり、あるひそかな熱情に、ある嫉妬しつとに、あるシエイクスピア風の苦悶くもんにさいなまれてるかのようである……。しかるに口をきくときには、ちつぽけな中流婦人であり、馬鹿げきつた者であり、凡庸な嬌きようたい態と利己心とを現わし、自分の肉体に印刻されてる恐ろしい力にたいしては、なんらの観念をももっていない。それでも、その情熱は、その暴慢な力は、彼女のうちにある。他日いかなる形でそれが現われるだろうか。辛辣しんらつな利得心か夫婦間の嫉妬かりつぱな精力か、それとも病的な悪意なのか？ だれにもわかるものではない。あるいはまた、それは爆発の時が来ない前に、血縁の者へ伝えら

れてしまいかもしれない。しかしこの成分こそ、宿命のように種族の上を翔かけつてるものである。

グラチアもまた、古い家庭の世襲財産のうちでもっとも中途で分散しがたい、そういう混濁した遺産の重荷をもっていた。彼女は少なくともその遺産がどういふものであるかを知っていた。自分の弱点を知っていて、人を結びつけ人を船のように運び去る種族の魂の、支配者とはならないまでも、せめて水先案内者となることは——宿命を自分の道具となして、風に従つてあるいは張りあるいはたたむ帆のように、それを使いこなすことは、一つの大なる力である。グラチアは眼を閉じると覚えのある音色の不安な声を、一つならず自分のうちに聞きとるのだった。しかし彼女の健全な魂の中では、不調和な種々の声音もたがいとに融とけ合つてしまつていた。そして彼女のなごやかな理性に制せられて、一つの深い滑なめらかな音楽となつていた。

不幸にも、われわれの血潮のもつともよきものを血縁の者に伝えることは、われわれの思いどおりになるものではない。

グラチアの二人の子供のうちで、女のほうのオーロラは、十一歳になつていたが、母親

に似寄っていた。母親ほどきれいではなくて、やや田舎者めいた活気をそなえていた。かすかに跛をひいていた。やさしい快活な娘で、すぐれて身体が丈夫で、多くの善意をもち、怠惰の天性を除いては、生まれつきの才能は少なく、何にもしないことが大好きだった。クリストフはこの娘を非常にかわいがった。グラチアと並べて彼女を見ながら、一人の者の両年齢期を、二つの時代を、一時に見てとるといふ楽しみを味わった……。それは同じ一つの茎から出た二つの花である。レオナルドの聖なる家族、聖母と聖アンナ、同じ微笑の二つの色合いである。一つの女の魂から咲き出た花の全体が、一目で見えとらるのである。そしてそれは美しいとともにまた物悲しい。なぜなら、それが移り過ぎるのが見てとられるから。……熱烈な心をもつてる者にとつては、同時に二人の姉妹を、あるいは母と娘とを、熱い清浄な愛で愛するのは、きわめて自然なことである。クリストフは自分の愛する女を、その一連の全種族においても愛したかった。彼女の微笑のおのおのは、その涙のおのおのは、その親愛なる頬の皺しわのおのおのは、それぞれ一つの存在ではなかつたろうか。この世の光に彼女が眼を開かない前の一つの生命の、名残りではなかつたろうか。やがて彼女の美しい眼が閉じるときに現われて来る一人の者の、告知者ではなかつたろうか。

男の子のリオネロは、九歳になっていた。姉よりもずっときれいで、はるかにそしてあまりに繊細すぎる貧血し疲憊ひはいした類型に属していて、父親に似寄っていた。彼は怜惻れいりで、悪い本能に富み、甘ったるい調子で、感情を外に現わさなかった。大きな青い眼、娘のような長い金髪、蒼白あわしろい顔色、弱々しい胸部、病的なほど神経質だった。そして生まれながら役者の才能をもち、とくに人の弱点を見つけるのに不思議なほど巧妙だったので、時とするとその神経質をうまく使っていた。グラチアは彼をことにかわいがっていた。それは弱い子供にたいする母親の自然の偏愛からだった——がまた、善良で誠直な女が善良でもない息子むすこにひかされる情からでもあった（というのは、そういう女がみずから抑圧してきた一部の生活は、そういう息子のうちで慰安されるからである。）それからまた、夫に苦しめられ享樂され、夫をおそらく軽蔑けいべつしたろうがしかかもまた愛してきた女の、その夫にたいする追憶の念も加わってくる。それは実に、人の識域下の薄暗いなま温かい温室の中に萌もえ出る、魂の麻酔的な花である。

グラチアは二人の子供に平等に愛情を注ぐようと注意していたけれど、オーロラはその愛情の差を感じて、いくらか苦しんでいた。クリストフは彼女の心を察し、彼女はクリストフの心を察していた。そして二人は本能的に接近していった。それに反して、クリストフ

とりオネロとの間には一つの反感があった。それを子供のほうでは、舌つたるいかわいげな様子を誇張して包み隠していたし、クリストフのほうでは、恥ずべき感情としてみずからしりぞけていた。彼は強^しいて自分を押えつけた。愛する女の子としてその子をもつことが非常に楽しいことでもあるかのように、その他人の子をかわいがろうとつとめた。リオネロの悪い性質を、「あの男」を思い出させるようなものを、すべて認めたくなかった。リオネロのうちにグラチアの魂だけを見出そうと骨折った。しかるにグラチアはクリストフよりいっそう明敏だったから、息子の上になんらの幻をもち立ててはいなかった。そしてはますます息子を愛するばかりだった。

そのうち、数年来リオネロのうちにきざしかけた病気が突然発した。結核病が現われた。グラチアは彼とともにアルプス山中の療養院へ行こうと決心した。クリストフは同行を求めた。彼女は世評を慮^{おもんばか}つてそれを断わった。彼は彼女がひどく因襲を重んじてるのがつかつた。

彼女は出発した。娘はコレットのところに残していった。そして、人間の層^{くず}どもの上に平然たる顔をそばだててる非情な自然の中にはいり、自分の病苦のことばかり言ってる病

人らの間に交わると、彼女はやがて恐ろしく孤独な心地がした。それらの不幸な人々は、手に痰壺たんつぼをもつて、たがいに様子を窺うかがいながら、相手のうちに死期の迫るのを見守っていた。そういう悲しい光景をのがれるために、彼女はパラスの病院を去り、小さな山荘を一つ借りて、そこに病気の子供と二人きりで住んだ。リオネロの容態はよくなるどころか、高地のためにかえって重くなった。熱がいつそう高まった。グラチアは心痛のうちに夜々を過ごした。クリストフは彼女からなんらの知らせも受けなかったけれど、鋭くなつた直覚力で遠くからそれを感じた。彼女は矜持きようぢのうちに意地張っていた。クリストフにそばにいてもらいたくはあつたが、ついて来ることを禁じたあとのことだった。「私はあまり弱つています、あなたに助けてほしゅうございます……。」と今になって白状することもできがたかつた。

ある夕方、心痛してる者にとつてはいかにもつらい薄暮のころ、彼女が山荘の行廊こうろうに立っていると、眼にはいった……。索条鉄道の停車場から登りになつてゐる小道の上に、それが見えたような気がした……。その人は急ぎ足に歩いてきた。背を少しかがめて躊躇ちゆうちしながら立ち止まった。ちよつと顔をあげて山荘のほうをながめた。彼女は見られなよいようにと家の中に駆け込んだ。両手で胸の動悸どうきを押えながら、感動しきつて笑みを浮か

べた。彼女はほとんど宗教を信じていなかったが、そこにひざまずいて両腕に顔を隠した。何物かに感謝せずにはいられなかった……。それでもまだ彼はやって来なかった。彼女は窓のところへもどつて行き、窓掛の後ろに隠れてながめた。彼は山荘の入り口に、畑地かきねの垣根を背にして立ち止まっていた。あえてはいり得ないでいた。彼女は彼よりもいつそう心乱れて、微笑ほほえみながら低く言っていた。

「来てください……来てください……。」

ついに彼は心を決して呼鈴を鳴らした。すでに彼女は戸口に行っていた。彼女は扉とびらを開いた。彼は打たれるのを恐れてる善良な犬のような眼つきをしていた。彼は言った。

「やって来ました……ごめんください……。」

彼女は言った。

「ありがとう。」

そして彼女はどんなに彼を待ってたかを白状した。

クリストフは彼女に手伝つて、ますます容態が悪くなつてゐる子供の看病をした。彼はそれに全心を傾けた。子供は彼にたいしていらだつた憎しみを示した。もうそれを隠しもしなかつた。悪意ある言葉を搜しては言い立てた。しかしクリストフはそれをみな病気のせ

いだとした。かつて見ないほどの我慢をした。二人は子供の枕頭ちんとうで、苦しい日々を過ごし、ことに陰悪な一夜を過ごした。その一夜が明けると、もう駄目だめだと思われてたりオネ口は助かった。それは二人にとつては——眠っている子供を夜通し看護していた二人にとつては——いかにも清い幸福だったので、彼女はにわか立ち上がって、頭巾づきん付きの外がいと套うを取り上げ、家の外に、道の上に、雲と静寂と夜との中に、冷たい星の下に、クリストフを連れ出した。彼女は彼の腕にもたれて、凍えた世界の平和を夢中になって吸い込んだ。二人はようやく二、三語かわしたのみだった。たがいの愛のことは少しも語らなかつた。家にまたはいろいろとするとき、入り口の敷居の上で、子供の助かった幸福に眼を輝かしながら、彼女はただこう言った。

「私の大事なあなた！……」

それがすべてだった。しかし二人は自分たちを結びつけてる糸が神聖なものとなつてるのを感じた。

リオネ口の長い回復期を過ごしてパリーに帰り、パツシーに小さな邸宅を借りて住んでからは、彼女はもう「世評おもんばかを慮る」だけの注意もしなかつた。友のために世評けいべなんか軽

蔑するだけの勇気を身に感じた。あれ以来二人の生活はきわめて親しく融合していたので、彼女は二人を結びつけてる友情を、たとい誹謗ひぼうされる危険を冒しても——そして誹謗されるにきまつていたが——卑怯ひきょうに隠しだてするにも及ばないと考えた。彼女はどんな時間にもクリストフを迎え入れた。クリストフといっしょに散歩にも出れば芝居へも行った。だれの前でも馴れ馴れしく彼へ話しかけた。それで彼ら二人が情人同志であることを疑う者はなかつた。コレットでさえも彼らをあまり見せつけがましいと思つた。グラチアはあらゆる揶揄やゆを微笑で押し止めて、平然と超越していた。

それでも彼女は、自分にたいするなんらの新たな権利をもクリストフに与えていなかった。二人はただ友だちにすぎなかつた。彼はやはり同じやさしい尊敬の調子で彼女に口をきいた。しかし二人の間には何も隠し隔てがなかつた。何事についても相談し合つた。そして知らず知らずのうちに、クリストフは家の中で一種の家庭的主権を振るうようになってた。グラチアは彼の言うことを聴き彼の意見に従つた。療養院で冬を過ごしてからは、彼女はもう別人のようになっていた。不安と疲労とが、それまで堅固だった彼女の健康をひどく害していた。魂もその影響を受けていた。昔の気紛れがときどき出て来ることもあつたが、何かしらすつと真面目まじめになり、ずつと専心的になつていて、善良になり修養をし人

を苦しめまいという願望が、ずっと確かになつてきた。彼女はクリストフの愛情や無私や純潔な心などに、しみじみと感動させられていた。そしていつかは、彼がもう夢想してもいない大きな幸福を与えてやって、彼の妻となろうと考えていた。

彼は彼女に断わられてからもう二度と結婚のことを口にしなかつた。結婚なんかは自分に許されていないと思つていた。しかしその不可能な希望を愛惜する情は消えなかつた。彼女の言葉をいかにも尊重してはいたが、結婚というものを批判する彼女の悟り澄ました態度には、やはり賛同できなかつた。深い敬^{けいけん}虔な愛で愛し合つてる二人の者の結合は、人間の幸福の絶頂であるということを、彼はなお信じつづけていた。——そして彼の未練の念は、アルノー老夫妻と出会つてさらに新たになつた。

アルノー夫人は五十歳を越していた。夫は六十五、六歳になつていた。二人とも年齢よりははるかに老^ふけていた。彼は肥満していたし、彼女は瘦^やせ細つて少し皺^{しわ}寄つていた。背からすでに細^ほそりしていた彼女は、もはや息の根ばかりになつていた。夫が職を退いてから、二人は田舎^{いなか}の家に隠退していた。二人を時代に結びつけるものは、配達される新聞ばかりだつた。小さな町と眠つてる二人の生活との懶惰^{らんだ}の中に、その新聞は世間の雑事の時おくれた反響をもたらしてきた。あるとき彼らは新聞の中でクリストフの名前を見た。ア

ルノー夫人は心こめたやや儀式ばった数行の手紙を書いて、彼の成功を自分たちが喜んでる旨を告げた。彼はその手紙を見るとすぐに、前触れもせずに汽車に乗って出かけた。

彼が着いたとき、彼らは庭に出ている、夏の暑い午後を、丸傘かさのように茂った秦皮とねりこの下でうつらうつらしていた。手を取り合つて青葉棚だんなの下で居眠つてるベックリンの老夫婦に似ていた。日光と眠りと老衰とに彼らはうち負けている。もう衰えきつてすでに半ば以上永遠の夢の中に没している。そして生命の最後の輝きとして、彼らの愛情が、手と手との接触が、消えゆく身体の温ぬくみが、終わりまで残っている……。——二人はクリストフの訪問を非常に喜んだ。彼によつて過去のことをいろいろ思い出したからだ。遠くから見ると光り輝いてるように思われる昔のことを、彼らは話しだした。アルノーは自分から話すのを喜んだ。しかし人の名前を忘れていた。で夫人はそれを言つてやった。彼女は好んで黙つていた。しゃべるよりも聴いてるほうを好んだ。しかし彼女の黙々たる心のうちには、昔のいろんな面影があざやかに残つていた。あたかも小川の中の光つた小石のように、それらの面影はちらちらと見え透っていた。クリストフはやさしい同情で自分をながめてる彼女の眼の中に、それらの面影の一つが幾度も映つてくるのを見てとつた。しかしオリヴィエという名前は一度も口に上らなかつた。アルノー老人は細君にたいして、無器

用な痛切な注意を配っていた。彼女が寒気あるいは暑気に中りはすまいかと心配していた。その色褪せた親愛な顔を不安げな愛情で見守っていた。すると彼女は疲れた微笑で彼を安心させようとしていた。クリストフは感動してやや羨ましげに二人を観察した……。いつしよに年を取ってゆく。自分の伴侶のうちに老年の衰えまでも愛する。そしてこう考える。「眼のそばの、鼻の上の、お前のその小さな皺を、私はよく知っている。それが刻まれるのを私は見てきた。いつそれができたかを私は知っている。お前のその憐れな灰色の髪は、私とともに日に日に色を失ってきた、そして悲しいかな、多少は私のせいで色を失ってきたのだ！ お前の貴いその顔は、私ども二人を焦燥させた疲労と苦心とのために、ふくらんで赤くなつたのである。私の魂よ、私とともに苦しみ年老いてきたお前を、私はどんなにかいつそう愛してることだろう！ お前の皺の一つ一つは、私にとっては過去が奏でる一つの音楽である。」……相並んで長い間の生を営んできた後、暗黒の平和の中に相並んで眠りに行く、見るも楽しい老人たち！ 彼ら二人の様子を見るのは、クリストフにとつては慰安でもあればまた苦痛でもあつた。おう、生は、そして死は、こんなだつたらいかに美しいことであろう！

彼はつぎにグラチアに会つたとき、その訪問の話をせずにはいられなかつた。彼はその

訪問によって呼び起こされた考えを彼女に言いはしなかった。しかし彼女は彼のうちにその考えを読みとった。彼は話しながら心を他処よそにしていた。眼をそらしていたし、ときどき口をつぐんだ。彼女は彼をうちながめ、微笑を浮かべていた。そして彼の心乱れは彼女にも伝わっていった。

その晩、彼女は自分の室に一人きりとなったとき、じつと夢想到に沈んだ。彼女はクリストフの話のみずから繰り返し返してみた。しかし彼女がその話を通して見た面影は、秦皮とねりこの木陰に居眠つてる老夫婦のそれではなかった。友の内気な熱烈な夢想であった。そして彼女の心は愛でいっぱいになった。燈火を消して床にはいつてから、彼女は考えた。

——そうだ、そんな幸福が得らるる機会をのがすのは、ばかばかしい罪深いことに違いない。自分の愛する人を幸福にしてやる喜びほど、貴い喜びが世にあらうか?……おや、私はあの人を愛しているのかしら?

彼女は口をつぐみ感動しながら、心の答えに耳を傾けた。

——私はあの人を愛している。

ちようどそのとき、かわきしわが噎れた急な咳せきの音が、子供たちの眠つてる隣室に起こった。

グラチアは耳をそばだてた。男の子の病氣以来彼女はいつも不安な心地になっていた。彼

女は彼に尋ねかけた。彼は返辞もしないで咳をつづけた。彼女は寢床から飛び出して彼のそばへ行つた。彼はいらだつていて駄々だだをこね、加減がよくないと言ひ、言ひやめて咳をした。

「どこが悪いの？」

彼は答えなかつた。苦しいと呻うめき声を出した。

「いい児こだからね、さあ、どこが悪いかと言つてごらんなさい。」

「わからない」

「ここが苦しいの？」

「ええ、いいえ。わからない。身体じゆうが苦しい。」

そして彼はまた新たに激しく無性に咳せきこんだ。グラチアはびつくりした。彼女はちよつと彼が無理に咳せきをしてるような気がした。しかし彼が汗を流し息をはずませてるのを見るとみずからそれをとがめた。そして彼を抱擁してやり、やさしい言葉をかけてやった。

彼は落ち着いてくるようだった。けれど彼女がそばを離れようとする、彼はすぐにまた咳を始めた。彼女は震えながら彼の枕ちんとう頭についていなければならなかつた。彼は彼女が着物を着に立ち去ることさえ許さなかつたし、彼女に手を握つていてもらいたがつた。そ

して寝入るまで彼女を少しも離さなかった。彼が寝入ってから彼女は、凍え慓え疲れはてて床にはいった。そしてふたたび自分の夢を呼び出すことはできなかった。

この子供は母親の考えを読みとることに不思議な能力をそなえていた。同じ血を分けた人々の間にはそういう本能的な才能がしばしば——しかしこれほどの程度のは珍しいが——見出されるものである。相手の考えてることを知るためには、ほとんどその顔を見るにも及ばない。眼にも止まらぬ多くの兆候で推察してしまう。共同の生活によって強めらるるそういう天性は、リオネロのうちでは、常に働いてる悪意のためにいっそう鋭くなっていた。人を害そこないたい願望から来る明敏さを彼はもっていた。彼はクリストフをきららっていた。なぜだつたらうか？　いったい子供はなにゆえに、自分に何も悪いことをしない者をも気嫌けげんいするのか？　それは偶然なことが多い。ふとある人をきららつてると思い始めただけで、それが習慣となつてくる。人から説きさとさるればさとさるるほど、ますます強情になつてゆく。初めきらつてふうをしていゝうちに、ついにはほんとうにきらうようになる。しかしまたある場合には、子供の精神の及ばないいっそう深い理由が存することもある。子供はそれを気づきだにしない……。ベレニー伯爵むすこの息子は初めてクリストフに会

つたときから、母が愛したことのあるその男にたいして敵意を感じた。グラチアがクリストフと結婚しようと思ひ始めたちようどそのときから、彼は明確な本能の直覺力を得てきたかのようだった。それ以来彼はたえず二人を監視していた。クリストフがやって来るときには、いつも二人の間において客間を去りたがらなかつた。あるいは二人がいつしよにいる室へ突然 闖入するようにならなかつた。そのみならず、母が一人きりでいてクリストフのことを考へてるときには、そのそばにすわつて様子を窺つていた。彼女はその眼つきに當惑して、顔を赤めることさえあつた。そして自分の心乱れを隠すために立ち上がるのだった。——彼は母の前で、クリストフの悪口を言うのを面白がつた。彼女は黙るようにと願つた。彼はしつこく言いつづけた。もし彼女から罰せられようとすると、病氣になりかかつて嚇かした。それは彼が幼少なときから用いて成功してゐる策略だった。ごく幼いころ彼はあるときしかられて、その意趣返しにふと思いついて、ひどい感冒にかかるため、着物をぬいで真裸のまま床の上に寝たことがあつた。——あるとき、クリストフがグラチアの祝ひ日のためにみずから作つた樂曲をもつて来ると、子供はその樂譜を奪ひ取つてなぐしてしまつた。その引き裂かれた紙片がある木箱の中から出て来た。グラチアは我慢しかねて彼をきびしくしかつた。すると彼は泣き叫びじだんだ踏み廻り回つた。そして神

経の発作を起こした。グラチアは狼狽^{ろうばい}して、彼を抱擁し懇願し、なんでも望みどおりにしてやると約束した。

その日から彼は主人公となった。なぜなら自分が主人公であることを知ったから。そして成功しつづける武器の力をしばしばかりた。彼の発作がどの程度まで自然であるかもしくは偽りであるかはまったくわからなかった。彼は自分の気に入らないときに意趣返しとしてその武器を使うばかりでなく、母とクリストフがいっしょに一晩過ごすつもりでいるようなとき、単なる意地悪からそれを使った。そればかりでなく、退屈なために、ふざけるために、またどこまで自分の力が及ぶかを試^{ため}すために、その危険な遊戯をやるようになった。彼は奇怪な神経症状をくふうし出すのにこの上もなく巧みだった。あるいは、食事の最中に痙^{けいれん}攣^{れん}的な身震いを起こして、コップをひっくり返したり皿^{さら}をこわしたりした。あるいは、階段を上つてうちに片手が手摺^{てすり}にくつついて離れなかった。指がひきつってしまっていた。もうそれを開くことができないといい張った。あるいはまた、脇腹^{わき}がきりきり痛むと言つて、声をたてながら転げ回った。あるいは、息がつかってしまつた。もとよりしまいにはほんとうの神経の病氣になった。しかし苦しみ甲斐^{がい}のないことではなかった。クリストフとグラチアとは逆^{のぼ}せ上がってしまった。彼らの会合の平和——楽しみにし

てる静かな談話や読書や音楽——すべてそのささやかな幸福は、それ以来かき乱されてしまった。

それでも生まれには、この小さな悪者も二人に多少の猶予を与えることがあった。自分の役割に倦み疲れるせい、子供心にとらわれて他のことを考えるせいかだったろう。（彼はもう自分のほうが勝利だと確信していた。）

すると、すぐさま二人はその機に乗じた。そういうふうになすみ得た時間は、それを最後まで楽しめるかどうかからなかつただけに、二人にとつてはいつそう貴重なものだった。二人はいかに接近し合っている心地がしたことだろう！ どうして二人はいつもそういうふうに行っていることができなかつたのだらう？……ある日、グラチアみずからその遺憾の念をうち明けた。クリストフは彼女の手を執った。

「そうですね、どうしてでしょうか。」と彼は尋ねた。

「あなたにはよくわかつてるじやありませんか。」と彼女は悲痛な微笑を浮かべて言った。クリストフはそれを知っていた。彼女が二人の幸福を息子の犠牲にしていることを、知っていた。彼女はリオネ口の欺瞞ぎまんに欺かれてはいないが、それでもやはりリオネ口を鍾しやうあ愛あいしているということを知っていた。そういう家庭的情愛の盲目な利己心を、彼は知って

いた。その情愛のために、一家のうちでもつともすぐれた人々は、邪悪なあるいは凡庸な血縁の者のために、献身の全量を使い果たしてしまい、したがって、その献身を受くるにもつともふさわしく、彼らがつとも愛してはいるが、しかし彼らと同じ血統でない人々に向かつては、もはや与うべきものが何も残らないのである。そしてクリストフは、そのために憤りを感じはしたが、また時としては、二人の生活を破壊してる小さな怪物を殺したくなることもあつたが、やはり黙つて忍従して、グラチアが他に取るべき道のないことを理解するのだった。

そして彼らは二人とも、無駄な逆らいをせずにあきらめていた。しかし彼らに当然なその幸福を人は盗むことができても、彼らの心が結合するのを何物も妨げることにはできなかつた。諦めあきらそのものが、共同の犠牲が、肉体の結合よりもいっそう深く二人を結びつけていた。二人はたがい自分の悩みを相手に打ち明け、それを相手になわせて、その代わり相手の悩みを身に引き受けていた。かくて苦しみも喜びとなつた。クリストフはグラチアを「自分の聴罪師」と呼んでいた。自尊心が傷つけられるような弱点をも彼女には隠さなかつた。極度の悔悟の念で弱点を自責した。すると彼女は微笑ほほえみながら、その老お坊つちちゃんの謹直な懸念を和らげてくれた。彼は物質上の困窮までも彼女に白状した。けれど

それまでに至るには、彼女は何も提供せず彼は何も受けないということが、二人の間にきめられてからであった。それは彼が維持し彼女が侵さない最後の自尊の垣根かきねだった。彼女は彼の生活に安樂を与えることが禁じられていたから、彼にとつてはそれよりはるかに貴重なものを、すなわち彼女の情愛を、彼の生活のうちに広げようとくふうした。そして彼は彼女の情愛の息吹いぶきを、いかなるときにも自分の周囲に感じた。朝に眼を開くときにも、晩に眼を閉じるときにも、彼はかならず恋しい憧憬どうけいの無言の祈りをささげた。そして彼女のほうでは、眼を覚さますとき、またはしばしば夜中に幾時間も眠れないようなとき、いつもこう考えた。

——あの人が私のことを思っていてくれる。

そして二人は大きな静安に取り巻かれていた。

グラチアの健康は衰えていった。彼女は絶えず床についていたり、または幾日も長椅子いすに横たわっていないければならなかった。クリストフは毎日やって来て、話をしたりいっしょに書物を読んだり、あるいは新作の曲を示したりした。彼女は椅子から立ち上がって、脹ふくれた足で跛をひきながらピアノのところへ行き、彼がもつて来た曲をひいてやった。そ

れは彼女が彼に与える最上の喜びだった。彼が育て上げたすべての弟子のうちで、彼女はセシルとともにもつとも天分に豊かだった。しかも、セシルがほとんど理解なしにただ本能で感じてゐる音楽も、グラチアにとつては、意味の明らかな一つの流麗な言語だった。人生および芸術の悪魔趣味は全然彼女にはわからなかった。彼女はそこに自分の聡明な心の光を注ぎ込んでいた。その光がクリストフの天才中に沁み込んでいった。彼女の演奏を聞いて彼は、自分の表現した朦朧たる熱情をいつそうよく理解した。彼は眼をつぶつて彼女の演奏に耳を澄まし、自分の思想の迷宮の中を彼女につかまってあとからついていった。彼女の魂を通して自分の音楽に生きることによって、彼はその魂を娶りその魂を所有した。その神秘的結合から、混和した彼ら二人の果実とも言うべき音楽作品が生まれてきた。彼はある日、自分の実質と彼女の実質とで織り出された作曲集を彼女にささげながら、そのことを彼女へ言った。

「私たちの子供です。」

二人いつしよにいても離れていても、常に破れることのない一致同心。古い家の沈静ななかで過ごす宵々の楽しさ。その古い家では、あたりの様子がグラチアの面影にちようどぶさわしく、またその無口な懇切な召使たちは、彼女にいかにも忠実であつて、その女

主人にささげてる敬愛を多少、クリストフの上にも移していた。また、過ぎゆく時の歌を二人で聞き、流れ去る生の波を二人で見るの喜び……。そういう幸福の上に、グラチアの健康の衰えは一つの不安な影を投じた。しかし彼女は種々の軽い患いわずらにもかかわらず、非常に晴れ晴れとしていたので、その隠れた病苦もただ彼女の魅力を増すばかりだった。彼女は彼にとって「光り輝いた顔をしてる親愛な病める傷ましい友いた」であった。そして彼女は彼女のところからもどつてきて、愛情で胸がいつぱいになり、それを彼女に言うのが翌日まで待てないような晩には、彼女に手紙で書き贈った。

——愛いとしき愛いとしき愛いとしき愛いとしきグラチアよ……。

そういう平安が数か月つづいた。二人はそれが永久につづくものだと思っていた。子供は二人のことを忘れてしまつてゐるかのようだった。彼の注意は他にひかれていた。しかしその猶予のあとに、彼はまた二人のほうへもどつてきてもう二人から離れなかった。この呪のろうべき子供は母をクリストフから引き離そうと考えていた。彼はまた例の芝居をやり始めた。前もつて一定の計画をたてはしなかった。その日その日の意地悪な出来心に従つた。そして自分がどんな害悪を行なつてゐるかは少しも知らなかった。他人を困らせながら自分の退屈晴らしをしようとしていた。母がパリイから立ち去ることを、母といつしよに遠く

へ旅することを、たえずせがんだ。グラチアは彼に逆らうだけの力がなかった。その上医者たちからはエジプトに行けと勧められていた。北方の気候でこの冬を送ることは避けなければいけなかった。あまりいろんな打撃を受けすぎていた。最近数年間の精神感動、息子の健康状態にたいする絶えざる心配、長い間の不安定な心、少しも外に現わさないでいる内心の戦い、友の心を悲しませるといふ悲しみなど。クリストフは彼女が苦しんでるのを察して、その苦しみをさらに募らせないようと、別離の日が近づくのを見て自分が感じてる苦しみを、彼女には隠しておいた。彼はその日を遅らせようとは少しもしなかった。そして二人はどちらも平静を装った。二人とも平静さをもってはいなかったが、それをたがいに伝えることはできた。

ついにその日が来た。九月のある朝だった。二人は七月の半ばにパリーを発つて、残つて最後の数週間を、アンガデーヌでいっしょに過ごした。それは二人がめぐり会った場所の近くで、もうあれから六年になるのだった。

五日前から二人は外に出られなかった。雨がしきりなしに降りつづいた。旅館に残ってるのはほとんど彼らきりだった。旅客はたいして逃げ出してしまっていた。その最後の日の朝になって、雨はようやく降りやんだ。しかし山はまだ雲に包まれていた。子供たちは

召使たちといつしよに第一の馬車で先に出かけた。つぎに彼女も出発した。イタリー平野のほうへ羊腸たる急な下り道となつてゐる所まで、彼は見送つていった。馬車の幌ほろの下の二人に湿気が沁しみ通つてきた。二人はたがいにひしと寄り添つて黙つていた。ほとんど顔をも見合わさなかつた。昼とも夜ともつかない妙な薄ら明かりに、二人は包み込まれていた。グラチアの息はそのヴェールをしつとりと濡ぬらしていた。彼は冷たい手袋の下の温かい小さな彼女の手を握りしめていた。二人の顔はたがいに触れ合った。濡れたヴェール越しに、彼は親愛なその口に接吻せつぶんした。

もう道の曲がり角まで来ていた。彼は馬車から降りた。馬車は霧の中に没していった。彼女の姿は見えなくなつた。彼はなお車輪の音と馬の蹄ひづめの音とを聞いていた。白い霧もやが一面に牧場の上を流れていた。凍つた樹木の込み合った枝から雪しずくがたれていた。そよとの風もなかつた。霧のために生き物の気は擱かめられてしまつていた。クリストフは息がつけなくて立ち止まつた……。もう何物もない。すべてが過ぎ去つてしまつた……。

彼は霧を深く吸い込んだ。彼はまた道を歩きだした。過ぎ去ることのない者にとつては、何物も過ぎ去りはしないのだ。

三

愛せられてる人々のもつ力は、離れているときにますます大きくなる。愛する者の心は、彼らのうちのもつとも懐かしい事柄ばかりを覚えてゐる。遠く離れた友からはるかに伝わってくるおのおのの言葉の反響は、敬虔な震えを帯びて静寂のうちに鳴り響く。

クリストフとグラチアとの音信は、もはや恋愛の危険な試練の時期を通りすぎて、己が道を確信しながら、たがいに手を取って進んでゆく夫婦に見るような、自分を押えた真面目な調子になっていた。どちらも、相手を助け導くほどしつかりしていたし、また、相手から助け導かれるほど弱かった。

クリストフはパリーへもどつた。もうパリーへはもどるまいとみずから誓っていたけれど、そんな誓いが何になるう！ 彼はパリーでなおグラチアの影が見出されることを知っていた。そしていろんな事情は、彼のひそかな願望といっしょになって彼の意志に反対して、パリーで新たな義務を果たさなければならぬことを彼に示した。上流社会の日常の

出来事に精通してるコレットは、クリストフへその年若い友ジャンナンが馬鹿ばかげた道へ進んでることを知らした。子供にたいしていつも非常に気弱だったジャックリーヌは、もう子供を引き止めようとはしなかった。彼女自身も特殊な危険を通っていた。あまり自分のことばかりにとらわれて、子供のほうへ心を配る余裕がなかった。

自分の結婚とオリヴィエの生活とを破壊したあの悲しむべき暴挙以来、ジャックリーヌはごくりっぱな隠退的な生活を送っていた。パリーの社交界は、偽善家ぶって彼女を排斥した後、ふたたび彼女へ握手を求めてきたが、彼女はそれをしりぞけて、一人離れて立っていた。彼女はそれらの連中に向かつては、自分の行動を少しも恥ぢずかしいとは思わなかった。彼らにたいして引け目があるとは考えなかった。なぜなら彼らは彼女より下等だったから。彼女が率直に実行したようなことを、彼女の知ってる大半の女たちは、家庭の庇ひ護ごのもとにこっそり行なっていた。彼女はただ、自分のもっともよい友にたいして、自分の愛したただ一人の者にたいして、どういう害を加えたかということだけを苦しんだ。かくも貧弱な世の中において彼がような愛情を失ったということ、彼女はみずから許しがたく思った。

そういう後悔や苦しみは、少しずつ薄らいでいった。今はただ、ひそかな悩みと、自分

および他人にたいする気恥べっしずかしい蔑視と、子供にたいする愛とだけが、なお残つてゐるばかりだった。愛したい欲求がごとくとく注ぎ込まれてゐるその愛情のために、彼女は子供にたいしてまったく無力となつた。彼女はジョルジュの気紛れに逆らうことができなかつた。自分の気弱さを弁解するためには、オリヴィエにたいする罪をこれで償つてゐるのだと考えた。激しい愛情の時期とものう懶い冷淡の時期とが交々こもこもやつてきた。あるいは落ち着かない気むずかしい愛情でジョルジュを飽かせることがあつたし、あるいは彼に飽きはてたがようにそのなすまゝに任せることがあつた。彼女は自分がよくない教育者であることを知つていて、それを苦にしたが、しかし何一つやり方を変えなかつた。行為の原則をオリヴィエの精神に合致させようとしても（それもごくまれにしか試みなかつたが）、結果はあまりあがらなかつた。そういう道徳上の悲観主義は、彼女にもまた子供にも適しなかつた。要するに彼女は、愛情の権力以外の権力を子供にたいしてもちたくなかつた。そしてそれは誤りではなかつた。なぜなら、この二人はいかにも似寄つてはいたけれど、その間には心よりほかの繋つながりはなかつた。ジョルジュ・ジャンナンは母の肉体に魅せられていた。彼女の声や身振りや動作や容色や愛撫あいぶを好んでいた。しかし精神的には彼女と別人であることを感じていた。彼女がそれに気づいたのは、彼が初めて青春の氣にそそられて彼女から

遠く逃げ出したときにであった。そのとき彼女は驚きまた憤って、彼が自分から遠ざかったのは他の女の影響のせいだとした。そうしてその影響をへまに追いのけようとしながら、ますます彼を遠ざけるばかりだった。が実際においては、二人はやはり相並んで生活をしていて、どちらも異なつた事柄に心を奪われてはいたが、しかし皮相な同感や反感をたがいに通じ合つていて、二人を隔てる事柄をよく見てとつてはいなかつた。そしてそういう感情の共通からは、子供（まだ女の香りに浸つてゐる模倣たる存在）から一個の男子が現われてきたときには、もう何にも残らなかつた。ジャツクリー又は苦々しげに息子へ言つた。

「あなたはだれの血を受けたんでしようね？ お父さんにも私にも似ていません。」
そういうふうにして彼女は、二人を隔てるものをことごとく彼に感じさせてしまった。彼はそのため、不安な焦燥の交じつたひそかな高慢を覺えた。

相次いで来る二つの時代の人々は、常に自分たちを結びつける事柄によりも自分たちを引き離す事柄のほうにより多く敏感である。彼らはたとい自分自身を害いもししくは欺いても、自分の生活の重要さを肯定したがる。しかしそういう感情は、時期によつて多少鋭鈍

の差がある。文化の各種の力がしばらく均衡を保つ古典的年代にあっては——急坂に取り巻かれてその高原においては——一つの時代とつぎの時代との間の水準の差はさほど大きくない。しかし復興期や頽廢期の年代にあつては、眩暈するような急坂を登り降りする青年らは、前時代の人々を背後に遠く残してゆく。——ジョルジュは同年配の人々とともに、山を登つていた。

彼は精神においても性格においても、卓越したものを何一つもっていないかつた。上品な凡庸さの域を出でない各種の能力を一樣にそなえていた。それでも彼は、ごく短い生涯のうちには、莫大な知力と精力とを使った彼の父より、生涯の初めにおいてしかも努力せずに、すでに数段高い所に立っていた。

理性の眼が明るみに向かつて開けるや否や、彼は自分の周囲に見てとつた、眩しい光輝に貫かれたる暗黒の集団を、父親が焦慮しながら迷い歩いた、知識と無識と害悪な真理と矛盾的な誤謬との堆積を。しかし彼はまた同時に、自分の手中にある一つの武器、オリヴィエがかつて知らなかつた武器、すなわちおのれの力を、意識したのだった……。

その力はどこから彼に來たのか？……それこそ、疲れきつて眠つていたのが春の溪流のように満ちあふれて眼覚めてくる、民族の復活の神秘である……。彼はその力をどうする

つもりだったか？ 近代思想界の紛糾した茂みを探険することにみずから使うつもりだったろうか。否彼はそういう茂みに心ひかれなかった。彼はそこに待ち伏せてる危険の脅威を重々しく身にかけていた。彼の父はそれらの危険に圧倒されたのだった。その経験を繰り返して悲劇の森にはいり込むよりはむしろ、その森に火を放ってしまいたかった。オリヴィエが心酔していた書物、知恵もしくは聖なる狂愚のあれらの書物を、彼はただちよつとのぞき込んだばかりだった。トルストイの虚無的な憐憫れんびん、イプセンの陰鬱いんうつな破壊的高慢、ニーチエの熱狂、ワグナーの勇壯な肉感的な悲觀、などにたいして彼は、憤怒と恐怖とを感じて顔をそらした。また、半世紀の間芸術の喜悦を滅ぼした写実主義の作家らを憎んだ。それでもやはり、幼年時代に甘やかされた悲しい夢の影をまったく消し去ることはできなかつた。後ろを振り返つてながめようとはしなかつたけれど、自分の後ろにその夢の影があることをよく知っていた。彼はあまりに健全であつて、前時代の怠惰な懷疑主義のうちに自分の不安をそらそうとはしなかつたので、ルナンやアナトール・フランス流の享樂主義を忌みきらつた。この享樂主義こそは、自由な知力の墮落であり、喜びのない笑いであり、偉大を伴わない皮肉であつて、自分の身をつないでる鎖をこわすだけの力がなくてそれを弄もてあそんでる奴隷にはよい手段かもしれないが、普通の者にとっては恥ずべき手

段であつた。

彼は疑惑で満足するにはあまりに強健だつたし、確信をみずから造り上げるにはあまりに弱かつた。しかも確信をしきりに欲していた。確信を求め、切望し、要求していた。しかるに、いつも人氣を漁^{あさ}つてる人々、似^え而非^せ大作家ども、機会をねらつてる似^え而非^せ思想家どもは、太鼓を打ちたたいて自分の妙薬を述べたてながら、確信を求むる一徹な苦しい大望を利用していた。それらのヒポクラテスの連中は各自に、掛小屋の上から、自分のエリキシルだけがよくきく薬であると喚^{わめ}きたて、他のエリキシルをみなけなしつけていた。しかし彼らの秘薬はみな同じようなものだつた。それらの薬売りのだれも新しい処方を見出そうと骨折つてはいなかつた。彼らは引き出しの底に種々の氣のぬけた薬^{びん}を捜していた。ある者の万能薬はカトリック教会であつた。ある者のは正統王朝であつた。ある者のは古典的伝統であつた。万能の薬はラテンに復歸することにあると言つてる面白い者どももいた。衆愚を欺くような大言壮語を放つて、地中海的精神の主權を本氣で説いている者らもいた。(彼らはまた他の時期には大西洋的精神などを説き出したに違いない。)北方と東方との野蛮人に対抗して、彼らは堂々と新ローマ帝国の繼承者をもつて任じていた……。そしてみな言葉ばかりであり、借り来たつた言葉ばかりであつた。図書館の蔵書全部を風

に吹き散らしていた。——年若いジャンナンは、同輩らが皆なしてするように、一の商人から他の商人のほうへと移り歩き、その大法螺おほぼらに耳を傾け、時とするとそれに気をひかれて、小屋の中へはいってゆくこともあった。そしてはいつも失望して出て来た。擦すりきれた襦じ袢ばんをつけてる古い道化役者どうけを見るために、金と時間とを費やしたことが多少恥ちずかしかった。それでも、青春の幻想の力は非常に大きいものであり、また確信に到達せんとする信念は非常に大きかったので、新たな希望の売り手の新たな口上を聞くと、彼はすぐにそのほうへひきつけられた。彼はいかにもフランス人だった。不平がちな気質と先天的に秩序を好む心とをそなえていた。彼には一の主長が必要だった。しかも彼はいかなる主長にも我慢できなかつた。彼の用捨なき皮肉はあらゆる主長を見通しにした。

彼は謎みそを解く言葉を教えてくれる主長を一人待ち望みながら……待つだけの隙ひまをもたなかつた。彼は父親のように一生涯真理を求めることに満足する人間ではなかつた。彼の若々しい短気な力は消費されたがつていた。動機どうげがあるうとあるまいと彼は決断したがつていた。行動して自分の精力を使い果たしたかつた。旅行や芸術鑑賞や、ことに彼が腹いっぱいつめ込んだ音楽は、初めのうち彼にとつて間かん歇けつ的な熱烈な娯楽となつた。誘惑に陥りやすい早熟な美少年の彼は、外見の美うつくわしい恋愛の世界を早くから見出して、詩的な貪ど

んらん
 婪な喜びに駆られながらそこへ飛び込んでいった、それから、手におえないほど率直で飽くことを知らないこの天使も、女には嫌気がさしてきた。彼には活動が必要だった。そこで彼は猛然と運動スポーツに熱中しだした。あらゆる運動を試みあらゆる運動を行なった。撃剣の試合や拳闘けんとうの競技に熱心に通った。徒歩競走と高跳たかとびとではフランスの代表選手となり、あるフットボールの団長となった。金持ちで向こう見ずな同類の若い運動狂たちといっしょに、馬鹿げた狂気じみた自動車の競走で、ほんとうの命がけの競走で、大胆さを競った。そして終わりには、新たな玩具がんぐのためにすべてを放擲ほうてきした。飛行機にたいする世人の熱狂にかぶれた。フランスで行なわれた飛行祭のときには、三十万の群集とともに絶叫したりうれし泣きしたりした。信念をこめた愉悅のうちに全民衆と合体してる心地がした。上空を飛び過ぎる人間の鳥どもは、彼らの心を飛行のうちに巻き込んでいった。大革命あけぼのの曙以来初めて、それらの密集してる人々は空のほうへ眼をあげて、空が開けるのを見たのだった……。——若いジャンナンは空中征服者らの仲間にはいりたいと言いついて、母親を驚き恐れさせた。そんな危険な野心は捨ててくれとジャックリーヌは懇願した。捨てるようにと命令した。しかし彼は意志を曲げなかった。ジャックリーヌが自分の味方だと思つたクリストフも、慎重にするようにと少し忠告したばかりだった。彼はジョルジュ

がけつして自分の忠告に従わないことを信じていた。（彼自身ジョルジュの地位にあつたらやはりそれに従わなかつたであろう。）若々しい力は無活動を強いらるると自分自身を破壊するほうへ向いてくるものであるから、その健全な尋常な働きを束縛することは、たといできてもなすべきことではない、と彼は考えていた。

ジャックリーヌは息子^{むすこ}が自分の手から逃げ出すのを、あきらめることができなかつた。ほんとうに愛を捨ててしまったといくら考えても、愛の幻なしには済ますことができなかつた。彼女のあらゆる感情とあらゆる行ないは、みなその色に染められていた。世の多くの母親は、結婚において——また結婚以外において——費消しきれなかつたひそかな情熱を、息子の上に投げかくるものである。そしてあとになって、息子が母親なしにいかにやすやすと済ましてゆけるかを見るとき、息子が母親を必要としていないことを突然了解するとき、彼女らは恋人の裏切りや愛の幻滅に会ったときと同種類の危機にさしかかるのである。——それはジャックリーヌにとつては新たな破滅だった。ジョルジュはそのことを少しも気づかなかつた。若い者たちは周囲に展開されてる心の悲劇を夢にも知らない。彼らには立ち止まって見るだけの隙^{ひま}がない。彼らは利己的な本能に駆られて、傍目^{わきめ}も振らずに直進したがる。

ジャックリーヌはその新たな苦悶くもんを一人で嘗なめた。それから脱したのは苦悶が鈍鈍つてきたときにであつた。しかも苦悶は愛とともに鈍鈍つてきた。彼女はやはり息子を愛していたが、自分を無益なものだと知つて自分自身にも息子にも無関心になつて、悟りすました遠い情愛をもつて愛してゐるのだつた。ジョルジュのほうでは気にも止めなかつたが、彼女はかくて沈鬱ちんうつな惨めな年を送つた。それから、彼女の不運な心は愛なしでは死にも生きもできなかつたので、愛の対象を一つこしらえ出さずにはいられなかつた。彼女は不思議な情熱にとらえられた。中年になつてもなお生の美しい果実が摘み取れないときに、しばしば女の魂を訪れる情熱であり、ことにもつとも高尚なもつとも近づきたい魂を訪れるかの観がある情熱である。すなわち彼女はある婦人と知り合いになつて、初めて出会つたときからすでに、その婦人の不可思議な魅力にひきつけられてしまった。

それは彼女とほぼ同じ年配の尼僧だつた。慈善事業に従事していた。背が高く強壯でやや肥満していて、褐かっしよく色の髪、きつぱりした美しい顔だち、鋭い眼、いつも微笑ほほえんで大きな薄い口、意志の強そうな頤あご。際立きわつて才知にすぐれ、少しも感傷的ではなかつた。田舎女いなかみたいな狡猾こうかつさを持ち、的確な事務的能力をそなえ、その能力に添そつてゐる南方人的な想像力は、物事を大袈裟おおげさに見るのを好んでいたが、しかし必要な場合には、正確な尺

度で見ることと同時にできるのだった。高遠な神秘主義と老公証人めいた策略とが、小気味よく混じり合ってる性質だった。彼女は人を支配する習癖をもっていて、それをいかにも自然らしく働かしていた。ジャックリーヌはすぐに心服してしまった。彼女はその慈善事業に熱中した。少なくとも熱中してるつもりだった。アンジェール尼は熱中さすべき相手を見分けることができた。同じような熱中を起こさせることに慣れていた。そしてその熱中には気づかないようなふうをしながら事業のためと神の光栄のためにそれを冷やかに利用することを知っていた。ジャックリーヌは自分の金と意志と心とをささげた。彼女は慈悲深かった。彼女は愛によって信仰した。

人々はやがて彼女が惑わされることに気づいた。気がつかないのは彼女一人だった。ジョルジュの後見人は気をもんだ。あまりに鷹揚おうえうで軽率で金銭のことなんか気にかけないジョルジュでさえ、母親が利用されることに気づいた。そして不快を感じた。彼は彼女との過去の親密を回復しようとしたが、もう時期おくれだった。二人の間には幕が張られてることを見てとつた。彼はそれをこの惑わしの影響の罪だとして、ジャックリーヌにたいしてよりもむしろ、彼が陰謀家と呼んでる尼僧にたいして、一種の憤激を感じ、それを少しも隠さなかった。当然自分のものだとは信じている母の心の中に、他人が地位を奪い

に来ることを許し得なかった。地位を奪われるのは自分がそれを打ち捨てたからだとは考えなかった。地位を回復しようとはつとめもしないで、母の気を害するような拙劣な態度をとった。どちらも短気で熱烈な母と子との間には、激しい言葉がかわされた。分裂はなおひどくなくなった。アンジェール尼はジャックリーヌを手中に収めてしまった。ジョルジュは遠のいて勝手気ままな振る舞いをした。積極的な奔放な生活を送った。賭け事をやって莫^{ばくだい}大な金を失った。一つには面白いので、また一つには母の無鉄砲さに報いるために、自分の無鉄砲な行ないを高々と吹^{ふい}聴^{ちよう}した。——彼はストウヴァン・ドレストラード家の人々を知っていた。コレットはこの美少年に注意を向けて、けっして働きやめない自分の魅力を試^{ため}さずにはいなかった。彼女はジョルジュの乱行をよく知っていて、それを面白がっていた。しかし軽^{けい}佻^{ちよう}さの下に隠れてる良識と実際の温情との素質によって、彼女はこの無茶な若者が冒してる危険を見てとった。そして彼をその危険から救うのは自分にはできないことだとよく知っていたので、クリストフに事情を知らした。クリストフはすぐにパリーへもどつてきた。

若いジャンナンにたいして多少の感化力をもってるのは、ただクリストフばかりであった。それも限られたきわめて間歇^{かんけつ}的な感化力だったが、説明しがたいだけにいつそう著

しいものだった。クリストフはジョルジュやその仲間の者らが猛烈に反抗してる旧時代に属していた。彼らがその芸術や思想にたいして疑惑的な敵意を惹起じゃつきさせられる苦惱の時代の、もつとも重立った代表者の一人で彼はあつた。世界——ローマとフランス——を救うべき確実な方法を人のよい青年らに教えようとしてる、小予言者と老魔法使との新福音や護符から、彼は隔絶していた。あらゆる宗教を脱し、あらゆる党派を脱し、あらゆる祖国を脱してる、流行おくれの——もしくはまだふたたび流行していない——自由な信念を、彼は忠実に守っていた。また最後に、彼は国民的問題から離脱していたとは言え、他国人はすべて本国人にとつては野蛮人と思われてた当時にあつては、彼はやはりパリーにおいて一個の他国人であつた。

それでも、小ジャンナンは、快活で軽率であつて、人の気持を白けさせるようなものもきらい、快樂や激しい遊戯を好み、当代の美辞麗句からたやすく欺かれ、筋肉の強健と精神の怠惰とのためにフランス行動派の暴慢な主義に賛同し、国家主義者であり王党であり帝国主義者であり——（彼自身でもなんだかよくはわからなかつた）——したがって、心底においてはただ一人の人物クリストフをしか尊敬していなかつた。彼はその尚早な経験と母親から受け継いだ鋭い才知とによつて、自分が離れ得ないでいる上流社会の安価さと、

クリストフの優秀さとを、よく見てとっていた（それでも彼の快活さは曇らされはしなかったが。）彼は運動や活動にいかにも心酔していても、父親の遺伝をなくすることはできなかった。漠然たる不安が、自分の行動に一つの目的を見出し決定したいという欲求が、突然の短い発作においてではあったが、オリヴィエから彼に伝えられていた。またおそらく、オリヴィエが愛していた男のほうへ彼をひきつける神秘的な本能も、オリヴィエから彼に伝えられていたであろう。

彼はときどきクリストフに会いに行つた。明け放しのやや饒舌な彼は好んで心中をうち明けた。それを聞くだけの隙がクリストフにあるかどうかは問題としなかつた。それでもクリストフは耳を貸してやり、少しも焦れてる様子を示さなかつた。ただ、仕事の最中に不意にやつて来られると、ぼんやりしてることがあつた。それは数分間のことで、内心の作品にある特色を添えるために精神が逃げ出してるのだった。でも彼の精神は間もなくジオルジュのそばへもどつてきた。ジオルジュは彼のそういう放心に気づかなかつた。彼は足音をぬすんで爪先立つてもどつてくる者のように、自分の脱走を面白がっていた。しかしジオルジュは一、二度それに気づいて、憤然として言った。

「あなたは聞いていないんですね！」

するとクリストフは恥ずかしくなった。そして自分を許してもらうために注意を倍にし
ながら、気短かな相手の話をすなおに聞き始めた。その話にはおかしなことが乏しくな
った。血気にはやった無分別な事柄を聞かされると、笑わずにはいられなかった。ジョル
ジュはなんでも打ち明けたのだった。彼は人の気をくじくほどの磊落さをそなえていた。
クリストフはいつも笑ってばかりはいなかった。ジョルジュの品行は往々彼には心苦し
かった。彼は聖者ではなかったし、人に向かつて道徳を説く権利が自分にあるとは思わな
かった。そしてジュールジュがいろんな情事を行なっていることや、馬鹿げたことに財産を浪
費していることなどに、もつとも気持を悪くはしなかった。彼がもつとも許しがたく思っ
たのは、ジョルジュが自分の過失を批判している精神の軽佻さだった。確かにジョルジュ
はそれらの過失を軽く見て、ごく自然なことだと考えていた。彼はクリストフとは異なっ
た道徳観をいだいていた。一種の青年氣質でもって、両性間の関係のうちには、道徳的性
質をことごとく脱した自由な遊戯をしか見たがらなかった。ある種の磊落さと一つの呑
気な温情とだけで、正直な人間たるには十分だとしていた。クリストフのような細心な配
慮に煩わされはしなかった。それでクリストフは腹をたてた。彼は自分の感じ方を他人に
強いまいといくら控えても、やはり寛大な措置には出られなかった。以前の激しい性質が

まだすつかりは抑圧されていなかった。そして時とすると癩癩かんしゃくを起こした。ジョルジュのある種の情事を不潔だとしてとがめざるを得なかった。それを荒々しくジョルジュに述べた。ジョルジュのほうも我慢強くはなかった。二人の間にはかなり激しい口論が起こった。そしては数週間顔を合わせなかった。クリストフは、そういう憤激がジョルジュの品行を改めさせるものではないこと、一つの時代の道徳を他の時代の道徳観念で律するのは穏当でないこと、などをよく知っていた。しかし彼は我慢ができなかった。機会が来ればすぐにまた同じことを繰り返した。自分が生きてきた信念を、どうして疑うことができようか？ それは生を捨て去るのと同じである。隣人に似寄るために、もしくは隣人を用捨するために、ほんとうの考えとは違った考えを装っても、それがなんの役にたつものか。それは自分自身を破壊するばかりで、だれの利益にもなりはしない。人の第一の義務はありのままのものとなることである。「これはよい、それは悪い、」と思いつつ言うことである。弱者と同じように弱くなることによつてよりも、強者であることによつて、人はより多く弱者のためになる。すでに罪を犯した弱点にたいしては、寛大でありたければあるもよい。しかし罪を犯さんとするいかなる弱点にたいしても、けつして妥協してはいけない……。

まさにそうである。しかしジョルジュは、これからしようとすることについてはクリストフに相談するのを避けた。——（彼自身でも何をするつもりかわかっていたらうか？）

——彼は済んでしまったときにしか何一つ話さなかった。——すると？……するとクリストフは、自分の言葉なんかは聞き入れてくれないことを知ってる老伯父おじみたいに、肩をそびやかほほえし微笑みながら、無言の叱責しっせきでこの放蕩児ほうとうをながめるのほかはなかった。

そういう場合には、しばしの間沈黙がつづいた。ジョルジュはごく遠くから来るように思えるクリストフの眼をながめた。その眼の前では自分がごく小さな子供のような心地があった。意地悪な光が輝いてるその洞察どうさつ的な眼の鏡の中で、自分のありのままの姿を見てとった。そしてあまり得意にはなれなかった。クリストフはジョルジュがなした打ち明け話の尻尾しっぽをとらえることはめつたにしなかった。あたかもそれを聞きとっていないかのようだった。彼は眼と眼との無音の対話をしたあとに、あざけり気味に頭を振った。それから前の話とはなんの関係もなさそうな話を始めた。自分の身の上の話や他人の話などで、ほんとうのものともあれば作ったものものこともあった。そしてジョルジュは、自分の雛形ひながた（だと彼は認めた）が、自分と同じような過失を通して、新しい光の下に、嫌いやな滑稽こな姿で、しだいに浮き出してくるのを見てとった。自分を、なさけない自分の顔つき

を、笑わざるを得なかった。クリストフは注射を添えなかった。そして話よりもなおいつ
 そうの効果を与えるものは、話し手の力強い好人格であった。彼は自分のことを話すとき
 にも、他人のことを話すときと同じように、一種の超脱さと快活な晴れやかな気分とを失
 わなかった。その静平さにジヨルジュはまいってしまった。彼が求めに來たのはそういう
 静平さであった。彼は自分の饒舌じょうぜつな告白をしてしまうと、夏の午後大木の影に手足を
 伸ばして横たわつてゐるような心地になつた。焼けるような日の眩まぶしい炎熱は消えていった。
 庇護ひごの翼の平和が自分の上に漂つてゐるのを感じた。重々しい生の重荷を平然とになつてゐる
 この人のそばにいと、自分自身の焦燥からのがれる気がした。その人の話を聞いてると
 安息が味わえた。彼のほうもいつも耳を傾けてばかりはいなかった。自分の精神を彷徨ほうこう
 するままに任じた。しかしどんな所へさ迷い出ても、常にクリストフの笑えみに取り巻かれ
 ていた。

それでも、彼はこの年老いた友の觀念とは縁遠かつた。クリストフがどうして自分の魂
 の寂寞せきやくに馴なれることができ、芸術や政治や宗教の各党派に、人間のあらゆる団体に、執
 着を断つてしまうことができたかを、彼は怪しんだのだつた。「なんらかの陣營に立てこ
 もりたいことはかつてなかつたか、」と彼は尋ねてみた。

「立てこもるんだって！」とクリストフは笑いながら言った。「外に出てるほうがいいじゃないか。野外に出ることの好きな君が、蟄居ちつきよなどということを説くのかい？」

「いいえ、身体のことと魂のこととは同じじゃありません。」とジョルジュは答えた。

「精神には確實ということが必要です。他人といつしよに考えることが必要です。同時代のすべての人が認めてる原則にくみすることが必要です。私は昔の古典時代の人々が羨うらやましい気がします。私の仲間が過去のりっぱな秩序を回復しようとしてるのは道理もつともです。」

「腰抜けだね！」とクリストフは言った。「そんな弱虫が何になるものか。」

「私は弱虫じゃありません。」とジョルジュは憤然と抗弁した。「私どもうちには一人も弱虫はいません。」

「自分を恐こわがつてるようじや弱虫に違いない。」とクリストフは言った。「なんだったって、君たちは秩序を一つ求めていながら、それを自分たちだけで作り出すことはできないのか。昔のお祖母ばあさんたちの裾すそにすがりつきに行かなくちゃならないのか。どうだい、自分たちだけで歩いてみたまえ。」

「根を張らなくちゃいけないよ……。」とジョルジュは当時の俗謡の一節を得意げにあげた。

「根を張るためには、樹木はみな鉢はちに植えられる必要があるのかね？ 皆のために大地があるじゃないか。大地に根をおろしたまえ。自分自身の掟おきてを見つけたまえ。それを自分自身のうちに搜ひましたまえ。」

「私にはその隙ひまがないんです。」とジョルジュは言った。

「君は恐がつてるんだ。」とクリストフは繰り返した。

ジョルジュは言い逆らった。けれどもしまいには、自分の奥底をながめる気がないことを承認した。自分の奥底をながめて楽しみを得られるということがわからなかった。その暗い穴をのぞき込んでるとその中に落ち込むかもしれないなかった。

「手を取ってあげよう。」とクリストフは言った。

彼は人生にたいする自分の現実的な悲壯な幻像の蓋ふたを少し開いて見せて面白がった。ジョルジュは後退あとしげりをした。クリストフは笑いながら蓋を閉めた。

「どうしてそんなふうに生きてることができるとですか。」とジョルジュは尋ねた。

「僕は生きてる、そして幸福だ。」とクリストフは言った。

「いつもそんなものを見なければならなかったら、私は死ぬかもしれませぬ。」
クリストフは彼の肩をたたいた。

「それでいて剛の者と言うのかね！……じゃあ、もし頭がそれほど丈夫でない気がするなら、見なくつてもいいよ。何もぜひ見なくちゃならないということはないからね。ただ前進したまえよ。しかしそれには、家畜のように君の肩に烙印らくいんをおす主長がなんで必要なものか。君はどんな合図を待つてるんだい。もう長い前に信号はされてる。装鞍そうあんらつぱは鳴ったし、騎兵隊は行進してる。君は自分の馬だけに気を配ればいい。列につけ！そして駆け足！」

「しかしどこへ行くんですか。」とジョルジュは言った。

「君の隊の目ざす所は、世界の征服なんだ。空気を占領し、自然原素を従え、自然の最後の城じょうさい 砦しやうさいを打ち破り、空間を辟易へきえきさせ、死を辟易させるがいい……。

ダイダロスは虚空を窮きわめて……

ラテン語の選手たる君はそれを知っているかい。その意味を説明することくらいはできるだろう。

彼は三途さんずの川に侵入せり……

それが君たちの運命だ。征服者らよ幸いなれ！」

彼は新時代に落ちかかってくる勇壮な活動の義務をきわめて明らかに示したので、ジョルジュはびつくりして言った。

「でも、もしあなたがそれを感じてるんでしたら、なぜ私どもといっしょにはならないんです？」

「僕にはほかに仕事があるからだ。さあ、君の事業をなすがいい。できるなら僕を追い越したまえ。僕はここに残って見張りをしている……。君は、山のように高い鬼神が箱の中に入れられてソロモンの封印をおされたという話を、千一夜物語の中で読んだことがあるだろう……。その鬼神はここに、僕たちの魂の底に、君がのぞき込むのを恐れてるこの魂の底に居るのだ。僕や僕の時代の人たちは、その鬼神と戦うことに生しょうがい涯がいを費やしてきた。僕たちのほうが打ち勝ちもなかったし、鬼神のほうが打ち勝ちもなかった。今では、僕たちと彼とはどちらも息をついている。そしてたがいに顔を見合わしながら、なんらの怨恨えんこんも恐怖も感ぜずに、なしてきた戦いに満足して、約束の休戦の期限がつかまるの

を待つている。で君たちはその休戦期間を利用して、力を回復し、また世界の美を摘み取りたまえ。幸福でいて、一時の静穏を楽しみたまえ。しかし忘れてはいけない。他日、君たちかあるいは君たちの後継者たちは、征服から帰ってきて僕がいるこの場所に立ちもどり、僕がそばで見張りをしているこの者にたいして、新しい力でふたたび戦いをしなければならぬだろう。そして戦いはときどき休戦で途切れながら、両者の一方が打倒されるまでつづくだろう。君たちは僕たちより強くて幸福である順番なんだ……。——まあ自分のうちは、やりたかつたら運動スポーツもやるがいい。筋肉と心とを鍛えるがいい。そしてむずむずしてる君の元気をくだらないことに浪費するような、馬鹿げた真似まねをしてはいけない。君は（安心するがいいよ）その元気の使い道ができてくる時代にいるのだ。」

ジオルジュはクリストフが言ってきたことを大して頭に止めなかった。彼はクリストフの思想を受け入れるくらいには十分うち開けた精神をもっていたが、しかしその思想ははいつてすぐにまた逃げ出してしまった。彼は階段を降りきらないうちにすべてを忘れてしまった。それでもやはり安楽な印象を受けていて、原因を忘れはたずつとあとまでもその印象は残っていた。そしてクリストフにたいして一種崇敬の念を覚えた。彼はクリ

ストフが信じてる事柄を何一つ信じてはいなかった。（根本的に言えば、彼はすべてをあざけて何物をも信じなかった。）しかし彼は自分の老友クリストフの悪口をあえて言う者があれば、其奴そいつの頭を打ち破ったかもしれない。

幸いにして彼へクリストフの悪口を言う者はなかった。そうでなくても、彼は他にたいへんなすべき仕事が多かった。

クリストフは近く嵐あらしが吹き起こるのを予見していた。若いフランス音楽の新たな理想は彼の理想とはたいへん異なっていた。しかしそのためにクリストフはその音楽にたいしていつそう同情を寄せたが、その代わり向こうでは彼にたいしてなんらの同情をも寄せなかった。彼が世間にもてはやされてることは、それら青年らのうちの飢えたる者と彼とを和解させる助けにはならなかった。彼らは腹中に大したものをもってはいなかった。それだけにまた彼らの牙きばは長くて鋭かった。クリストフは彼らの邪悪さに驚きはしなかった。

「彼らはなんと一生懸命に噛かみつくことだろう！」と彼は言った。「全身齒しが牙がとなつてい
る、小子どもが……。」

でも彼らよりもつと彼の嫌いな小犬どもがいた。彼が成功してゐるからといって諂つてくる者ども——オービネのいわゆる、「一匹の犬がバタ壺に頭をつつ込むと祝賀のためにその髭をなめに来る」者どもであつた。

彼はオペラ座に一つの作品を採用された。採用されるや否やすぐ下稽古にかけられた。ところがある日クリストフは、新聞紙の攻撃文によつて、彼の作を上演するために、すでに決定していたある若い作曲家の作品が無期延期になつた、ということを知つた。記者はそういう権力の濫用を憤慨して、クリストフに責を負わしていた。

クリストフは劇場の支配人に会つて言つた。

「君は僕に前もつて知らせなかつたですね。そんなことがあつてはいけない。僕の前にも採用した歌劇をまず上演してほしいものです。」

支配人は驚きの声を立て、笑い出し、申し出を拒み、クリストフの性格や作品や才能などをやたらにほめたて、若い作曲家の作品を極度に貶して、なんらの価値もなく鏹一文にもならないものだと言つた。

「ではなぜそれを採用したんですか。」

「思いどおりのことができるものではありません。時には一般の意見に満足を与えるよう

な様子もしなければなりませんからね。昔は、若い連中がいくら怒鳴ってもだれ一人耳を貸しませんでした。けれど今では、われわれに対抗して国家主義の新聞紙を狩り集める方法を、彼らは考えついています。あいにくと彼らの若い一派に惚れ込まないときには、裏切りだの有害なフランス人だのと怒鳴らせるんです。若い一派、どうです……私の意見を申しませうか。彼らには悩ませられますよ。公衆もそうです。彼らの御祈祷にはつくづく嫌です……。血管の中には一滴の血もないし、ミサを歌ってきかせるちつぽけな堂守です。彼らが恋愛の二重奏を作ると、まるで深き淵よりの悲歌みたいです……。採用を迫るる作をみな上演するほど馬鹿な真似をしたら、劇場はつぶれてしまうでしょう。採用はします。そしてそれだけでもう彼らには十分です——。くだらない話はよしませう。ところであなたの作は、きつと大入りですよ……。」

そしてお世辞がまた始まった。

クリストフは相手の言葉をきつぱりさえぎって、憤然として言った。

「僕はそんなことに 瞞まん着ちやくされはしません。僕が老人になり相当な地位に達した今となって、君は僕を利用して若い人たちを押しつぶそうとしています。僕が若かったときには、君は僕を彼らと同様に押しつぶそうとしたでしょう。その青年の作を上演してもらいまし

よう。さもなくば僕は自分の作を撤回します。」

支配人は両腕を高くあげて言った。

「もし私どもがお望みどおりのことをしたら、奴らの新聞仲間の威嚇に負けたぐあいになることが、あなたにはわかりませんか。」

「そんなことは構うものですか。」とクリストフは言った。

「では御勝手になさるがいいでしょう。あなたはまっ先に鎗玉にあげられますよ。」

支配人はクリストフの作品の下稽古を中止しないで、青年音楽家の作品を調べ始めた。

一方は三幕のもので一方は二幕のものであった。同じ興行に二つとも出すことに決定した。

クリストフは自分が庇護してやった青年に会った。自分でまっ先に通知を与えてやりたかったのである。相手は永遠の感謝を誓ってもなお足りないほどだった。

もとよりクリストフは、支配人が彼の作に注意を傾倒するのを拒み得なかった。青年の作は演出法や上演法において多少犠牲にされた。クリストフはそれを少しも知らなかった。彼は青年の作の下稽古に少し立ち合わせてもらった。その作品をきわめて凡庸なものだと思つた。そして二、三の注意を加えてみた。それがみな誤解された。彼はそれきり差し控えてもう干渉しなかった。また一方において支配人は、すぐに上演してもらいたければ少

しの削除は余儀ないことを、新進の青年に承認さしていた。それだけの犠牲は最初はたやすく承諾されたが、やがて作者の苦痛とするところとなつたらしかつた。

公演の晩になると、若者の作品はなんらの成功をも博さなかつた。クリストフの作品は非常な評判を得た。幾つかの新聞はクリストフを中傷した。一人の若い偉大なフランスの芸術家を圧倒するために、てはず手筈が定められ、かんけい奸計がめぐらされたと報じていた。その作品はドイツの大家の意を迎えんために寸断されたと称し、このドイツの大家こそ当来の光榮にたいする下劣な嫉妬しつとの代表だと称していた。クリストフは肩をそびやかしながら考えた。「彼が返答してくれるだろう。」

しかし「彼」は返答しなかつた。クリストフは新聞記事の一つを彼へ送つて、それに書き添えた。

「君は読んだでしょうね。」

相手は返事をよこした。

「実に遺憾なことです！ この記者はいつも私にたいしてやかましいのです。ほんとうに私は気を悪くしました。しかしこんなことに注意を払わないのが最善の策かと存じます。」

クリストフは笑つてそして考えた。

「彼の言うところも道理だ、卑怯者めが。」

そして彼はその記憶を「秘密牢」と名づけたものの中へ放り込んだ。

しかし偶然にも、めつたに新聞を読まず読んでも運動記事以外はろくに読まないジョルジュが、こんどはどうした事か、クリストフにたいするもつとも激しい攻撃の記事を眼に止めた。彼はその記者を知っていた。その男にきつと出会えると思う珈琲店へ出かけて行き、果たして相手を見つけ出し、その頬をたたきつけ、決闘を行なつて、相手の肩を剣でひどく傷つけた。

その翌日、クリストフは昼食をしているときに、ある友人の手紙でそのことを知った。彼は息がつまるほど驚いた。食事をそのままにしてジョルジュの家へ駆けつけた。ジョルジュ自身が戸を開いて迎えた。クリストフは疾風のように飛び込んで彼の両腕をとらえ、憤然と彼を揺すぶりながら、激しい叱責の言葉を浴びせかけ始めた。

「この畜生！」と彼は叫びたてた、「君は僕のために決闘したね。だれがそんなことを許した。僕のことにも干渉する、悪戯者、軽率者！ 僕が自分のことを処置し得ないとも思つてるのか。出過ぎたことをしやがって！ 君はあの下劣漢に、君と決闘するだけの名誉を与えたのだ。それが彼奴の望むところだ。君は彼奴を英雄にしてしまった。馬鹿

な！ もし万一……（君はいつものとおり無分別に突き進んでいったに違いない）……君が殺されでもしたら、どうするんだ！……ばか者！ 僕は君を一生しょうがい 涯許しやうが許してやらないぞ！……」

ジョルジュは狂人のように笑っていたが、この最後の嚇おどかし文句を聞いて、涙が出るほど笑いこけた。

「ああ、あなたは実に変な人だ、ほんとにおかしな人だ！ あなたの味方をしたからって私をしかるんですか。じゃあこんどは攻撃してあげますよ。そしたら接吻せつぶんしてくださいさるでしょうね。」

クリストフは言葉を途切らした。彼はジョルジュを抱きしめ、その両の頬ほおに接吻せつぶんし、それから一度接吻して、そして言った。

「君！……許してくれ。僕は老いぼれた馬鹿者だ……。だが、あのことを聞くと逆せ上のぼがつてしまった。決闘するとはなんとという考えだ！ あんな奴らと決闘するってことがあるものか。もうけつしてふたたびそんなことをしないと、すぐに約束してくれたまえ。」

「私は何一つ約束はしません。」とジョルジュは言った。「自分の気に入ることをするばかりです。」

「僕が君に決闘を禁ずるんだ、いいかね。もし君が二度とやったら、僕はもう君に会わないし、新聞で君を非難するし、君を……。」

「はいちやく 廢 嫡 すると言うんでしよう。」

「ねえジュールジュお願いだから……。いったいあんなことをしてなんの役にたつんだい。」
「そりやああなたは、私よりずっとすぐれてるし、私より非常にいろんなことを知ってるけれど、でもあの下劣な連中のことは、私のほうがよく知っていますよ。大丈夫です、あんなことも役にたつんです。こんどは奴らも、あなたに毒舌をつく前に、少しは考えてみるでしよう。」

「なあに、あの がちょう 鷲 鳥 どもが僕にたいして何ができるものか。僕は あいつ 彼奴らが何を言おうと平気だ。」

「でも私は平気ではありません。あなたは自分のことだけをなさればいいんです。」
それ以来クリストフは、新たな新聞記事がジュールジュの短気をそそりはすまいかと気をもんだ。かつて新聞を読んだことのないクリストフが、毎日珈琲店のテーブルについて新聞をむさぼり読んでる姿は、多少 こっけい 滑稽 だった。もし ひぼう 誹 謗 の 記事を見出したら、それをジュールジュの眼に触れないようにするために、どんなことでも（場合によっては卑劣なこと

でも)するつもりだった。そして一週間もたつと彼は安心した。ジョルジュの言ったことは道理だった。彼の行為は自分のうち吠^{ほえいぬ}犬どもに反省を与えていた。——そしてクリストフは、一週間自分に仕事をできなくさせたその若い狂人にたいして、ぶつぶつ不平を言いながらも、結局自分には彼を訓戒するだけの権利がほとんどないと考えた。さほど昔でもないある日のこと、彼自身オリヴィエのために決闘したときのことを、思い出したのだ。そしてオリヴィエがこう言ってるのが聞こえるような気がした。

「放つといてくれたまえ、クリストフ、僕は君から借りたものを返してるのだ。」

クリストフは自分にたいする攻撃を平気で受け入れたが、そういう皮肉な無関心がなかなかできない者がいた。それはエマニユエルだった。

ヨーロッパの思想は大革新を来たしつあつた。発明される諸種の機械や新たな発動機などとともに、急速に進んでるかのようだった。以前なら二十年間も人類を養い得るだけの量の偏見と希望とは、わずか五年くらいのうち^{とうじん}に蕩^{とうじん}尽されてしまった。各世代の精神は、たがいに相つづいて、往々たがいに飛び越えて、疾走^{タイム}していた。時は襲撃の譜を鳴らしていた。——エマニユエルは追い越されてしまった。

フランス精力の歌手たる彼は、師オリヴィエの理想主義をかつて捨てなかつた。彼の国民的感情はいかにも熱烈ではあつたが、精神的偉大を崇拜する念と融とけ合つていた。彼はフランスの勝利を詩の中で高唱していたが、それも実はフランスのうちに、現今ヨーロッパのもつとも高遠な思想を、勝利の神アテネを、暴力に復ふく讐しゆうする優勝者なる権利を、信仰的に崇拜していたからである。——しかるに今や、暴力は権利の心中にさえ眼め覚ざめていて、その荒々しい裸体のまま飛び出してゐた。戦争好きな強健な新時代は、戦いを熱望してゐて、勝利を得ない前から征服者の心持になつてゐた。自分の筋肉、広い胸、享樂を渴望してゐる強壯な官能、平野の上を翔かける猛もう禽きんの翼、を誇つてゐた。戦つて自分の爪そう牙がを試ためすことを待ち遠しがつてゐた。民族の壮拳、アルプス連山や海洋を乗り越える熱狂的飛行、アフリカの沙漠さばくを横断する叙事詩的騎行、フィリップ・オーギュストやヴィルアルドゥーアンのそれにも劣らないほど神秘的で切実な新しい十字軍、などは国民を逆上さしてしまつた。書物の中でしか戦争を見たことのないそれらの若者らは、戦争を美しいものと訳なく考えてゐた。彼らは攻撃的になつてゐた。平和と觀念とに疲れはてた彼らは、血まみれの拳こぶしをしてゐる活動が他日フランスの強勢を鍛え出すはずの、「戦闘の鉄てつ礎ちん」を賛美してゐた。觀念論の不快な濫用にたいする反動から、理想にたいする蔑視べつしを信条として

振りかざしていた。狭い良識を、一徹な現実主義を、国民的利己心を、空威張りに称揚していた。その破廉恥な国民的利己心は、祖国を偉大となすことに役だつ場合には、他人の正義と他の国民性とを蹂躪じゅうりんするのを辞せないものだった。彼らは他国人排斥者であり反民主主義者であつて——そしてもつとも不信仰な者までが——カトリック教への復帰を説いていた。それもただ、「絶対なるものに運河を設ける」ための実際的要求からであり、秩序の主権との力のもとに無限なるものを閉じこめんとの実際的要求からであつた。そして彼らは、前時代の穏和な嚙語者げいごらを、空想的な理想主義者らを、人道主義の思想家らを、ただに軽蔑するだけでは満足しないで、社会に害毒を流す者と見なしていた。それらの青年らの眼から見ると、エマニュエルも右の部類にはいる者だった。エマニュエルはそれをひどく苦痛とし、またそれを憤慨した。

彼はクリストフも自分と同様に——自分以上に——そういう不正の被害者であることを知つて、同情の念を覚えてきた。彼は自分の不愛想によつて、クリストフが会いに来てくれる気をくじいてしまつていた。そしてあまりに高慢だったから、名残り惜しい様子をしてくちらから会いに行くことをしかねていた。けれども、偶然らしいふううまく彼に出会うことができ、向こうから手を差し出させるようにした。その後は彼の陰險な猜疑心さいぎ

もすっかり和らいで、クリストフから訪問される喜びを隠さなかった。それから二人はしばしば各自の家で会うようになった。

エマニユエルはクリストフに自分の憤懣ふんまんを打ち明けた。彼は批評家らに激昂げつこうしていた。そしてクリストフが十分心を動かしていないのを見ると、クリストフ自身に関する新聞の批評を読みました。そこではクリストフは、自己の芸術の文法を知らず、和声ハーモニーに無知であり、人間の作品から剽窃ひょうせつし、音楽を汚す者であるとして、誹謗ひぼうされていた。

「あの荒くれ老人……」と呼ばれていた。そしてこうも書いてあった。「われわれはこういう癩癩てんかん持ちどもにはもうたくさんだ。われわれは秩序であり、理性であり、古典的均衡である……。」

クリストフはそれを面白がった。

「そうしたもののさ。」と彼は言った。「若い者たちは老人らを墓穴の中に投げ込むのだ……。僕の時代には実のところ、六十歳になつてから老人扱いをしたものだった。が現今では人の歩みがずつと早い……無線電信や飛行機の世の中だ……一つの時代はずつと早く疲れてしまう……。憐れな奴どもだ、奴らだつて長続きはしない。大急ぎでわれわれを軽蔑けいべして日向ひなたをのさばり歩くがいいさー！」

しかしエマニユエルはそういうりっぱな健康をもたなかった。思想上では勇敢だったが、実は病的な神経に悩まされていた。尙^{せむし}儂の身体に熱烈な魂を包んでる彼は、戦いを必要としていたが、戦いに適してはいなかった。ある種の邪悪な批評に接すると、血が流れ出るほど傷つけられた。

「ああもし批評家らが、」と彼は言った、「うっかり発する不正な言辞で、いかなる害を芸術家たちに与えてるかを知ったら、自分の職務を恥ずるに違いないです。」

「でも彼らはそんなことを知ってるよ。そしてそれが彼らの生存の理由なんだ。すべての者が生きなければいけない。」

「彼らは冷血漢です、われわれは生活のために血まみれになり、芸術上でなすべき戦いに疲れはてています。そういうわれわれに手を差し出し、われわれの弱点を同情の念で語り、その弱点を償うように親しく助けてくれるのがほんとうです。しかし彼らはそんなことをするどころか、両手をポケットにつっ込んで、重荷を負って坂を上るわれわれをうち見やつて『できるものか……』と言っています。そしてわれわれが頂まで登りつくと、『なるほど、しかしそんな登り方をしたのはいけない、』とある者は言います。またある者は、『まだ登りつけてやしない……』と頑固^{がんこ}に繰り返します。われわれをころがそうとして足

に石を投げつけないとすれば、まだしも幸いというべきです。」

「なあに、彼らの中にだつて二、三のりつぱな者がいないとは限らない。でもいった彼らにどんないいことができるものか。そして愚劣な者はどの方面にだつている。それは職分によることではない。たとえば、温情はなく虚栄心に富んで気短かで、世の中を餌食^{えじき}と心得ていて、それをつかみ取ることができないのを憤つてる芸術家などは、もつともいけない者ではないだろうかね。人は忍耐をもつて武装していなければいけないよ。いかなる悪も多少の役にたたないものはない。もつとも悪い批評家もわれわれに有益になる。それは一つの刺激者となる。われわれに道草を食うことを許さない。われわれがもう目的地へ達したと思うことに、犬どもはわれわれの尻^{しり}に噛^かみつく。前進し、なお遠く行き、なお高く登ることだ。そうすれば、先に立つて進むことにこちらで疲れるよりも、犬どものほうでついて来ることに疲れるだろう。アラビヤの格言を思い出してみたまえ。『実を結ばぬ木は苦しめられない。金色の果実を頭にいただいてる木だけが、石を投げつけられる。』……人から用捨される芸術家たちこそ気の毒だ。彼らは中途に止まって無精らしくすわりこむ。ふたたび立ち上がってみても、足がしびれて歩けないだろう。ためになる敵こそありがたいものだ。僕は生^{しょうがい}涯^{がい}のうちで、害になる友からよりも彼らからいつそう多くの

益を受けてきた。」

エマニユエルはみずから微笑を禁じ得なかった。それから言った。

「それでもやはり、あなたのような老練兵が、初めて戦いに臨んだばかりの新兵どもに指さ図しずされるのは、嫌いやなことだとは思いませんか。」

「僕には彼らが面白い。」とクリストフは言った。「そういう横柄さは、自己を押し広げたがってる若い沸わきたった血のしるしだ。僕も昔はそうだった。それは生き返ってくる大地にそそぐ春雨である……。われわれに指図をするがいいさ。結局彼らのほうが道理だ。

老人は若者の学校にはいるがいいのだ。彼らはわれわれから利益を受けてきて、忘恩者ではあるが、それは物の順序だ……。そして彼らはわれわれの努力を取って豊かになっていて、われわれよりいつそう遠くへ進み、われわれが試みたことを実現するんだ。もしわれわれになお多少の若さが残っていたら、われわれもまたよく学んで、自己を革新することに努めたいものである。もしそれができないならば、あまりに老いすぎているならば、彼らのうちに自分自身をながめて楽しみたいものである。枯渴したように見える人間の魂がいつもまた花を咲かせるのは、見ても美しいことだ。それらの青年の強健な楽天観、彼らの冒険的行動の喜び、世界の征服のためによみがえるそれらの民族、それは見ても美しい

ものだ。」

「けれど、もしわれわれがいなかったら、彼らはどうなったでしょうか。そういう喜びはわれわれの涙から出て来たものです。そういう高慢な力は、一つの時代の苦悩から咲き出したものです。かく汝働けどもそれは汝のためにあらずです……。」

「その古い言葉は誤っている。われわれを通り越すような一時代の人間を造り上げながら、われわれはわれわれ自身のために働いたのだ。われわれは彼らの宝を積み上げてやり、四方から風の吹き込む締めりの悪い破れ家の中でそれを護^{まも}つてやった。死をはいらせないようにと自分の身で扉^{とびら}をささえねばならなかった。そして子供たちの進むべき勝利の道をわれわれの腕で開いてやった。そのわれわれの労苦は未来を救い上げた。われわれは約束の土地の入り口まで方舟^{はこぶね}を導いてきた。方舟はその土地へ、彼らとともにそしてわれわれの力によつてはいつてゆくだろう。」

「でも彼らは、神聖なる火や、わが民族の神々や、今は大人^{おとな}となつてゐるがその当時子供だった彼らを、背に負いながら沙漠^{さばく}を横切つてきたわれわれのことを、思い出してくれるでしょうか？ われわれは艱苦^{かんく}と忘恩とを受けてきたではありませんか。」

「それを君は遺憾に思つてゐるのか。」

「いいえ。われわれの時代のように、自分の産み出した時代の犠牲となる力強い一時代の悲壮な偉大さは、それを感じずる者をして恍惚こうこつたらしむるほどです。現今の人々は、忍従の崇高な喜びをもちや味わうことはできないでしょう。」

「われわれはもつとも幸福だったのだ。われわれはネボの山によじ登ったのだ。山の麓ふもとにはわれわれのはいり込まない地方が広がっている。しかしわれわれはそこにはいり込む人々よりもいつそうよくその景色を享樂している。平野の中に降りてゆくと、その平野の広大さと遠い地平線とは見えなくなるものだ。」

クリストフはジョルジュとエマニユエルとに平和な感化を及ぼしていたが、その力は、グラチアの愛の中から汲み取くっていた。その愛のために彼は、すべて若々しい者に結びついてる心地がし、生のあらゆる新しい形式にたいして、けっして鈍らない同情をいだかせられた。大地をよみがえらしてる力がどんなものであろうとも、彼は常にその力とともにいて、それが自分と反対のものであるときでさえそうだった。少数の特権者の利己心に悲鳴をあげさしてるそれらの民主主義が、近く主権を占めることにたいしても、彼は恐れのない念をいだきはしなかった。年老いた芸術の念ねんじゆ珠じゆに必死とすがりつきはしなかった。架空

な幻像から、科学と行動との実現された夢想から、前のものよりもいっそう力強い芸術がほとぼしり出るのを、確信をもって待ち受けていた。たとい旧世界の美が自分とともに滅びようとも、世界の新しい曙あけぼののほうを祝福したかった。

グラチアは自分の愛がクリストフのためになることを知っていた。自分の力を意識して自分以上の高い所へ上っていた。彼女は手紙によってある程度まで友を支配していた。それでも芸術上の指導までしようという滑こっけい稽な考えはいだかなかつた。彼女はきわめて伶俐れいりであつて、自分の限度を心得ていた。しかし彼女の正しい純なる声は、彼が自分の魂の調子を合わせる音叉おんさだつた。彼はその声が自分の思想を反響するのが前もって聞こえる気がして、もうそれだけで、反響されるに足る正しい純潔なことをしか考えなかつた。りっぱな楽器の音は音楽家にとつては、自分の夢想がすぐに具現される一つの美しい身体に等しいものである。たがいに愛する二つの精神の融解の不可思議さよ。たがいに相手の有するよきものを奪い合う。しかしそれも自分の愛でそれを豊富にして返さんがためにである。グラチアはクリストフに自分が彼を愛することを憚はばからず言っていた。遠く離れてるために彼女は前よりいっそう自由に話をするようになっていた。それはまた、けつして自分は彼のものとなることがないだろうという確信のためでもあつた。宗教的な熱情を伝えるそ

の愛は、彼にとつては平安の源泉であつた。

その平安を、グラチアは自分をもつてゐる以上に与えていた。彼女の健康は破られ、彼女の精神的平衡はひどく害された。息子の容態むすこもよくはなかつた。彼女は二年來たえず危懼きぐのうちに暮らしてきた。そしてその危懼は、リオネロから残忍な才能で弄もてあそばれるだけにつつそう募つていった。リオネロは自分を愛してくれる人々をいつも不安がらせる術において、みごとな腕前を習得していた。同情を起こさせたりするために、彼の際ひまな頭脳はいろいろな手段を考え出した。それが一種の病癖となつてしまつた。そして悲しむべきことには、彼が病氣を装つてゐるうちに、病氣は實際に進んでいた。そして死が門口に姿を現わした。なんとたる劇的皮肉ぞ！ グラチアは幾年となく息子の仮病に悩まされてきたので、實際彼が病氣になつてももうそれを信じなかつた……。人の心には限度がある。彼女は嘘うそにたいして自分の同情の力を使い果たしていた。リオネロがほんとうのことを言つても彼女はそれを芝居だと見なした。そしてほんとうのことが明らかになつたあとでは、彼女の残りの生涯は悔恨の念に毒されてしまつた。

リオネロの意地悪はいつまでも和らがなかつた。彼はだれにたいしても愛の心をもつていないくせに、周囲の人々のだれかが自分以外の者を愛するのを許し得なかつた。嫉妬しつとが

彼の唯一の熱情だった。彼はクリストフから母を首尾よく遠ざけただけでは満足しなかった。二人の間になお残ってる交誼こうぎをも無理に破らせようとした。彼はいつもの武器——病氣——を用いて、再婚しないことをグラチアに誓わしてしまったが、その約束だけでは承知しなかった。もうクリストフへ手紙を書かないということを要求しだした。そのときだけは彼女も逆らった。そういう権力の濫用に会って彼女はかえって解放された気になって、彼の嘘についてひどくきびしい言葉を言いたてた。あとになって彼女は罪をでも犯したようにみずからとがめた。というのは、そのためにリオネ口は癩かんしゃく癩かんしゃくを起こしてほんとうに病氣になった。それを母が信じないのでなおいっそう病氣になった。すると彼は腹だちまぎれに、意趣返しのため死んでやろうと願った。その願いが遂げられようとは夢にも知らなかった。

子供の生命はもう駄目だめだということ、医者が余儀なくグラチアへもらしたとき、彼女は雷にでも打たれた心地がした。それでも、自分をしばしば欺いた子供をこんどはこちらから瞞だますために、絶望の念を隠しておかなければならなかった。子供のほうでは、こんどは重大なことだと薄々気づいていたが、それを信じたくなかった。嘘うそをついてるときには嘘にたいする叱責しっせきをひどく怒ったくせに、今はその叱責の色を母の眼の中に見つけよう

とした。そのうちにもはや疑えない時が来た。それは彼にとつても家じゆうの者にとつても恐ろしいものだった。彼は死にたがらなかつた……。

子供がついに永眠したのを見たとき、グラチアは泣き声もたてなければ悲しみを訴えもしなかつた。家の人たちは彼女の沈黙に驚かされた。彼女にはもう苦しむだけの力もあまり残つていなかつた。彼女はただ一つの願いしかもたなかつた。こんどは自分が永眠すること！ それでも彼女は外見上同じ落ち着きで日々の務めを果たしていった。数週間後には、以前よりも言葉少なになつたその口にふたたび微笑まで現われた。だれも彼女の寂せきば寞たる心に気づく者はなかつた。クリストフはなおさら気づかなかつた。彼女は彼に子供の死を知らしただけで、自分のことは何にも述べなかつた。不安な情愛にあふれてるクリストフの幾度もの手紙に、彼女は返事も出さなかつた。彼はやって来たがしたが、そんなことをしてくれるなど彼女は頼んだ。二、三か月たつと、彼女はまた以前のように真面まじ目な朗らかな調子の手紙を書きだした。自分の気弱い悩みを彼になわしてしまうのは悪いことだと思つたのだらう。自分のあらゆる感情がいかに強い反響を彼のうちにひき起すか、そして彼がいかに自分によりかかりたがつてるか、それを彼女は知っていた。でも彼女は著しい抑制を無理に守つたのではなかつた。彼女が救われたのは一種の訓練による

のだった。彼女は生に疲れてから、ただ二つのものによって生かされていた。それはクリストフにたいする愛と一つの宿命観とだった。その宿命観は喜びのおりにもまた悲しみのおりにも、彼女のイタリー人的性質の根底をなしていた。それは少しも理知的なものではなくて、まったく動物的な本能だった。疲れきった動物が、自分の疲労を感じもせず、道路の石と自分の身体とを打ち忘れ、眼を見すえて、倒れるまで夢中に進んでゆく、あの動物的な本能だった。そういう宿命観が彼女の身体を支持していた。愛は彼女の心を支持していた。そして自分の生命が磨滅まめつしてしまつた今では、クリストフのうちに生きていた。それでも彼女は今までにないほどの注意を払つて、彼にたいする愛を手紙の中に書き現わさないようにした。それはもちろん、その愛が今までよりいっそう大きくなつたからだつた。しかしまた、その愛情を一つの罪悪だと彼女に感ぜさせる死んだ子供の拒否が、重々しくのしかかっているのを感じるからだつた。そういうとき彼女は黙り込んで、しばらくの間彼へ手紙を出さないことにした。

クリストフにはそういう沈黙の理由がわからなかつた。時とするとある手紙の平らな落ち着いた調子のうちに、抑制された情熱の震えが見える意外な口調をとらえることもあつた。彼はそれに心がときめいた。しかしなんとも言い出しかねた。あたかも幻覚が消える

のを恐れてこわごわ息を凝らしてゐる者のようだった。そしてたいてい彼の予想どおりに、その口調はつぎの手紙では、故意の冷淡さで償われるのだった……。それからふたたび静穏が落ちてきた……大風が……。

ジョルジュとエマニユエルとはクリストフのところでも落ち合った。ある日の午後のことだった。二人とも自分だけのことに気を取られていた、エマニユエルは文学上の憤懣ふんまんに、ジョルジュはある運動競技における失敗に。クリストフはおとなしく二人の言葉に耳を貸し、やさしくからかっていた。呼鈴が鳴った。ジョルジュが行って扉とびらを開いた。一人の下男がコレットのもとから手紙をもつて来たのだった。クリストフは窓ぎわに行つてそれを讀んだ。二人の若者はまた議論を始めた。こちらに背を向けるクリストフには眼も配らなかつた。クリストフは二人の氣づかないうちに室から出て行つた。二人はやがてそれと知つたが別段驚かなかつた。しかし彼があまり長くもどつて来ないので、ジョルジュは隣室の扉のところへ行つてたいてしてみた。返辞がなかつた。でもジョルジュは彼の風変わりなことを知つていたので放つておいた。数分間たつてクリストフは出て来た。たいへん穏やかなたいへん疲れたたいへんやさしい様子をしていた。二人を置きざりにしたことを詫わび、先刻途切らした話をまたやり始めて、二人の心配事を慰めてやり、二人のためになる

ことを言つてやつた。二人はなぜともなく彼の声の調子に心を動かされた。

二人は帰つていった。ジオルジュはその足ですぐにコレットのところへ行つた。するとコレットは涙を流していた。彼女は彼の姿を見るとすぐに、駆け寄つて来て尋ねた。

「どんなふうにあの人は辛抱なすつたの？ お気の毒に！ほんとに恐ろしい！」

ジオルジュには訳がわからなかつた。コレットは彼に、グラチアの死亡をクリストフへ知らしたのだと告げた。

彼女はだれへも別れを告げる隙ひまもなくこの世を去つた。数か月以来彼女の生命の根はほとんどみな抜き取られていた。彼女を吹き倒すにはちよつとした風で足りた。彼女は流行情感で亡くなつた。その病気がぶり返した前日、クリストフからよい手紙を受け取つた。その手紙にすっかり感動させられた。彼を自分のそばに呼び寄せたかつた。すべて他のことは、二人を隔てるすべてのことは、みな虚偽であり悪であると感じた。彼女はごく疲れていたので、彼へ手紙を書くのを翌日に延ばした。ところが翌日も床から出られなかつた。彼女は手紙を書きかけたが書き終えなかつた。眩暈めまいがして頭がふらふらしていた。そういう彼女は自分の病気を知らせるのを躊躇ちゆうちよ躊躇した。クリストフの心を乱すのがはばか

られた。クリストフはちょうどそのとき、ある交響的合唱曲の下したげいこ稽古にかかっていた。それはエマニユエルの詩に基づいて作曲したものだ。その主題が非常に彼らの気に入っていた。というのは、彼ら自身の運命の象徴とも多少なるべきもので、約束の土地というのだった。クリストフはその曲のことをしばしばグラチアへ話していた。初演はつぎの週に行なわれることになっていた……。彼に心配をかけてはならなかった。彼女は単なる風邪らしいと手紙に書いた。つぎにそれでもなお言いすぎてる気がした。彼女は手紙を引き裂いた。それでも一つ書き直すだけの力がなかった。晩に書こうと考えた。晩にはもう間に合わなかった。彼を呼ぶ間もなかった。手紙を書く間さえなかった……。物事はいかに早く死滅することぞ！ 数世紀かかってこしらえられたものも数時間で破壊される……。グラチアはようやくのこと、自分の指にはめてた指輪を娘にやって、それを自分の友に渡してくれと頼んだ。これまで彼女はオーロラとあまり親しんでいなかった。今やこの世を去るときになつて、あとに残す娘の顔を心こめて見守った。自分の握手を友に伝えてやるべき娘の手へ取りすがった。そしてうれしく考えた。

「私はすっかりこの世を去りはしない。」

「何もので、予が耳に響き渡るかくも大いなる

かくもやさしきこの音は！………」（スキピオの夢）

ジョルジュはコレットのもとを去ると、同情の念に駆られてクリストフのところへ舞いもどった。彼は前々からコレットの不謹慎な言葉によって、グラチアがクリストフの心中のいかなる地位を占めてるかを知っていたし、時とすると——（青年は敬意を欠きがちなものである）——それを面白がることもあった。しかし今彼は、かかる死亡がクリストフに起こさせるべき悲しみをひどく痛切に感じたのだった。そして彼のところへ駆けつけて行き、彼を抱擁し彼に同情したかった。彼の情熱の激しさを知ってただけになおさら——先刻彼が示した静平さに不安の念をいだかせられた。ジョルジュは呼鈴を鳴らした。何にも物の動く心配がなかった。彼はまた呼鈴を鳴らして、クリストフとの間に約束してる特別の仕方とびらで扉をたたいた。肱掛椅子ひしかけいすの動く音がして、ゆるやかな重々しい足音の近づくのが聞こえた。クリストフは扉を開いた。その顔はあまりに落ち着いていたので、彼の腕の中へ飛び込むつもりだったジョルジュは立ち止まった。どう言ってもよいかわからなかった。クリストフは穏やかに尋ねた。

「君だったのか。何か忘れ物でもしたのかい。」

「ジョルジュはまごついてつぶやいた。」

「ええ。」

「はいりたまえ。」

クリストフはジョルジュが来る前からすわっていたひし脇掛椅子かけいすのところへ行つてまたすわつた。窓ぎわで椅子の背に頭をもたせて、正面の屋根並みや夕映えの空をながめた。ジョルジュには構わなかつた。ジョルジュはテーブルの上に物を捜すようなふうをしながら、ひそかにクリストフのほうを見やつた。クリストフの顔は静まり返っていた。夕陽ゆうひの反映が頬ほおの上部と額の一部分とを照らしていた。ジョルジュは物を捜しつづけるようなふうで、隣の室——寝室——へはいつていった。先刻クリストフが手紙をもつて閉じこもつた室だった。手紙はまだそこに、身体の形が残つてる敷き放しの寢床の上にあつた。床ゆかの敷物の上には一冊の書物が落ちていた。開かれたままでそのページが一枚皺しわくちやになつていた。それを拾い上げてみると、福音書であつて、マグダラのマリアと園を守る人との邂逅かいこうのところだった。

彼はまた元の室にもどつてき、様子を作るため二、三の物をあちこちへ動かし、身動き

もしないでいるクリストフのほうをふたたびながめた。自分がいかに同情してるかを告げたかった。しかしクリストフがいかに晴れやかな顔をしてるので、彼はどんな言葉もみなそぐわないのを感じた。彼自身のほうがむしろ慰安を求めているほどだった。彼はおぼろげと言った。

「もう帰ります。」

クリストフは振り向きもしないで言った。

「ではまた。」

ジョルジュは外に出て、音のしないように扉とびらを閉めた。

クリストフは長い間そのままだった。夜となった。彼は苦しみもなかったし、考えもしなかった。なんらのはっきりした形象もなかった。ある臃おぼろな音楽に理解しようともせず聞き入ってる、疲れきった人に似ていた。夜が更ふけたころ、彼は気力つきて立ち上がった。寝床の中に飛び込んで、重い眠りにはいった。交響曲シンフォニーはなお響いていた。

そして今、彼は彼女を見た、いとしき彼女を……。彼女は彼のほうへ両手を差し出し、微笑ほほえみながら言っていた。

「もうあなたは火界を通り越しました。」

いには、ローマはもはやローマの中にはないようになる。自己のよき部分は自己以外のところにあるようになる。クリストフはただ一人のグラチアによって、まだ壁の此方こちらに引き止められていた。そしてこんどはグラチアも……。今や扉は苦悩の世界にたいして閉ざされてしまった。

彼は内的昂揚こうようの時期を過ぎた。彼はもうなんらの鎖の重荷をも感じなかった。もう何事をも期待しなかった。もう何物にも従属しなかった。自由の身であった。戦いは終わってしまった。勇壮なる争闘の神——万軍の主たる神——が君臨している圈内から外に出て、戦争地域から外に出でて、彼は自分の足下に、燃ゆる荊の炬火きよかが暗夜のうちに消えてゆくのをながめた。ああすでにその炬火もいかに遠くなっていることぞ！ 彼はその光に道を輝てらされたときには、もうほとんど絶頂に達したものだと思っていた。それから後いかほど歩いてきたことだろう！ それでも頂は少しも近くなったようには見えなかった。永久に歩きつづけても頂には達せられないかもしれない（彼は今やそのことを知っていた。）けれども、光明の圈内には入り込むときには、愛する人々をあとに残してゆかないときには、その人々といっしょに道を進む以上は永久もさほど長いものではない。

彼は扉とびらを閉め切ってしまった。だれもそれをたたいて訪れる者はなかった。ジヨルジュ

は同情の力を一度にすっかり費やしてしまった。家に帰ると安心して、翌日はもうそのことを考えなかった。コレットはローマへ出発した。エマニユエルは何にも知らなかった。そしていつものとおり疑心深く、クリストフから訪問の返しを受けないので、不満に思つて沈黙を守つた。そしてクリストフは、あたかも妊娠の女が大事な荷を負うように、今や自分の魂の中に負うている彼女を相手に、だれにも邪魔されることなく、幾日も無言の対話にふけた。いかなる言葉にも移せない痛切な対話だった。音楽をもつてしても表現しがたいものだった。心がいつぱいになつてあふれるほどになると、クリストフはじつと眼をふさいで、その心の歌に耳を傾けた。あるいは幾時間もピアノの前にすわつて、自分の指先が語るに任じた。この期間だけの間に彼は、他の時期全体におけるよりもいつそう多くの即興曲をこしらえた。しかし彼は自分の考えを書き止めなかった。書き止めたとして何になろう？

数週間たった後に、彼はまた外に出かけて、他人と会い始めた。しかしジョルジュを除いては、彼の親しい人々のうちでも一人として、どういふことが起こつたかを気づいた者はなかった。そしてそのときまで、即興の鬼はなおしばらく残っていた。それはもつとも意外なときにクリストフを訪れた。ある晩クリストフはコレットの家で、ピアノについて

一時間近くも演奏した。客間に他人がいつぱいいることも忘れて、まったく夢中になっていた。人々は笑う気になれなかった。その恐ろしい即興曲に圧せられ揺るがせられた。意味を理解しない人々までが胸迫る思いをした。コレットの眼には涙が湧わいてきた……。クリストフはひき終えると、不意に振り向いた。人々の感動を見て、肩をそびやかした——そして笑った。

苦悶くもんもまた一つの力となる——統御される一つの力となる——という点まで彼は達していた。彼はもはや苦悶に所有されずに、かえって苦悶を所有していた。それはあばれ回つて籠かごの格子こうしを揺することはあつても、彼はそれを籠から外に出さなかつた。

そのころから、彼のもつとも痛烈なまたもつとも幸福な作品が生まれ出し始めた。たとえば福音書の一場面。ジョルジュはそれを見てとつた。

「おんなおんななにゆえに哭なくや。」——「わが主を取りし者ありていずこに置きしかを知らざればなり。」彼女かく言いて振り返りみ、イエスの立てるを見たり。されどもイエスなることを知らざりけり。

または、一連の悲劇的な歌曲^{リード}。それはスペインの俗謡の文句に作曲したもので、その中には黒い炎とも言うべき恋と喪との陰気な歌があった。

わたしやなりたいたい

お前が埋まるその墓に、

末の末まで

お前を両手に抱かため。

または、静穩の島およびスキピオの夢と題された二つの交響曲^{シンフォニー}。この交響曲の中では、ジャン・クリストフ・クラフトの他のいかなる作品におけるよりもいっそうよく、当時の音楽上のあらゆる美しい力の結合が実現されていた。薄暗い壁^{ひだ}のある懇篤な学者的なドイツの思想、熱情的なイタリーの旋^{メロデー}律、細やかな節奏^{リズム}と柔らかい和^{ハーモニー}声とに富んでるフランスの敏才、などが結合されていた。

「大なる喪の悲しみのおりに絶望から生ずるその感激」は、一、二か月つづいた。それから後クリストフは、強健な心と確実な足取りとでふたたび人生に立ち帰った。悲觀思想の

残りの霧と堅忍な魂の灰色と、神秘的明暗の幻覚とは、死の風に吹き払われてしまった。消えてゆく雲の上に虹にじが輝き出していた。涙に洗われたようないっそう滑らかな空の眼まなこ差しが、雲を通して微笑ほほえんでいた。それは山上の静かな夕べであった。

四

ヨーロッパの森の中に潜んでいる大火が燃えだしていた。一方を消しても他方で火の手があがっていた。渦巻く煙と雨のような火の粉とともに、方々へ飛火してかわいた藪やぶを焼いていた。すでに東方においては、前駆者たる小戦闘が諸国民間の大戦役の序曲を奏していた。ヨーロッパ全体が、昨日までは懐疑的で無感覚で枯れ木のようにだったヨーロッパが、火の餌食えじきとなっていた。戦いの欲望がすべての人の魂をとらえていた。たえず戦争は爆発しかけていた。いくら鎮圧されてもまた頭をもたげてきた。ごくつまらない口実もそれに油を注いだ。戦乱の糸口は偶然事にかかっているのが感ぜられた。人は待ち受けていた。もつとも平和的な人々も必然という感情に圧せられていた。そして観念論者らは片眼の巨人ブルードンの大きな影の下に隠れて、人間の高貴さのもつともみごとな資格を戦争のうちに賛美していた……。

西欧諸民族の肉体的および精神的復活は、実にかかるところへ到達すべきものであった

のか！ 熱烈な行動と信念との奔流は諸民族を駆つて、かかる殺戮^{さつりく}へ突進させるべきものであったのか！ その盲目的な疾駆に、選択され見通された一つの目的を定めることができるのは、ただナポレオンのごとき天才のみであつたらう。しかしこの行動の天才はヨーロッパのどこにもいなかった。あたかも世界はおのれを統べるためにもつとも凡庸な者どもを選んだかの觀があつた。人類の精神の力は他の方面にあつた。——かくなつてはもはや、人を巻き込む急坂に従うよりほかはなかつた。統治者も被統治者もみなそうしていた。ヨーロッパは武装警戒をしてるかの觀を呈していた。

クリストフは、オリヴィエの心配げな顔をそばに見ながら同じように警戒したときのことを、思い起こしたのであった。しかしその当時戦争の脅威は、通りかかる夕立雲くらいなものにすぎなかつた。しかるに今やその雲は、ヨーロッパ全体に影を落としていた。そしてクリストフの心もまた変わつていた。そういう国民相互の憎悪^{ぞうお}に彼はもう加わることができなかつた。一八一三年におけるゲートの精神状態と同じだった。憎悪なくして如何^{いか}で戦うことができよう？ そして、青春の気なくして如何^{いか}で憎悪することができよう？ 憎悪の地帯はもう通り越してしまつていた。相敵対してる大民衆のうちの、いずれが彼にとつてはもつとも親愛でなかつたらうか？ 民衆それぞれの価値と世界がそれらに負うてる

ところのものを、彼は認めることを知っていた。人の魂のある段階に達するときには、「もはやそれぞれの国民を認めずして、近隣の民衆の幸不幸を、あたかもおのれが民衆のそれと同様に感ずる。」雷雨の雲は足下にある。周囲はもはや空のみである——「驚わしのものたる大空」のみである。

それでも時とすると、クリストフはあたりの人々の敵意に困らされることがあった。彼はパリイにおいて自分が敵の民族であることをあまりに感ぜさせられた。親愛なるジヨルジユでさえも面白半分に、ドイツにたいする感情を彼の前で言わずにはいなかった。彼はその感情に悲しみを覚えた。そしてパリイから遠ざかった。グラチアの娘に会いたいというのを口実にしてしばらくローマへ行つてみた。しかしそれでも晴朗な環境を見出さなかった。国家主義的傲慢ごうまんの大疫病はローマにも広がっていた。それはイタリー人の性格を一変ひとさせていた。無頓着むとんじやくな懶惰らんだな者としてクリストフが知っていたそれらの人々は、今ではもう軍事的栄光や戦闘や征服や、リビアの沙漠さばくを翔かけるローマの驚わし、などのことばかりを夢想していた。彼らはローマ皇帝時代に立ち戻つたつもりでいた。驚嘆すべきことには、反対の党派たる社会主義者や僧権論者などが王政主義者と同様に、この上もなく真面まじ目めにかかる熱狂に駆られていた。しかもそのために自分の主旨に不忠実にならうとはいさ

さかも思つていなかった。大なる流行病的熱情が民衆の上を吹き渡るとき、政治や人間的理性がいかに重きをなさないかは、これによつても明らかである。この熱情は個々の熱情を滅ぼすだけの労をさえも取らないで、かえつてそれを利用する。すべてが同一の目的へ集中してくる。行動の時期には常にそうであつた。フランスの偉大をきたさしめた、アンリ四世の軍隊中にもルイ十四世の閣員中にも、虚栄と利害心と下等な快樂主義との人物と同じくらいに、理性と信念との人物がいたのである。ジャンセニストの者と不信仰者とは、清教主義者と伊達者^{だて}とは、おのれの本能に仕えながらも同一の運命に仕えたのだつた。きたるべき戦争においては、世界主義者や平和主義者なども、革命国約議会の先人たちと同じように、民衆の幸福と平和の勝利とのためだと信じながら、銃砲の火蓋^{ひふた}を切るに違いない……。

クリストフは多少皮肉に微笑^{ほほえ}みながら、ジャンニコロの覧台から、雑駁^{ざつぱく}でしかも調子のとれたこの都会をながめた。それはこの都市がかつて統御した全世界の象徴だつた。石灰となつてゐる廃墟^{はいきよ}、バロック風の建物前面、近代式の大建築、からみ合つた糸杉^{いとすぎ}と薔薇^{ばら}——才知の光の下に力強く筋目立つて統一されてゐる、あらゆる世紀、あらゆる様式。それと同様に人間の精神も、自分のうちにある秩序と光明とを、鬭争せる世界の上に光被すべ

きである。

クリストフはローマに長くどまらなかつた。この都会が彼に与える印象はあまりに強かつた。彼はそれにたいして恐れをいだいた。その諧調かいちょうをよく役だたせるためには、遠く離れて聴きかなければいけなかつた。もし長くどまつていたら、多くの自国民と同じように、その諧調にのみ込まれてしまう恐れがあることを感じた。——またときどき彼はドイツにしばらく滞在した。しかし結局、そしてドイツとフランスの葛藤かつとうの切迫してゐるにもかかわらず、彼をいつもひきつけるのはパリであつた。もちろんパリには彼の養子とも言うべきジョルジュがいた。しかし彼が心ひかれる理由は愛情ばかりではなかつた。他の理知的な理由もそれに劣らず強いものがあつた。満ち満ちた精神生活に馴なれていて、人類の大家族のあらゆる熱情に雄々しく立ち交わる芸術家にとっては、ふたたびドイツに住み馴れることは困難だつた。ドイツにも芸術家がいいるではなかつた。しかし空気が芸術家にたいしては不足していた。芸術家らは一般国民から孤立していた。国民は彼らにたいして無関心だつた。社会上のある實際上の他の仕事で、一般人の精神を奪つていた。詩人らは怒気を含んだ蔑視べっしをいさながら、蔑視されたおのれの芸術の中に閉じこもつていた。彼らは民衆の生活に自分らを結びつける最後の糸までも絶ち切つて、傲然ごうぜんと構え込

んでいた。彼らは少数の人々のためにばかり書いていた。それは才能が豊かで洗練されし
かも無生産的な小貴族の仲間であつて、それ自身また気のぬけた芸術通の多くの流派に分
かれて対抗しあつていた。そして彼らは自分の閉じこもった狭い範囲内で息苦しがついて
た。その範囲を広げることができなで、熱心に深くへと掘り進んでいた。地面が空しく
なるまで掘り返していた。そしてしまひには無秩序な自分の夢想の中におぼれてしまつて、
その夢想を普及しようとも思わなくなつていた。各自に霧に包まれてその場でもがき苦し
んでいた。共通の光明などは少しもなかつた。各自に自分自身から光がさすのを待つばか
りだつた。

それに反して、あちらでは、ラインの彼方^{かなた}では、西隣の人々のうちでは、集團的熱情の
大いなる風が、社会一般の颶風^{ぐふう}が、時を定めて芸術上に吹き渡つていた。そして、パリ
の上にそびえるエツフェル塔のように、古典的伝統の不滅の燈火が、平野を見おろしなが
ら遠くに輝いていた。この伝統は、労苦と光榮との幾世紀かによつて得られたもので、手
から手へ代々伝えられて、人の精神を屈服させることも束縛することもなしに、各時代が
たどりきたつた道を指示してやり、その光明の中で民衆全体の心を相通わしめていた。一
つならずのドイツの精神は——闇夜^{やみよ}のうちに迷つた鳥は——この遠い照燈のほうへ一直線

に飛んできていた。しかしフランスにおいては、隣国民の多くの寛大な心をフランスのほうへ向けさせるその同感の力に、だれか気づいてる者があるだろうか！ その政治上の罪悪には少しも責任のない、多くの公正なる手が差し出されているのだ……。しかもそれらドイツの同胞たちも、彼らに向かつてつぎのように言うフランスの同胞たちを認めていない。「さあ握手をしよう。幾多の虚言や憎悪があるにもかかわらず、われわれは少しも離れることがないだろう。われわれの民族を偉大ならしむるために、僕たちには君たちが必要であり、君たちには僕たちが必要である。われわれは西欧の両翼である。一方の翼が破れるときには、他方の翼も飛ぶことができなくなる。戦争が起こるならば起こるがよい。たとい戦争をもつてしても、われわれの握手とわれわれ同胞の才知の飛躍とは、けっして断たれることがないだろう。」

そういうふうにはクリストフは考えていた。両民衆がいかほどたがいに補い合ってるか、その精神や芸術や行動は、たがいの援助を欠くときにいかほど不具に跛足になるか、それを彼はよく感じていた。両文明が合流してるライン河のほとりに生まれた彼は、早くも幼年時代のころから、両者結合の必要を本能的に感じていた。そして生しょうがい涯の間彼の天才の無意識的な努力は、力強い両の翼の平衡均勢を維持することに向けられていた。彼はゲ

ルマン的な夢想に富めば富むほど、ラテン的な秩序と精神の明晰めいせきとをますます要求した。それゆえフランスは彼にとつて非常に貴重なものだった。彼はそこでおのれをよりよく知りおのれを支配するの喜びを味わった。ただフランスにあつてのみ彼はまったくの彼自身であつた。

彼は自分を害せんとする分子にも不平を言わなかつた。彼は自分の精力と異なつた精力をも同化していた。強壯な精神は、健やかであるときには、あらゆる力を吸収し、自分と反対の力をも吸収する。そしてそれを自分の肉となす。人はある時期に達すると、自分にもつとも似寄らないものにもつとも心をひかれる。なぜなれば、そこにより豊富な食糧を見出すからである。

実際クリストフは、自分の敵だとされてある種の芸術家らの作品にたいして、自分の模倣者らの作品にたいするよりもより多くの悦よろこびを覚えた。——彼にもやはり模倣者どもがいて、彼の弟子だと自称しながら彼をひどく絶望させた。それはみな善良な青年で、彼を深く崇拜して、勤勉なりつぱな人物で、各種の美質をそなえていた。クリストフは彼らの音楽を愛したかつたが、しかし——（あいにくなことには！）——愛するわけにゆかなかつた。それらの音楽をつまらないものだと思つた。そして彼は、個人的には彼に反

感をもち、芸術上では彼と反対の傾向を代表してる、ある音楽家らの才能に、はるかに多く心ひかれた……。反対であろうと構うものか！ 彼らは少なくとも生きてるではないか！……生はそれ自身一つの美德であつて、その美德を欠いている者は、たとい他のあらゆる美德をそなえていても、完全に正しい人間とはなれないのである。なぜならその者は完全に人間ではないから。クリストフはよく冗談に、自分を攻撃する人々をしか弟子とは認めないと言つた。そして、若い音楽家が自分の音楽的天稟てんびんを話しに来て、彼の同情をひくつもりで彼に諛へつらうと、それに向かつて尋ねた。

「それでは、君は僕の音楽に満足してるのですか。君は僕と同じ方法で、自分の愛や憎悪を表現するつもりですか。」

「そうです。」

「そんならもう黙り込んでしまふがいいでしょう。君には何も言うべきものがないはずですよ。」

服従せんがために生まれた従順な精神を嫌悪けんおし、自分の思想と異なつた思想を吸ひいたために、彼は自分の観念とまつたく反対の観念を有する人々のほうへひきつけられた。彼の芸術や理想主義的信念や道德的概念などを死文に等しく思つてる人々に、彼はかえつて

加担してるがようだった。そういう人々は、人生や愛や結婚や家庭や、あらゆる社会関係にたいして、彼と異なった見方をしていた。もとより善良な人々ではあったが、しかし精神的進化の他の時代に属してるようだった。クリストフの生の一部を食い荒らした苦悶くもんや懸念などは、彼らには理解できがたかった。もちろん彼らにとってはそのほうが結構である！ クリストフはそれを彼らに理解させようとは願わなかった。自分と同じように考えながら自分の思想を是認してもらうことを、彼は他人に求めなかった。自分の思想については自分で確信をもっていた。他人にたいしては知るべき別な思想を求め、愛すべき別な魂を求めていた。常にますます愛しますます知りたかった。見てそして見ることを学びたかった。ついに彼は、昔自分が攻撃した精神傾向を他人のうちには是認したばかりでなく、それを享樂するまでになった。なぜなら、それは世界の豊饒ほうじょうに貢献するところがあるようだったから。ジョルジュが彼と同じように人生を悲劇だとは思っていないにしても、彼はやはりますますジョルジュを愛していた。彼が身を護まもってきた精神的真摯しんしさや勇壮なる自制を、もし人類が一樣にまどつていたら、人生はあまりに貧弱になりあまりに色彩に乏しくなるだろう。喜悅、無頓着むとんじやく、あらゆる偶像にたいする不敬な勇氣、もつとも神聖なる偶像にたいしてまでも不敬な勇氣、それを人生は必要としてるのだった。「世界を活

氣づけるゴールの辛辣しんらつ「こそ祝すべきかなである。懷疑も信念も共に必要である。懷疑は昨日の信念を滅ぼして、明日の信念の場所をこしらえるのである……。美しい画面にたいていするうちに、人生から少し遠のいて、近くで見ればたがい衝突してゐる種々の色彩が、玄妙な調和のうちに融とけ合うのを見る者にとっては、いかにすべてが光り輝いてゐることだろう！

クリストフの眼は、精神界とともに物質界の無限の多様さにたいしても開かれていた。それはイタリーへ初めて旅したときからの獲物えものの一つであつた。パリで彼はことに画家や彫刻家と交際を結んだ。そしてフランス人の天才のもつともよきものは彼らのうちにあることを見出した。彼らが物の動きを追求し、震える色を瞬間にとらえ、人生がまつてる覆面をはぎ取つてゐる、その堂々たる大胆さは、人の心を愉快の念わどで躍り立たせるほどのものがあつた。見ることを知つてゐる者にとつては、光の一滴も無尽蔵な豊富さを有するのである。精神のかかる崇厳な愉悦に比ぶれば、論争や戦争のいたづらな騷そうじよう擾わづらがなんであるか？……しかしそれらの論争やまた戦争も、靈妙なる光景の一部をなしてゐるのである。すべてを抱擁しなければいけない。われわれの心の熱しきつた熔炉ようろの中に、否定する力と肯定する力とを、敵と味方とを、人生のあらゆる金属を、嬉々ききとして投げ入れなければい

けない。そしてすべての帰着は、われわれの内部に作り出さるる立像にある、精神の崇高な果実にある。その果実をますます美わしからしむるものは、たといわれわれを犠牲となしてそうするものも、みな善きものと言うべきである。創造する主体が何になるものぞ。

ただ創造さるるもののみが現実である……。われわれを害せんとしての敵よ、諸君の攻撃もわれわれには達しないであろう。われわれは諸君の打撃を超越しているのだ……。諸君は中身の無い外皮に噛みついていて、しかし予は久しい前にそれから抜け出しているのだ。

彼の音楽上の製作は晴朗な形をとっていた。それはもはや、以前にしばしば寄り集まり破裂し消え失せたあの春の夕立雲ではなかった。それは真夏の白雲であり、雪と黄金との山であり、徐々に飛翔して空を満たして光の大鳥であった……。創造よ。八月の静かな日光に熟してゆく作物よ……。

初めはまず、漠然たる力強い無我の境。鈴なりの葡萄の房の、ふくれ上がった麦の穂の、熟した果実を孕んでる妊婦の、臃ろなる喜び。大オルガンのとどろき。底のほうで、蜜蜂が歌ってる蜜房……。秋の柔らかい光のようなその薄暗い金色の音楽から、音楽を導く節奏がしだいに浮き上がってくる。遊星のロンドが姿を現わす。それが回転する……。

すると、意志が現われる。意志は、嘶いななきつつ通りかかる夢想の臀しりに飛び乗って、それを両膝ひざでしめつける。精神は、おのれを引き込む節奏リズムの規則を認める。そして不規則なもろの力を統御して、それに一定の道を定めてやり、またおのれの行くべき目標を定める。理性と本能との交響曲が組織される。影は明るくなる。展開してゆく長い一筋の道の上に、一行程ごとに輝ける光点が印せられる。そしてその光点自身は、創造される作品のうちに
 おいては、太陽系の囀郭おもにつながれたる小さな遊星の世界の、中核となるであろう……。
 画面の重なる線はここに至って決定する。そして今や全体の顔がんぼう貌もこが模糊たる曙あけぼのから浮き出す。すべてが明確になる、色彩の調和も形貌の輪郭も。その作品を完成させんがために、一身のあらゆる資力が徴集される。記憶の香箱が開かれて、そのもろもろの香かおりが発散する。精神は感覚を解放する。感覚を狂乱するままに放任して、おのれは口をつぐむ。しかしなおそばにうづくまって、じつと窺うかがいながらおのれの餌食えしきを選む……。

すべての準備が整う。作業の一隊は、感覚を欲ようばす材料を用いて、精神が意匠した作品を仕上げるおのれの職務に通じていて労を惜しまないりっぱな労働者どもが、偉大なる建築家には必要である。そして大伽藍がらんができ上がる。

「しかして神はその作りたるものをながめたもう。そしてそれはいまだ善よからずと観みたも

う。」

巨匠の眼は己おのが創造の全体を見渡す。そして手ずから整調を完成する……。

夢想はかくてなし遂げられる。神はほむべきかな……。

真夏の白雲が、光の大鳥が、おもむろに飛ひ翔しょうしている。そして空は全部、その大鳥の広げた翼おおに覆おおわれている。

それでもなかなか彼の生活は、自分の芸術だけに限らるることができなかった。彼がよ
うな者は愛せずにはいられない。しかもその愛は、芸術家の精神がいつさいの存在物に広
げる平等な愛だけではない。選えり好みをしなければ承知しない。自分の選んだ人々に身を
ささげなければ承知しない。その人々こそ樹木の根である。それによって心の血液はすべ
て新たになる。

クリストフの血液は涸かれかかつてはいなかった。一つの愛が彼を浸していた——彼のも
つともよき喜びとなっていた。それはグラチアの娘とオリヴィエの息子とにたいする二重
の愛だった。彼はその二人の子供を頭の中では一つに結合していた。実際においても二人

を結合させようとしていた。

ジオルジュとオーロラとはコレットの家でよく出会った。オーロラはコレットの家に住んでいた。一年のうちの一部をローマで送り、残りはパリーで暮らしていた。彼女は十八歳になっていて、ジオルジュより五つ年下だった。背が高く、まっすぐな上品な姿で、頭が小さく顔が大きく、金色の髪、日焼けした顔色、唇の上の薄黒い産毛うぶげ、考え深いにこやかな眼つきをした明るい眼、肉づきのよい頤あご、浅黒い手、丸っこい強健な腕、格好のよい首、そして肉体的な快活な高慢な様子をしていた。少しも理知的ではなく、至って感傷的ではなくて、母親から呑気のんきな怠惰めざを受け継いでいた。引きつづいて十一時間もぐっすり眠った。その他の時間はまだよく眼覚めざめないようなふうで笑いながらぶらついていた。クリストフは彼女をドルンロースヘン——眠りの森の姫——と名づけていた。あのかわいいザビーネを思い起こさせられた。彼女は寝ても歌っており、起きても歌っており、理由もないのに笑っては、しゃくりのように笑いをのみ下しながら、子供らしい愉快な笑い方をした。日々をどうして過ごしているかわからないほどだった。コレットは、若い娘の精神に漆のようにすぐにくつつく人造光沢で、しきりに彼女を飾りたてようとつとめたが、すべ

て徒勞に帰してしまつた。漆が少しもつかかなかつた。彼女は何にも覚えなかつた。ごく面白いと自分で思う書物を一冊読むにも、数か月かかつて、しかも一週間もたてば、その本の名も内容も忘れてしまつた。平気で綴り字の間違ひをしたり、高尚なことを話しながら滑稽こっけいな誤りをしたりした。そして彼女は、若さによつて、快活さによつて、知力の乏しさによつて、あるいは欠点によつて、時とすると冷淡に近い不注意によつて、無邪氣な利己主義によつて、人の心をさわやかならしめた。いつも自然のままだつた。そして単純な怠惰な彼女も、時によると、別に悪気なしに嬌きやうたい態たいを作ることを知つていた。そういうとき彼女は、青年たちに釣針つりを投げ、野外写生に出かけ、シヨパンの夜想曲をひき、読みもしない詩集をもち歩き、理想主義めいた話をし、同じく理想主義めいた帽子をかぶつたりした。

クリストフはひそかに彼女を観察しながら笑つていた。彼は彼女にたいして、寛大な擲や揶ゆ的な父親めいた情愛をいだいていた。そしてまた、昔自分が愛していた女であつて、しかも彼の愛ではなく他の愛のために新しい若さをもつてふたたび現われてきた女、その女にたいする内心の敬愛をもいだいていた。だれも彼の情愛の深さを知つてゐるものはなかつた。ただオーロラ自身だけが薄々気づいていた。彼女は幼いときから、たいいていいつも自

分のそばにクリストフを見てきた。彼を家族の一人でもあるように見なしていた。昔母から弟ほどかわいがられなくて苦しんでるうちに、知らず知らずクリストフへ接近した。彼女は彼のうちに同じような悩みがあるのを察したし、彼は彼女の悲しみを見てとった。二人はそれをたがいに打ち明けはしなかったが、それを共通のものにした。その後彼女は、母とクリストフとを結びつけてる感情に気がついた。彼らは彼女に秘密を知らせはしなかったが、彼女は自分もその秘密の仲間であるように思った。そして彼女は、グラチアから臨終のおりに頼まれた使命の意味を知っていたし、今はクリストフの手にはまってる指輪の意味をも知っていた。かくて彼女と彼との間にはひそかな関係が存在していた。彼女はそれをはつきり理解しないでも、その複雑な意味を感じることができた。彼女は心から彼に愛着していた。ただ彼の作品をひいたり読んだりするだけの努力は、かつてなし得なかった。かなりりっぱな音楽の才をもつてはいたが、自分にささげられた楽譜のページを切るだけの好奇心さえなかった。彼女は彼と親しく話をしに来ることが好きだった。——彼のところでジョルジュ・ジャンナンに会えることを知ると、いつそうしばしばやって来た。そしてジョルジュのほうでも、クリストフのところへ出入りすることを、今までになく楽しみとし始めた。

それでも、二人の若者はたがいのほんとうの感情に急には気づかなかつた。二人は初め嘲り気味の眼つきで見合った。二人はたがいにあまり似寄っていなかった。一方は水銀であり、一方は眠つてる水だった。しかし長くたたないうちに、水銀はもつと穏やかなふうをしようとし、眠つてる水は眼を覚ましてきた。ジョルジュはオーロラの身装やイタリー趣味を非難した——細やかな色合いのやや乏しいこと、けばけばしい色彩を好むことなど。オーロラは揶揄するのが好きで、ジョルジュの性急なやや気取った話し振りを、面白そうに真似てみせた。そしてたがいに嘲りながら二人はうれしがっていた……。でもそれは嘲ちやう笑ようしょう だつたらうか、あるいは談話だつたらうか？ 二人は相手の欠点をクリストフに話すことさえあつた。するとクリストフはそれに反対を唱えないで、意地悪にも小さな矢の取次をした。二人はそれを気につけないふうをした。しかし実はどちらもひどく気にかけてることがわかつた。二人は自分の憤懣ふんまんを隠すことができないで、ことにジョルジュはそれで、つぎに出会ふとすぐに激しい小競合こせりあをやつた。しかし軽い傷しかつかなかつた。たがいに相手を害するのを恐れていた。そして攻撃してくるのはいかにも親愛な手だったので、相手に与える打撃よりも相手から受ける打撃のほうをうれしがつた。二人は物珍しげに観察し合つて、相手の欠点を捜しながらもその欠点に心ひかれていた。しかしそうだ

とは認めたらなかつた。どちらも、クリストフと二人きりになると相手を我慢のならない人物だと言ひ張つていた。それでもやはり、クリストフが二人を会わしてくれる機会をのがさずに利用していた。

ある日オーロラはクリストフのところに来ていて、つぎの日曜の午前にもた来ると言つていた。——そこへジョルジュが、例のとおり風のように飛び込んできて、つぎの日曜の午後に来るとクリストフに告げた。その日曜の午前中、クリストフはオーロラから無駄むだに待たされてた。ジョルジュが指定した時間になつて、彼女はようやくやって来ながら、もっと早く来るはずだったのを邪魔されたと詫わびた。かわいい口実をこしらえていた。クリストフは彼女の罪のない策略を面白がつて、彼女へ言つた。

「それは残念だった。ジョルジュに会えるところだったのに。ジョルジュが来て私たちはいつしよに昼飯を食べたよ。彼は午後まで残つてることができなかつたんだよ。」

オーロラはがっかりして、もうクリストフの言葉に耳を貸しもしなかつた。クリストフは上機嫌じょうきげんに話をした。彼女は氣のない返辞ばかりしていた。クリストフを恨めしく思いがちだった。そこへ呼鈴が鳴つた。それはジョルジュだった。オーロラはびっくりした。クリストフは笑いながら彼女をながめた。彼女は彼からからかわれたことを悟つた。笑つ

て顔を赤めた。彼は意地悪く指先で彼女を嚇かした。不意に彼女は情にかられて彼のところへ駆け寄って抱擁した。彼はその耳にイタリー語でささやいた。

「お茶目、曲者、お転婆……。」

すると彼女は彼を黙らせるために、彼の口へ手を押し当てた。

ジオルジュにはそれらの笑いや抱擁の訳が少しもわからなかった。彼の驚いたやや焦れつたげな様子に、二人はなお愉快になった。

かように、クリストフは二人の若者を接近させようとしていた。そしてそれに成功したときには、みずから自分を責めたい気になった。彼は二人を同じように愛していた。しかしジオルジュのほうをきびしく批判して、その弱点を知りつくしていた。そしてオーロラのほうを理想化していた。ジオルジュの幸福によりもいつそうオーロラの幸福に、責任をもつてると思っていた。なぜなら、ジオルジュはいくらか自分の息子であり自分自身であるような気がした。そして、潔白なオーロラにあまり潔白でない伴侶はんりよを与えるのは、自分の落度おちどではあるまいかと考えた。

しかしある日、彼は二人の若者が腰をおろしてる園亭えんていのそばを通りかかって——（それは二人の婚約後間もないときのことだった）——オーロラがジオルジュの過去の情事の

一つをひやかして尋ねてるのを、そしてジョルジュが自分から進んで話してきかしてるのを、悲しい気持ちで聞きとった。また彼は二人が少しも隠しだてをしない他の会話を聞きかじって、ジョルジュの「道徳」観念にたいしては自分よりもオーロラのほうがはるかに平然としてるのを、知ることができた。二人はたがいにとく好き合いながらも、永久に結び合わされたものだとは少しも思っていないらしかった。恋愛および結婚に関する問題については、二人は自由の精神をいいていた。その精神にも美しさがあるには違いなかつたが、しかし死に至るまでたがいにおのれをささげるといふ昔の流儀とは、まったく相いれないものであつた。そしてクリストフは多少憂いの気持ちでながめた……。二人はずでいかほど彼から遠くなつてたことだろう！ われわれの子孫を運びゆく舟はいかに早く進むことだろう！……でも気長く待つがよい。いつかはだれもみな同じ港で出会うだろう。

まずそれまで、舟は進路をほとんど念頭に置いていなかった。その日の風のまにまに漂つていた。——当時の風俗を変えようと試みてるその自由の精神は、思想や行動など他の領分のうちにも根をおろすのが自然だつたはずである。しかし少しもそうはなっていないかつた。人間の性質は矛盾などをあまり気にかけないものである。風俗がますます自由になると同時に、理知はますます自由を欠いていた。輓くびきをかけてくれと宗教に求めていた。そ

してこの相反した二つの気運は、実に非論理きわまることには、同じ魂の中に起こっている。社交界と知識階級との一部を風靡ふうびしかけてるカトリック教の新たな潮流に、ジョルジュとオーロラとはとらわれていた。もつとも面白いことには、生来非難好きであり、あたかも呼吸するのと同じくなんの気もなしに不信仰であり、神のことも悪魔のこともかつて気にしたことのないジョルジュは——すべてを嘲あざけるこのほんとうのゴールの青年は——突然に、真理はここにありと宣言しだしたのであった。彼には真理が一つ必要だった。そしてこのカトリック教的真理は、行動の要求や、フランス中流人の間かんげつ歇遺伝や、自由にたいする倦怠けんたいなどと、うまく調子が合ったのである。この若駒わかこまはかなり方々を彷徨ほうこうしたのだったが、今はひとりでもどつてきて、民族の犁すきにつながれようとしていた。数人の友の実例で十分だった。周囲の思想のわずかな気圧にも極度に敏感なジョルジュは、まっ先にかぶれた者のうちの一人だった。そしてオーロラは、どこへ行こうと同じような調子で彼のあとに従った。すぐに二人は自分自身に確信をいだいて、同じ考えをいだかない人々を軽蔑けいべつするようになった。おうなんとという皮肉ぞ！ グラチアとオリヴィエとは、その精神的純潔や真摯しんしや熱烈な努力などをもってしても、心から希ねがいながらかつて信者にはなれなかったのに、その軽佻けいちような二人の子供は、真面目まじめに信者となったのである。

クリストフはそういう魂の進化を珍しそうに観察した。エマニュエルは、この旧敵の復
 帰によって自分の自由理想主義をいらだたせられて、その敵を打ち倒そうとしたがって
 いたが、クリストフは少しもそんなことをしなかった。吹き起こつてる風と戦うものでは
 ない。吹き過ぎるのを待つだけのことである。人の理性は疲れていた。それは多大な努力を
 してきたのだつた。眠気に打ち負けていた。長い一日の仕事に疲れはてた子供のよう
 に、眠る前にまず祈禱きとうを唱えていた。夢想の扉とびらは開かれていた。諸宗教のあとにつづいて、接
 神論や神秘説や秘教や魔法などの息吹いぶきが西欧の頭脳を訪れていた。哲学も揺らめいて
 いた。ベルグソンやウイリアム・ジエームズなど思想の神も腰がぐらついていた。科学に
 までも理性の疲労の徴候が現われていた。しばしの過渡期である。彼らをして息をつかせ
 るがよい。明日になれば、人の精神はいつそう敏活になり自由になって眼を覚ますだろ
 う。よく働いたときには睡眠が薬である。ほとんど眠る隙ひまをもたなかったクリストフは、子供
 たちが自分に代わつて眠りを楽しみ、魂の休息や信念の安全や、おのれの夢にたいする
 揺ゆるがない絶対の信頼などをもつことを、子供たちのために喜んでいた。彼らと地位を代わ
 ることは、望みもしなかったしまたできもしなかった。けれども彼は、グラチアの憂鬱ゆううつ
 とオリヴィエの不安とは子供たちのうちに慰安を見出してるだろうと考え、これでよいの

だと考えていた。

——私や私の友人たちや、もつと以前に生きてた多くの人たちなど、われわれが、皆で苦しんできたところのものはすべて、この二人の子供を喜びに到達させんがためにであった……。この喜び、アントアネットよ、汝なんじこそはそれにふさわしかったが、それを受けることができなかった！……ああ不幸な人々が、犠牲にしたおのれの生活から他日出てくるその幸福を、前もつて味わうことができるならば！

どうして彼はその幸福に異議をもち出し得よう？ 人は他人が自分と同じ流儀で幸福ならんことを望んではいけない。彼ら自身の流儀で幸福ならんことを望まなければいけない。クリストフはジョルジュとオーロラとに向かつて、自分のように彼らと同じ信仰を分かちもつていない人々をあまりに軽蔑けいべつしてはいけないと、ただそれだけを穏やかに求めたばかりだった。

二人は彼と議論するの労をもとらなかつた。二人はこう思つてるようなふうだった。「この人にわかるものか……。」

彼らにとつては彼はすでに過去のものだった。そして彼らは過去を大して重要視してはいなかつた。あとになつてクリストフが「もういなくなつた」とときにはどうしようかと、

そんなことをなんの気もなしに内緒で話し合うことさえあった。——それでも彼らは彼を深く愛していた……。人の周囲に葛かざらのように伸び出してるひどい子供たち！ 人を押しやり追い払つてるその自然の力！……

——立ち去れ、立ち去つてしまえ！ そこを退どけ！ 俺おれの番だ！……
クリストフは彼らの無言の言葉を聞きとつて、こう言つてやりたかつた。

——そんなに急ぐものではない！ 私はここでいい気持だ。まだ私を生きてる者としてながめてくれたまえ。

彼は二人の無邪気な横柄さを興深く思つた。

「すぐに言つてごらん、」と彼はある日二人の軽蔑けいべつ的な様子にまいらされながら温良そうに言つた、「すぐに私に言つてごらん、老いぼれた馬鹿者だと。」

「いいえ、そんなこと。」とオーロラは心から笑いながら言つた。「あなたはいちばんりっぱな人よ。でもあなたが知らないことだつてあるわ。」

「そしてお前は何を知つてるんだい？ お前の豪えらい知識を見ようじゃないか。」

「私をからかっちゃいや。私は大して知つてやしないわ。でもあの人は、ジョルジュは、知つてよ。」

クリストフは微笑ほほえんだ。

「なるほど、そのとおりだ。愛する相手の者は、いつでも物を知ってるよ。」

彼にとつては、彼らの知的優越に承服することよりも、彼らの音楽を辛抱することのほうがいつそう難事だった。彼らは彼の忍耐力をひどく悩ました。彼らがやってくるピアノの音が絶えなかった。ちょうど小鳥にたいするように、恋愛は彼らの囁さえずりを眼覚めざめさしたらしかった。しかし彼らは小鳥ほど巧みにはなかなか歌えなかった。オーロラは自分の才能を買いかぶってはいなかった。しかし許いいなすけ婚いの男の才能にたいしてはそうではなかった。ジオルジュの演奏とクリストフの演奏との間になんらの差も認めなかった。おそらくジオルジュのひき方のほうを好んでたかもしれない。そしてジオルジュは、その皮肉な機敏さにもかかわらず、恋人の信念にかぶれがちだった。クリストフはそれに反対はしなかった。意地悪くも娘の意見に賛成した（が時にはたまらなくなって、少し強く扉とびらの音をさせながらその場を去ることもあった。）彼はジオルジュがトリスタンをピアノでひくの、情愛と憐あわれみとのこもった微笑を浮かべながら聞いた。人のよいこの青年は、トリスタンのたいへんな曲をひくのに、親切な感情に満ちてる若い娘に見るような愛すべきやさしさと、熱心な注意とをもってひいた。クリストフは一人で笑った。なぜ笑うかを彼に言

いたくなかった。そして彼を抱擁してやった。そのままの彼を愛していた。おそらくそのためになんか愛していたのだろう……。隣れなる子供よ！……。おう芸術も空なるかな！
……

彼は「自分の子供たち」——（彼は二人をそう呼んでいた）——のことをしばしばエマニエルと話した。ジョルジュを好きだったエマニエルは、よく冗談に言った、クリストフはジョルジュを自分に譲るべきだ、クリストフにはすでにオーロラがあるからと、そしてすべてを独占するのは公平でないと。

二人はあまり人中になかったけれど、二人の友情はパリーの社交界で語り伝えられていた。エマニエルはクリストフにたいする熱情にとらわれていた。彼は高慢心からそれをクリストフに示しながらなかった。粗暴な態度の下にそれを隠していた。時とするとクリストフを冷遇することさえあった。しかしクリストフはそれにだま瞞されはしなかった。その心が今ではいかに自分にささげつくされてるかを知っていたし、またその価値をもよく知っていた。彼らは一週に二、三度はかならず会った。身体が悪くて外出できないときには手紙を書いた。遠隔な地から書き合うような手紙だった。彼らは外面的事件によりもむ

しろ、学問や芸術における精神の進歩に多く興味をもった。彼らは自分の思想のうちに生きながら、自分の芸術について冥想めいそうしたり、あるいは渾沌こんとんたる事相の下に、人間の精神の歴史中に跡を印すべき、人の氣づかぬ小さな光を見分けたりした。

クリストフのほうがいっそう多くエマニユエルエマニユエルの家にやって来た。先ごろの病氣以来クリストフは、エマニユエルよりも丈夫とは言えなくなっていたけれど、二人はいつとはなしに、エマニユエルの健康のほうにいっそう氣を配るのが至当だと思うようになっていた。クリストフはもうエマニユエルの七階に上るのに骨が折れた。ようやく上りきると、息をつくためにしばらくの時間を要した。また二人はいずれ劣らぬ不養生家であることを、たがい知っていた。氣管支が悪かつたりとき息苦しさに襲われたりするにもかかわらず、ひどい喫煙家だった。クリストフが自分の家でよりもエマニユエルの家で会うのを好んだについては、そのことも理由の一つだった。というのはオーロラが彼の喫煙癖をひどくたしなめるからだだった。そして彼は彼女を憚はばかっていた。彼とエマニユエルとは、話の最中にひどく咳せき込むことがあった。すると彼らは余儀なく話をやめて、悪戯いたずらをした児童のように笑いながら顔を見合わせた。時とすると一方が、咳き込んでる相手に意見することもあった。しかし相手は息がつけるようになると、少しも煙草たばこのせいではないことを

頑^{がん}として言い逆らつた。

エマニュエルの机の上には、紙片の散らかつてゐる間の空いてゐる場所に、灰色の猫^{ねこ}が一匹寝そべつていた。そして二人の喫煙家を、小言でもいうように真面目^{まじめ}くきつてながめていた。この猫は二人の生きた良心だとクリストフは言つていた。その生きた良心を窒息させるためによく帽子をかぶせた。それはごくありふれた種類の虚弱な猫で、往来で打ち殺されかかつたのをエマニュエルが拾つてきたのだつた。いじめられて弱つた身体がいつまでも回復せず、ろくに物も食はず、ふざけることもあまりなく、物音一つたてなかつた。ごくおとなしくて、伶俐^{れいり}な眼で主人の様子を窺^{うかが}ひ、主人がそこにいないと寂しがり、主人のそばに机の上に寝るので満足し、いつもぼんやり考え込んでいて、時には幾時間もうつとりと、手の届かない小鳥が飛び回つてゐる籠^{かご}を見守り、ちよつと注意のしるしを見せられても丁寧に喉^{のど}を鳴らし、エマニュエルの気紛れな愛撫^{あいぶ}やクリストフのやや乱暴な愛撫に、長く身を任せて、引つかいたり噛^かみついたりしないようにいつも用心してゐた。ごく弱々しくて、片方の眼から涙を流し、小さな咳をしてゐた。もし口をきくことができるとしたら、二人の友人たちのように、「少しも煙草^{たばこ}のせいではない、」と厚顔にも言い張ることはしなかつたろう。しかし二人のすることはなんでも受け入れてゐた。ちようどこう考え

てるかのようにだった。

「彼らは人間だ、自分のしてることがわからないのだ。」

エマニユエルはこの猫をたいへんかわいがっていた。その病身な動物と自分との間に運命の類似があるように思っていた。似てると言えば眼の表情までも似てるとクリストフは言った。

「当然ですよ。」とエマニユエルは言った。

動物はその環境を反映する。その顔がんぽう貌は接近してる主人たちのおりに仕上げられる。愚昧ぐまいな者の飼つてる猫は、怜悯な者の飼つてる猫と同じ眼つきではない。家の中に飼われる動物は、ただに主人の仕込みによつてばかりではなく、主人の人柄によつて、善良にもなれば邪悪にもなり、磊落らいらくにもなれば陰険にもなり、機敏にもなれば遲鈍にもなる。また人間の影響ばかりではない。周囲のありさまも動物を同じ姿に変化させる。知的な景色は動物の眼を輝かせる。——エマニユエルの灰色の猫は、パリーの空に輝てらされてる息苦しい屋根裏と不具の主人とに、よく調和していた。

エマニユエルも人間らしくなっていた。初めてクリストフと知り合ったころとはもう同じではなかった。家庭的悲劇のために深く揺り動かされたのだった。彼といっしょになっ

てた女は、彼があるとき激^{げつこう}昂のあまり、その愛情の重荷にいかほど倦^うみ疲れてるかを、あまりはつきりと感じさせたので、突然姿を隠してしまった。彼は不安に慄^{おび}えながら夜通し彼女を捜した。そしてようやく、ある警官派出所に保護されるところを見つけ出した。彼女はセーヌ河に身を投げようとしたのだった。そして橋の欄干をまたぎ越そうとするさいに、通行人から着物の端をとらえられた。彼女は住所も名前も明かすことを拒んで、またも身を投げようとしたのだった。そういう苦悶^{くもん}を見るとエマニュエルは気がくじけた。他人から苦しめられたあとにこんどは自分が他人を苦しめるといふことは、考えても堪えがたいことだった。彼は絶望しきつてる彼女を家に連れもどし、自分が与えた傷口を包帯してやろうとつとめ、その氣むずかしい女にほしがってる愛情を保証してやろうとつとめた。そして自分の反抗心を押し黙らせ彼女のうるさい愛情に忍従し、自分の残余の生をそれにささげつくした。彼の天才の活気はことごとく心の中に潜み込んだ。行動の使徒とも言うべき彼は、よい行ないはただ一つしかないと信ずるようになった。すなわち、人を害しないということだった。彼の役割は済んでしまった。人類の大潮を湧^わきたたせる力は、単に行動を解放するための一つの道具として彼を使つたばかりらしかった。一度秩序ができ上がると、彼はもう何物でもなくなつた。行動は彼がいなくても引きつづいた。彼は行

動が引きつづいてるのをながめながら、自分一身に関する不公正にはおおよそ忍従したが、自分の信念に関する不公正にはどうしても忍従できなかつた。なぜなれば、彼は自由思想家であり、あらゆる宗教家から解放されると自称し、クリストフを変装した僧侶だと戯れに見なしていたけれど、それでもやはり、自分の奉仕してる夢想を神とする力強い精神の例にもれず、自分自身の祭壇をもっていたのである。そして今やその祭壇は空になつていた。エマニユエルはそれを苦しんだ。人があれほど苦心して勝利を得させようとしてきた神聖な観念、すぐれた人々がそのために一世紀間あれほど迫害されてきた神聖な観念、それが今新来の人々から足下に蹂躪されてるのを見ては、どうして悲しまずにおられよう！ フランス理想主義のみごとなる遺産——聖者や殉教者や英雄などを出した自由にたいする信念、人類にたいする愛、諸国民や諸民族の親和にたいする敬虔な翹望——それをこれらの青年らは何たる盲目な暴戾さをもつて冒瀆してることだろう！ われわれが征服したあの怪物を愛惜し、われわれが折りくじいたあの軛の下にまたみずからつながれ、暴力の世を大声に呼びもどし、憎悪をふたたび燃えたたせ、わがフランスの心中に戦争の狂気をふたたび起こさせるとは、なんとる狂乱した仕業だろう！

「それはフランスばかりではない、世界全体がそうなんだ。」とクリストフは笑うような

様子で言った。「スペインからシナに至るまで、同じ突風が吹き渡っている。その風を避けられる片隅かたすみもありはしない。ねえ、おかしなことになってきたじゃないか、あのスイスまでが国家主義になつてゐる。」

「それで気が安まるのですか？」

「安まるとも。これによつて見ると、そういう風潮は数人の滑稽こっけいな熱情から来たものではなくて、世界を統ぶる隠れた神から来たものらしい。そしてその神にたいしては、僕は頭を下げることを覚えたのだ。もし僕がその神を理解しないとしても、それは僕が悪いので、神が悪いのではない。神を理解しようとつとめたまえ。しかし君たちのうちだれか理解しようと心がけてる者があるか。君たちはただその日その日を送り、すぐつぎの限界より先には眼をつけず、その限界を道の終極だと想像している。自分たちを運び去る波だけを見ていて、海を見ていない。今日の波を湧わきたたしたのは、われわれの昨日の波だ。また今日の波は、明日の波の畝うねを掘るだろう。そして明日の波は、われわれの波が忘れられたと同じように、今日の波を忘れさしてしまうだろう。僕は現時の国家主義に賛成もしなければ恐れもしない。それは時とともに流れてゆく。もう過ぎ去りかけてる、過ぎ去つてしまつてる。それは階段の一つの段である。階段の頂まで登りたまえ。今の国家主義など

は、やがて来たらんとする軍隊の先駆者だ。その軍隊の笛や太鼓の鳴るのがもう聞こえてるじゃないか……。」

（クリストフは太鼓の音をまねて机をたたいた。そこにいた猫が眼を覚まして飛び上がった。）

「……現在では、各民衆はそれぞれ、自分のあらゆる力を寄せ集めてその貸借表を作り上げようとの、やむにやまれぬ欲求を感じている。なぜかと言えば、一世紀以来どの民衆もみな、相互の侵入によつて、あるいはまた、新しい道徳や科学や信仰をうち建て、世界のあらゆる知力のおびただしい持ち寄り財産によつて、すっかり変形させられたからだ。

それで各民衆は、他の民衆といつしよに新世紀へはいる前に、自分の本心の検査をしておかなければいけないし、自分はこういうものであり自分の財産はどれだけであるかを、正確に知っておかなければいけない。一つの新たな時代がやって来る。すると人類は、人生と新たな貸借契約を結ぶだろう。新たな法則に基づいて、社会は生き返るだろう。明日は日曜だ。各自に一週間の計算をし、自分の住居を洗い清め、自分の家を清潔にしようとして、それから、共通の神の前で他人といつしよになり、新たな同盟条約を神と締結するのだ。」

エマニユエルはクリストフをながめていた。その眼には過ぎ去ってゆく幻像が映じていた。クリストフが話し終えても、彼はしばらく黙っていた。それから言った。

「あなたは幸福だなあ！ 闇夜やみよを見てはいない。」

「僕は闇夜の中でも眼が見えるのだ。」とクリストフは言った。「闇夜の中でかなり暮らしてきた。僕は年とつた梟ふくろうなんだ。」

そのころ、クリストフの友人らは彼の様子にある変化が起こったことを認めた。彼はしばしば放心した者のようにぼんやりしていた。人の言葉をよく聞いてはいなかった。何かに気をとられたようなふうをして微笑ほほえんでいた。そのぼんやりしていることを人に注意されると、やさしく謝あやまるのだった。また時とすると自分のことを三人称で話した。

「クラフトがそれをしてあげよう……。」

あるいは……

「クリストフが笑うだろう……。」

彼をよく知らない人たちは言った。

「なんとという自己心酔だろう！」

でもそれはまったく反対だった。彼は自分をあたかも他人のように外部から見てるのだ。彼はちように、美^{うる}わしいもののためになす戦いにまでも興^きざめてしまう時期に達していた。人は自分の仕事を果たしてしまうと、こんどは他人がその仕事を完成してくれるだろうと思いたがるものであり、結局はロダンが言ったように、「常に美が最後の勝利を得るのである」と思いたがるものである。悪意も不正も、もうクリストフをいらだたせなかった。——彼は笑いながら、これは自然なことではないと言ったり、人生は自分のもとから去りつつあると言ったりした。

実際、彼はもはや以前のような元気をもたなかった。ちよつとした肉体上の努力にも、長く歩いたり早く馳^{はし}つたりしても、疲れてしまった。すぐに息切れがした。胸が痛んだ。ときどき老友シユルツのことを考えた。彼は自分の気分を他人に話さなかった。話しても無駄^{むだ}ではないか。ただ他人を心配させるばかりで、回復するというわけではない。そのうえ彼は、そういう不快な気分を真面目^{まじめ}に気にかけてはいなかった。病気になることよりも、用心するように強^しいらるることを、はるかに恐れていた。

あるひそかな予感によって、彼はも一度故郷を見たいという願いにとらえられた。それは一年一年と延ばしてきた計画だった。来年こそは……と考えてきた。そしてこんどはも

う延ばさなかつた。

彼はだれにも知らせずひそかに出発した。それは短い旅だった。クリストフは自分の求むるものをもう何一つ見出さなかつた。この前ちよつと来たときに萌きざしていた変化は、もう今ではすっかり完了していた。小さな町は大きな工業市となっていた。古い人家はなくなっていた。墓地もなくなっていた。ザビーネの畑地だったところには、製作所の高い煙筒が幾つも立っていた。クリストフが子供のころ遊んだ牧場は、河に蚕食されていた。不潔な大建築の間の街路に（なんたる街路ぞ！）彼の名がつけられていた。過去のものはすべて滅びていた、死までが。……それもよし！ 生は継続していた。彼の名で飾られてその街路の屋根裏で、おそらく他の小さなクリストフたちが、夢想し苦しみ奮闘していることだろう。——巨大な音楽堂で催されてる音楽会で、彼の作品の一つが、彼の思想とはまるで裏腹に演奏されてるのが聞こえた。彼はそれを自分の作だとは認めがたい気がした……。それもよし！ あの作は誤解されながらもおそらく新しい精力を刺激するだろう。われわれは種を蒔まいたのだ。それを諸君はどうにでもするがよい。われわれを自身の養いとするがよい。——クリストフは日暮れのころ、広い霧がたなびき始めてる郊外の野を散歩しながら、自分の生しょうがい涯がいを包み込まんとしてる大きな霧のことを考え、地上から消え

て自分の心の中に逃げ込んで愛する人々のことを考えた。そしてその人々も彼とともに、落ちてくる夜の間に包まれてしまふだろう……。それもよし、それもよし！ おう闇夜よ、太陽を孵化し出すものよ、われは汝を恐れぬ！ 一つの星が消え失せても、他の無数の星が輝き出す。沸騰してゐる牛乳の鉢のように、空間の深淵は光に満ちあふれている。汝はわれを消してしまふことができないだろう。死の息吹きはわが生をふたたび燃えさせたのである……。

ドイツから歸りに、クリストフは昔アンナと知り合いになつた町に寄つてみた。彼は彼女と別れて以来、彼女について少しも知るところがなかつた。彼女の消息を尋ねることもなしかねた。長い間、その名前だけでも彼をぞつとさした……。——今では、彼は落ちて着いていたし、もう何にも恐れなかつた。しかしその夕方、ライン河に臨んだ旅館の室で、翌日の祭典を告げる聞き馴れた鐘の音を聞くと、過去の面影がよみがえつてきた。河から彼のほうへ遠い危険の香が立ちのぼつてきた。彼にはそれがよくわからなかつた。夜通しその追憶にふけた。彼は恐るべき主宰者から解放されてゐるのを感じていた。そしてそれは彼にとつて悲しい喜びだつた。彼は翌日どうしようかと定めてはいなかつた。ブラウン家を訪問してみようかという考えが——（それほど過去は遠ざかつていた）——ちよつと

起こった。しかし翌日になるとその勇氣がなかった。医師とその細君とがまだ生きてるか
どうかを、旅館で尋ねてみることにさえしかなかった。彼は出発してしまおうと決心した……。

出発の間ぎわになつて、彼は不可抗な力に駆られて、昔アンナがよく行つてた寺院へは
いった。そして昔彼女が跪ひざまずきに来ていた腰掛の見える所に、柱の後ろに座を占めた。彼女
がもし生きてたらなおそこへやつて来るに違いないと思つて待ち受けた。

果たして一人の女がやつて来た。彼はそれに見覚えがなかった。彼女は他の女たちと同
じようだった。身体は肥満し、頬はふくらみ、頤あごは脂あぶらぶと肥りがし、無関心な冷酷な表情
をしていた。黒服をつけていた。自分の腰掛にすわつて身動きもしなかった。祈祷きとうして
ようにも祈祷を聞いてるようにも見えなかった。前方をじつとながめていた。その女のう
ちには、クリストフが期待してるようなものは何もなかった。ただ一、二度、膝ひざの上の長
衣の皺しわを伸ばすようなやや習癖めいた身振りをした。昔彼女はよくそういう身振りをして
いた……。出て行くときに、彼女は頭をまつすぐにし、書物をもつてる手を腹の上に組み
合わせて、ゆつくり彼のそばを通つた。彼女の薄暗い退屈げな眼の光は、ちよつとクリス
トフの眼の上になすえられた。しかしすがいに相手を見てとることができなかった。彼女は
まつすぐな硬こわばつた姿勢で、振り向きもせずに通り返ぎた。そして一瞬間後に、彼はちら

とひらめいた記憶の中で、昔自分が接吻せつぶんしたところのあるその口を、凍りついた微笑の下に、唇くちびるのある皺によつて、突然見てとつた……。彼は息がつけず膝が立たなかつた。彼は考えた。

「主よしゆ、私の愛した女が住んでいたのは、あの身体の中にあるのか。彼女はどこにいるのか。彼女はどこにいるのか。そして私自身も、私はどこにいるのか。彼女を愛した男はどこにいるのか。われわれから、またわれわれを食い荒らしたあの残忍な愛から、何が残っているか。——灰ばかりだ。火はどこにあるのか。」

彼の神は答えた。

「予のうちにある。」

そこで彼はまた眼をあけて、最後にも一度、戸口から日向ひなたへ出て行く彼女の姿を——人込みの中に——見てとつた。

彼はパリーにもどつてから間もなく、旧敵レヴィー・クールと和解することになった。

彼は邪悪な才能と悪意とを併用して、長い間クリストフを攻撃してきた。それから、成功の絶頂に達し、名誉に飽き、満腹し落ち着いたので、クリストフの優秀さを内々認めてや

る気になった。そして握手を求めてきた。クリストフは攻撃にも好意にも、何一つ気づかぬふうをした。レヴィー・クールは根気がつきた。二人は同じ町に住んでいて、しばしば出会うことがあった。でもたがいに知ってる様子をしなかつた。クリストフは通りすがりに、ちらと彼の上へ視線を投げながら、彼を眼にも止めないようなふうをした。相手を否定するその泰然たるやり方に、レヴィー・クールはいつも激昂げっこうした。

レヴィー・クールは二十歳未満の娘を一人もつていた。きれいで、すつきりして、優雅で、小羊のような横顔、房ふさふさ々と縮れた金髪、婀娜あだつぽいやさしい眼、ルイニ流の微笑をもつていた。二人はよくいつしよに散歩した。クリストフは彼らとリユクサンブルの園でしばしば行き会った。彼らはごく仲がいらしかつた。娘は父親の腕におとなしくよりかかっていた。クリストフはうっかりしてはいたけれど、やはりきれいな顔は眼についたので、その娘の顔に心がひかれた。彼はレヴィー・クールのことをこう考えた。

「仕合わせな畜生だ！」

しかしまた慢ほこらかに考え添えた。

「俺おれにも娘がいる。」

そして彼は両者を比較してみた。もとより依怙えこひい鬚い屑きによってオーロラのほうをすぐれて

ると思つたが、そういうふうにして比較してゐるうちに、たがいに知りもしない二人の娘の間に、架空の友情を頭の中で組み立てるようになり、それからまた自分では気づかなかつたが、レヴィー・クールに近づく気持になつていった。

ところがドイツからもどつてきて彼は、「小羊」が死んだことを知つた。彼の父親的利己心はすぐにこう考へた。

「もしこれが俺の娘だつたら！」

そして彼はレヴィー・クールにたいする深い憐愍れんぴんの念に駆られた。初めは手紙を書くうとした。二度も書きかけた。しかし満足がゆかなかつた。嫌いやな恥ぢずかしさを感じた。そして手紙は出さなかつた。しかし数日後、レヴィー・クールにまた出會つて、そのやつれた顔を見ると、辛抱ができなかつた。まっすぐに進み寄つていつて、両手を差し出した。レヴィー・クールのほうでも、なんら理屈なしにその手を握つた。クリストフは言つた。

「不幸だつたそうですね……」

その感動の様子はレヴィー・クールの心に沁しみ通つた。そして言い知れぬ感謝の念を覺えた……。二人は悲しい取り留めのない言葉をかわした。そのあとで別れたときには、二人を隔へていたものはもう何も残つていなかつた。二人はたがいに戦つてはきた。それは

もとより致し方ないことだった。人はそれぞれ自分の天性の掟おきてを果たすべきである。しかし悲喜劇の終わりが来るのを見るときには、仮面としていた熱情を脱ぎ去って、たがいに顔と顔とを見合わす——そしてたがいに大して優劣のない二人の者は、自分の役目をできるかぎりよく演じてきたあとに、握手をし合う権利をまさしくもっている。

ジョルジュとオーロラとの結婚は、春の初めに決定していた。クリストフの健康はずんずん衰えていった。彼は子供たちから不安な眼でながめられてることに気づいた。あるとき彼は二人が小声で話してるのを聞きとった。ジョルジュは言っていた。

「ほんとに顔色が悪い！ 今に病気になるかもしれない。」

オーロラは答えていた。

「そのために私たちの結婚が遅れるようなことにならなければよいけれど！」

彼はそれを当然のことと思つた。憐あわれな子供たちよ！ どうあつても彼らの幸福の邪魔となるものか！

しかし彼はずいぶん不注意だった。結婚の前々日——（彼はその数日間おかしなほどぞわぞわしていた。あたかも自分が結婚でもするようだった。）——ずいぶん馬鹿げたこと

をやつて、また昔からの病氣にかかつてしまった。宿痾しゆくあの肺炎が再発したのであつて、広場の市時代からかかり始めたものだった。彼は自分を馬鹿だとした。結婚が済むまでは倒れないぞと誓つた。死にかかつたグラチアが、音楽会の前日に、仕事や喜びから彼の氣を散らさせないようにと、自分の病氣を知らせなかつたことを彼は思い浮かべた。そして今や、彼女が自分にしてくれたとおりのことを彼女の娘に——彼女に——してやるという考えが、彼を微笑ほほえました。それで彼は病氣を隠した。終わりまでもち堪えるのは困難だったけれども、二人の子供の幸福を非常に喜んでいたので、長い宗教上の儀式をしつかりと堪えることができた。そしてコレットの家へもどるや否や、我にもなく力がつきてしまつた。ようやく一室に閉じこもるだけの余裕しかなかつた。そして氣を失つた。一人の下男が氣を失つてる彼を見つけた。クリストフは我に返つたが、その晩、旅に出る新婚の二人へは、それを知らせることを禁じた。二人は自分のことばかりに氣を奪われていて、他のことは何にも氣づかなかつた。二人は明日……明後日……手紙を上げると約束しながら、快活に彼と別れた。

二人が出発してしまうとすぐに、クリストフは床についた。熱が出てもう下がらなかつた。彼は一人きりだつた。エマニユエルも病氣で來ることができなかつた。クリストフは

医者を迎えなかつた。心配な容態だとは思つていなかつた。それに、医者を呼びにやる召使もいなかつた。毎朝二時間ずつやつて来る家政婦は、彼に同情を寄せていなかつた。そのうへ、彼はその世話をもなくしてしまふようなことをした。彼女が室を片付けるときには、紙類にさわらないようにと彼は幾度も頼んでおいた。彼女は強情だった。今や彼が枕から頭が上がらなくなつたので、自分の思いどおりにする時機が来たのだと考えた。彼は寢床から、戸棚の大鏡の中で、彼女がつぎの室で何もかもひっくり返してゐるのを見てとつた。彼はかつと怒つて——（たしかに彼のうちにも昔の気性は失せていなかつた）——蒲団の中から飛び出し、彼女の手から紙包みを引つたくり、彼女を追い出してしまつた。その憤怒のために、彼はかなりの熱の発作に襲われ、女中は立ち去つてしまつた。彼女は癩癩しやくを起こして、彼女のいわゆる「この氣違い爺じい」に一言の断わりもせず、二度と姿を見せなかつた。それで彼は病氣になりながらも、だれも世話してくれる者がいなかつた。彼は毎朝起き上がつては、戸口に置かれてゐる牛乳瓶を取りにゆき、二人の恋人たちの約束の手紙を、門番が扉の下に差し入れてやしないかを見にいった。手紙はなかなか来なかつた。彼らは幸福のあまり彼のことを忘れていた。でも彼らを恨みはしなかつた。自分が彼らの身になつたら同じようにするだろうと考えた。彼は彼らの夢中な喜びのことを考え、

それを彼らに与えてやったのは自分だと考えてみた。

彼は多少快方に向かつて床から起き始めた。そのときついにオーロラの手紙が来た。ジョルジュはそれに自分の名を書き添えるだけで満足していた。オーロラはクリストフの様子をあまり尋ねもせず、自分たちの消息をあまり伝えもしなかった。その代わりに、用件を一つ頼んできた。コレットの家に置き忘れてる首巻を送ってくれと言っていた。それは大したことではなかった——（オーロラは、クリストフに手紙を書いているさい、どういふことを書き送ろうかと考えたときにふとそれを思い浮かべたにすぎなかった。——けれどもクリストフは、何かの用をしてやるのがうれしくて、その品物を捜しに出かけていった。驟^{しゅう}雨^う模様の天気だった。ひどい冬の天候にちよつともどつていた。雪が解けて冷たい風が吹いていた。馬車が見当たらなかった。クリストフは発車場で待った。雇員らの不愛想さや故意にぐずついている態度などに、彼はいらだつてきたが、それで事がはかどるわけではなかった。そういう発作的な^{かん}疝^{しやく}癩^いは半ば病態のせいで、穏やかな精神はそれに^{くみ}与^よしてい^なか^つた。がその疝癩のために、彼の身体はひどく揺り動かされた。あたかも倒れんとする^{かし}櫛^しの木^のが^{おの}の^きを^する^よう^なもの^だつた。彼は凍えきつてもどつてきた。通りがかりに門番の女が、雑誌の切り抜きを彼に渡した。彼はそれをちよつ

とのぞいてみた。意地悪い記事で、彼にたいする攻撃だった。今では彼はめつたに攻撃を受けていなかった。打撃に気を止めない者を攻撃しても面白いものではない。もっともいきりたつてる人々さえ、彼をきらいながらも、心に添わない一種の尊敬をいだかせられるようになっていた。

ビスマルクは遺憾げに白状している。「恋愛ほど意のままにならぬものはないと思われるが、尊敬はなおはるかに意のままにならぬものだ……。」

しかしこの記事の筆者は、ビスマルクよりもいっそう頑強がんきょうで、尊敬や恋愛にとらわれない強い人物の一人だった。彼はクリストフのことを迫害的な言葉で述べて、半月後の次号で攻撃の続きを発表すると言っていた。クリストフは笑い出して、床につきながら言った。

「此奴こいつは当てがはずれるだろう。そのとき俺がもう自分の住家にはいないことを知るだろう。」

彼は看護婦を雇って看病してもらおうようにと勧められた。けれどそれを頑固に拒んだ。自分はもうかなり一人きりで暮らしてきたし、こういうときには孤独のほうがかえってありがたい、と言っていた。

彼は退屈しなかった。この数年間彼は、自分自身とたえず対語をしてきた。あたかも彼の魂は二つあるかのようだった。そして数か月以来、内部の人数はたいへん増していた。もう二つの魂ばかりではなくて、十余りの魂が彼のうちに住んでいた。それらはたがいに話をしていたし、またたいいは歌っていた。彼はその談話に加わったり、あるいは黙ってその歌を聴いていた。寝台の上やテーブルの上など手の届くところに、いつも五線紙を置いていて、自分や魂たちなどの応答を面白がつて、その話を書きしるしていた。それは機械的な習慣だった。考えることと書くこととの二つの行為は、ほとんど同時に行なわれるようになっていた。彼にとっては、書くことは、明白に考えることだった。その魂の仲間から彼を引き離す事柄はみな、彼を疲らせいらだたせた。時によると彼がもつとも愛している友人たちでさえそうだった。彼はその様子を彼らに示すまいとつとめた。しかしその拘束は彼をひどく困憊こんぱいさせた。そのあとで自分自己をまた見出すとたいへんうれしかった。というのは、彼は自分自身を見失ったからである。人間の饒舌じょうぜつのなかでは、自分の内部の声を聞きとることはできなかつた。崇高なる沈黙なるかなである……。

彼はただ門番の女かあるいはその子供のだれかが、日に二、三度用をしにくるのを許したばかりだった。手紙も彼らに出してもらった。彼は最後の日までエマニュエルと手紙の

往復をつづけた。二人はほとんど同じくらいひどく病んでいた。そして自分の命に空望みからをかけてはいなかった。クリストフの宗教的な自由な天才と、エマニュエルの無宗教的な自由な天才とは、異なつた道を通つて、同じ親和的な晴朗の域に達していた。二人はしだいに読みにくくなる震えた手跡で、自分たちの病氣のことをではなく、常に話題としていた事柄について、自分たちの観念の未来や自分たちの芸術などについて、話をし合つた。そして最後にある日、クリストフはもうきかなくなり始めてる手で、戦死しかけたスウエーデン王の言葉を書いた。

——予はこれにて足れり、兄弟よ、汝みずからを救えよ！

彼は自分の生しょうがい涯がいの全体を一連の階かいてい梯ていとして見渡した……。自己を所有せんがため、青春の広大なる努力、単に生きるの権利を他人より獲得せんがため、己おのが民族の悪鬼よりおのれを獲得せんがための、熱烈なる闘争。勝利のあとにもなお、戦利品を勝利そのものから保護するために、間断なく監視するの義務。孤独なる心に人類の大家庭を奮つて開いてくれる友情の、愉悦やまたは艱難かんなん。芸術の豊満。生の絶頂。征服したる己が精神

の上に傲然と君臨する。おのれの運命の支配者たるを感じる。そして突然、黙示録の騎士らに、喪や受難や恥や、主の前衛などに、道の曲がり角にて出会う。馬蹄に蹴倒され踏みじられながらも、雲霧の中に浄化の荒い火が燃えている山嶺まで、血まみれになつてたどりゆく。神と相面して立つ。ヤコブが天使と戦うように、神と戦う。打ち拉がれて戦いより出る。おのれの敗北を賛美し、おのれの範囲を了解し、主より指定された領分において、主の意志を果たさんと努力する。かくして、耕作と播種と収穫とを終え、辛いまた美しい労働を終えたとき、日に照らされた連山の麓に憩うの権利を得て、その山々に向かつて言う。

「汝らに祝福あれかし！ 予は汝らの光明を味わい得ないであろう。しかし汝らの影は予には快い……。」

そのとき、愛しき彼女が彼に現われたのだった。彼女は彼の手を取ってくれた。そして死は彼女の身体の垣を破りながら、彼女の魂を、友の魂のうちに流し込んだ。彼らはいつしよに月日の影の外に出でて、多幸なる山嶺へ到達した。そこには、三人の美の女神のごとく、気高きロンドをなして、過去と現在と未来とが手をつなぎ合っていた。そこでは、和らいだ心は、悲しみと喜びとが生まれ花咲き消え失せるのを、一度にながめやった。そ

こでは、すべてが調和であった……。

彼はあまり気が急いでいた。すでに終局に達したものと思っていた。しかも彼のあえぐ胸をしめつける万力まんりきは、彼の焼けるような頭にぶつかる種々の面影の騒々しい錯乱は、もつとも困難な最後の行程がなお残っていることを、彼に思い出さした……。前進せんかな！……

彼は自分の病床にじつと釘付けくぎになっていた。上の階では一人の馬鹿な女が、幾時間もピアノをかき鳴らしていた。彼女はただ一つの楽曲きり知らなかった。同じ楽句を飽くことなく繰り返していた。彼女にはそれがたいへん楽しみだった。それらの楽句は彼女に、あらゆる色彩の喜びと情緒とを与えた。クリストフにも彼女の幸福はわかった。しかし彼は泣きたいほどそれに悩まされた。少なくともそんなに強くピアノをたたいてさえくねなかつたら！ 騒音は彼にとつては悪徳にも劣らず嫌いやなものだった……。が彼もついにはあきらめた。耳に入れまいとするのは辛いことだった。けれども思つたほどむずかしいことではなかつた。彼は肉体から遠ざかりかけていた。病みほうけた粗末なその肉体……。その中にかくも多年の間こもつてきたことは、なんと不名誉なことだろう！ 彼は肉体が磨ま滅めつしてゆくのをながめて、こう考えた。

「もう長くはもつまい。」

彼は自分の人間的利己心の脈をみるためにみずから尋ねた。

「お前はどちらを望むか、クリストフの記憶や一身や名前などが永続してその作品が滅びることをか、あるいは、その作品が存続してその一身と名前とが跡方もなく滅びることをか？」

彼は躊躇せずちゆうちよに答えた。

「俺が滅びて俺の作品が存続することだ！われそれが俺には一挙両得なのだ。なぜなれば、もつともほんとうのものだけが、唯一のほんとうのものだけが、俺から残ることになるのだから。クリストフは死滅するがよい！」

しかししばらくたつと、彼は自分自身にたいすると同様に自分の作品にたいしても無關心になったのを感じた。自分の芸術の存続を信ずることの幼稚なる幻よ！彼は自分の作ったものがいかに僅少きんしょうであるかをはつきり見てとったばかりでなく、近代音楽全体をねらつてる破壊の力をもはつきり見てとった。他のいかなるものよりもいつそう早く音楽上の言葉は燃えつきる。一、二世紀もたてば、それはもはや数人の専門家によってしか理解されない。モンテヴェルディやリユリーなど、現在だれにとって生きてるか。古典音楽

の森の檜かしの木もすでに苔こけに食かわれてる。われわれの熱情が歌ってるわれわれの音楽の建築も、やがては空虚な殿堂となつて忘却のうちに崩壊するだろう……。そしてクリストフは、そういう廢墟はいきよをながめやつてうち驚き、またそれに少しも心を乱されないので驚いた。

「俺は生を前ほど愛さなくなつたのだろうか？」と彼はびっくりしてみずから怪しんだ。

しかし彼は自分がいつそう深く生を愛しててることをすぐに悟つた……。芸術の廢墟に涙をそそげというのか？ 否廢墟はそれにも価値しない。芸術は自然の上に投げつけられた人間の影である。芸術と人とは太陽にのみ込まれて共に消え失せるがいい！ それらは太陽を見ることを妨げるのだ……。自然の広大なる宝はわれわれの指の間から漏れ落ちる。人間の才知は水をとらえようとしても、水は網の目から流れ出る。われわれの音楽は幻影である。われわれの音楽の階段は、音階は、こしらえ物である。それは生ける音楽のいずれにも一致しない。それは実際の音響の間になされた精神の妥協であり、無限の動きにたいするメートル法の適用である。人の精神は不可解なるものを理解せんがために、そういう虚偽を必要とした。その虚偽を信じたかったので信じてしまった。しかしそれは真実のものではない。それは生きてるものではない。そして、人の精神が自分の手でこしらえ上げたその秩序によつて感ずる享樂は、実在せるものにたいする直接の直覺をゆがめなければ

得られなかった。ただときどきある天才が、大地としばし接触しては、芸術の領域からあふれてる現実の急流に突然気づく。堤防は張り裂ける。自然は割れ目からはいつてくる。しかしすぐに穴はふさがれる。人間の理性を保全するためにそれが必要である。人間の理性はもしエホバと眼を見合わしたら滅びてしまうであろう。かくて理性はふたたびおのれの独房をセメントで固め始める。そこへは理性がこしらえたもののほかは何も外部からはいつて来ない。そしてそれはおそらく、見ることを欲しない者にとつては美わしいであろう……。しかし予は、エホバよ、汝の顔を見んことを欲する。たとい撃滅されようとも、汝の雷のごとき声を聞かんことを欲する。芸術の声音では窮屈である。人の精神よ黙れ！

人間に沈黙あれ！……

しかしそういうりつぱな口をきいてから数分たつと、彼は蒲団ふとんの上に散らかつてる紙を一枚手探りに捜して、それになお多少の譜を書きつけようとした。そして自分の矛盾に気がついたとき、彼は微笑ほほえんで言った。

「おう私の古い伴はんりよ侶よ、私の音楽よ、お前は私よりも善良である。私は恩知らずにもお前を追い払おうとした。しかしお前はけつして私を離れない。私の気紛れにも気を落とさない。許しておくれ、お前も知つてるとおりあれは冗談だ。私はかつてお前を裏切つたこ

とがないし、お前はかつて私を裏切ったことがないし、私たちはたがいに信じ合っている。ねえ、いっしょに旅だとう。最後まで私といっしょにいておくれ。」

とどまれよわれらのそばに……

彼は熱と夢とで重々しい長い喪心の状態から覚めた。覚めたあとまでもまだ残ってる不思議な夢だった。そして、今彼は、自分の身を顧み、自分の身体にさわり、自分自身を捜し求め、もう自分で自分がわからなかった。あたかも「も一人の者」になったかのような気がした。自分自身よりいっそう親愛なも一人の者……それはいつたいたれたかのような……夢のなかでその者が自分のうちに化身けしんしたかのようなだった。それはオリヴィエか、グラチアか？……彼の心も頭も非常に弱っていた。彼はもう自分の愛する人たちの間の見分けもつかなかった。見分けてどうしよう？ 彼は彼らを皆一様に愛していた。

圧倒してくる一種の法悦のうちに、彼はじつと縛られたようになっていた。身を動かしなくなかった。あたかも猫ねこが鼠ねずみをねらいすますように、苦痛が待ち伏せて窺うかがつてることを、知っていた。彼は死人のようにしていた。すでもう……。室の中にはだれもいなかった。

頭の上のピアノの音もやんでいた。静寂……沈黙……。クリストフは溜め息をついた。

「生涯の終わりに及んで、かつて孤独なことがなかったと、もつとも一人ぼっちのときにも孤独ではなかったと、みずから考えるのはなんといいことだろう！……私が生涯の途上で出会った魂たちよ、一時私に手をかしてくれた同胞たちよ、私の思想から咲き出した神秘的な精神たちよ、死者や生者よ——否すべて生者たちよ——おう、私が愛したすべてのものよ、私が創造したすべてのものよ！ 君たちは温かい抱擁で私を取り巻いてくれ、私を見守っていてくれる。私には君たちの声の音楽が聞こえる。私へ君たちを授けてくれた運命に祝福あれ！ 私は富んでいる、ほんとに富んでいる……。私の心は満たされている！……」

彼は窓をながめた……。陽のかけつた美しい日だった。老バルザックが言ったように、盲目の美人に似てる日の一つだった……。クリストフは窓の前に差し出てる木の枝を、熱い心でじつと見入った。その枝はむくむくと太っていて、しっとりした若芽が萌え出し、白い小さな花が咲き出していた。そしてそれらの花の中には、それらの若葉の中には、よみがえったその生存の中には、復活の力に恍惚と身を任せてるさまが見えていたので、クリストフはもはや、自分の息苦しさも死にかかつてる惨めな身体もすべて感じなくなっ

Obi.
2 3

Violins
or
Viola
3 4

Handwritten musical score for Oboe and Violins/Viola. The Oboe part (top staff) features a melodic line with a prominent note marked with a large 'F' and a fermata. The Violins/Viola part (bottom staff) consists of a rhythmic accompaniment with a repeating eighth-note pattern. The score is divided into four measures by vertical bar lines. A final measure on the right contains a fermata over the Oboe staff and a large '7' below the Violins/Viola staff.

て、その樹木の枝のうちに生き返った。その生命のやさしい輝きが彼を浸した。それは一つの接吻せつぶんに等しかった。あまりに愛に満ちてる彼の心は、彼の臨終のうちに微笑ほほえんでるその美しい樹木に、自分自身を与えてやった。そして彼は、この瞬間にもたがいに愛し合つてる無数の者がいること、自分にとつては臨終の苦悶くもんの時間も、他の人たちにとつては恍惚こうごつの時間であること、常にかくのとおりであること、生の力強い喜びはけっして尽きないこと、などを考え浮かべた。彼は息をつまらせながら、もう思うままにならない声で——（おそらく彼の喉のどからはなんらの声音も出なかつたらうが、彼はそれに気づかなかつた）——生にたいする賛歌を歌った。

眼に見えない管弦楽団が彼の歌に答えた。彼は考えた。

「どうして彼らはあるなことを知ってるのだらう？　練習をしたこともないのに。間違えずに最後までやってくれればいいが！」

彼は両腕を振り動かして拍子を取りながら、管弦楽団の全員に見えるようにと、身を起こしてすわろうとした。でも管弦楽団は間違いをしなかつた。自分たちの腕前を確信していた。なんとという靈妙な音楽だらう！　今や彼らは照応の曲を即興演奏しはじめていた。クリストフは面白くなつてきた。

「ちよつと待て、面白い奴らだ。俺がみごとにとらえてやる。」

そして彼は水棹さおでぐつと一突きして、舟を気ままに右や左へあやつりながら危険な水路の中へはいつていった。

「どうしてこんな所を乗り越せるのか？……またそんな所を？……そらとらえたぞ！……
 他にもやそんな所へ？」

彼らはいつもうまく乗り越していった。彼の大胆さに対抗して、さらにいつそう危険な冒険をした。

「何をしでかすことやらわからぬ。狡猾こうかつな奴らめ！……」

クリストフは喝かつさい采さいの声をあげまた大笑いをした。

「畜生！ あとについてゆくのがむずかしくなってきたぞ！ 俺のほうに負かされるかしら……。おい冗談じゃないぞ！ 今日俺は疲れてるんだ……。なに構うものか。君らが最後の勝利を占めるとはきまつてやしない……。」

しかしその管弦楽団はいかにも豊麗ないかにも新しい幻想曲ファンタジアを演奏しだったので、ぼんやり口を開いて聞いているよりほかにもうしかたがなかつた。聞いていると息がつまるほどだった……。クリストフは自分を憐あわれんだ。

「馬鹿め！」と彼は自分に言った、「貴様は空っぽになったのか。黙つちまえ！ できるだけの音を出してしまった楽器め。もうこの身体にはたくさんだ。俺にはもつと別な身体が必要だ。」

しかし身体は彼に意趣返しをした。ひどい咳せきの発作が起こって彼の聴くのを妨げた。

「黙らないか！」

彼は敵をでも取り拉ひしごうとするかのように、自分の喉首をとらえ、拳固げんこで自分の胸を打ちたたいた。そして争闘のまん中にいる自分を見出した。大勢の人が怒号していた。一人の男が彼の胴体につかみかかってきた。二人はいつしよにころがった。相手は彼の上ののしかかった。彼は息がつかまってきた。

「放してくれ、俺は聴きたいのだ！……俺は聴きたいのだ！……放さなけりや殺すぞ！」
彼は相手の頭を壁にたたきつけてやった。それでも相手は放さなかった……。

「いったい俺が今相手にしてるのは何者だろう？ 俺は何者と組み打ちをしてるのか？ 俺が引つつかんでるこの身体は、俺を焼きつくすこの身体は、どういうものなのか？……」

それは幻覚的な格闘だった。あらゆる情熱の混乱だった。激怒、淫逸いんいつ、殺害の渴望、肉の抱擁の噛み合い、最後にも一度かきたてられた池の泥土でいどだった……。

「ああ、早くおしまいにならないのか。俺の肉体にくっついてる蛭ひるども、貴様らを取り除けることが俺にできないことがあるものか……。肉体よ、蛭といっしょに剥はげ落ちてしまえ！」

クリストフは肩や腰や膝ひざに力をこめて、眼に見えない敵を追い払った……。彼は自由となった！……。彼方かなたには、音楽がやはり演奏されながら遠ざかっていった。クリストフは汗まみれになって、そのほうへ両腕を差し出した。

「待つてくれ、俺を待つてくれ！」

彼はその音楽へ追いつこうとして駆け出した。つまずきよろめいた。あらゆるものを押しつけていった……。あまり早く駆けたので、もう息がつけなかった。心臓が高鳴り、血の音が耳に響いていた。隧道トンネルの中を走る汽車のようだった……。

「ああ、忌々しい！」

彼は自分を待たずに演奏しつづけてくれるなど、管弦楽団へ必死となって合図をした……。ついに隧道トンネルから出た……。沈黙がもどってきた。ふたたび音楽が聞こえてきた。

「いい、実にいい！ もっとやれ！ 思い切つてやれ！……だがいったいだれの曲なんだ？……なんだつて、その音楽はジャン・クリストフ・クラフトのどつて？ どうしたこと

だ！ 馬鹿を言うな！ 俺はあの男を多少知ってる。あの男はそんなものを、少しもかつて書いたはずはない……。まだ咳せきをしているのはだれだ？ そんなに音をたてるな！ その和音はなんというんだ？ そしてこんどのは？……そんなに早く進むな！ 待ってくれ！……」

クリストフは呂律ろれつの回らぬ叫び声をたてていた。その手は毛布を握りしめながら、そこに物を書くような格好をしていた。そして疲れきった彼の頭脳は、それらの和音がどういう成分でできてるかを、またどういう意味を告げるかを、機械的に詮索せんさくしつづけていた。しかしどうしても捜し出すことができなかった。感激のあまりとらえる手先に力がはいらなかつた。彼はまたやり始めた……。ああこんどは、あまりに……。

「やめてくれ、やめてくれ、もう俺にはどうにもできない……。」

彼の意志はまったくゆるんでしまった。静かに彼は眼をふさいだ。幸福の涙が閉じた眼ま瞼ぶたから流れた。そばについてる小娘が、慎つつましくその涙を拭ふいてくれたが、彼はそれに気づかなかつた。彼はこの下界に起こつてることをもう何にも感じなかつた。管絃楽は沈黙なぞしてしまつて、眩暈めまいを起こさせるほどの諧調かいちようの上に彼を取り残した。その諧調なぞの謎は解けていなかつた。彼の頭脳はなお強情に繰り返した。

「いったいこの和音は何物だろう？ どうしたらこれから抜け出せるだろうか。どうあつても出口を見出したいものだ、おしまいにならない前に……。」

こんどは人声が起こつてきた。情熱のこもつたある声。アンナの悲痛な眼……。しかし瞬間に、それはもうアンナではなかつた。温情に満ちてるあの眼……。

「グラチア、お前なのか？……だれだい、だれだい？ 私はもうよく見てとれない……。どうして太陽はこういつまでも出ないんだろう？」

静かな三つの鐘が鳴つた。窓ぎわの雀すずめたちがさえずつて、昼食の屑くずをもらうべき時間を彼に思い出させようとした……。クリストフは自分の子供のころの室を夢に見た……。鐘が鳴る。夜明けだ！ 美しい音の波は軽やかな空気の中を流れてくる。それはごく遠くから、彼方かなたの村々からやつてくる……。河の響きが家の後ろに起こつて……。クリストフは階段の窓口に肱ひじをついてる自分の姿を思い浮かべた。彼の全生しょうがい涯はライン河のように眼の下に流れていた。全生涯、いろいろな生活、ルイザ、ゴットフリート、オリヴィエ、ザビーネ……。

「母よ、恋人たちよ、友人たちよ……彼らはどういう名前だったかしら？……愛よ、君はどこにいるのか。私の魂たちよ、どこにいるのか。私は君たちがそこにいることを知つて

いるが、君たちをとらえることができない。」

「私たちはあなたといっしょにいます。愛いとしい人よ、安らかに！」

「私はもう君たちを失いたくない。私はどんなに君たちを捜したろう！」

「心配してはいけません。私たちはもうあなたのもとを離れはしません。」

「ああ、私は流れにさらわれてゆく。」

「あなたを運んでゆく河は、私たちをもあなたといっしょに運んでいるのです。」

「どこへ行くのだろうか？」

「私たちが皆いっしょに集まる場所へ行くのです。」

「じきに行きつくかしら？」

「御覧なさい。」

そしてクリストフは、必死の努力をして頭をもたげ——（ああなんと重いことだったか
！）——漫々たる大河を見た。それは野を覆おおいながら、ほとんど不動なほどおもむろおごそかに流れていた。水平線のほとりに、鋼鉄の光に似たものがあつて、日光に震えてる一筋の銀波が彼のほうへ駆けてくるかと思われた。大洋のとどろき……。彼の心は消え入りながらも尋ねた。

「あれが彼か？」

愛する人たちの声が答えた。

「あれが彼です。」

一方では、死にかかつてる頭脳が考えた。

「扉とびらが開ける……。私が捜していた和音はここにある……。しかしこれが終局ではないのだな。なんとという新たな広さだろう……。われわれは明日も存続するだろう。」

おう喜悦、一生の間努めて奉仕してきた神の崇厳な平和のうちに没し去るの喜悦！……

「主しゅよ、汝しもべの僕しもべにたいしてあまりに不満を感じたもうな。わがなせしところははなはだわずかであった。されどわれはそれ以上をなし得なかつた……。われは戦い、苦しみ、さ迷い、創造した。われをして汝のやさしき腕の中に息をつかせたまえ。他日われは新たなる戦いのためによみがえるであろう。」

そして大河の響きと海のとどろきとは、彼といつしよに歌った。

「汝はよみがえるであろう。休息するがよい。すべてはもはやただ一つの心にすぎない。からみ合つた昼と夜との微笑ほほえみ。愛と憎悪との厳おごそかな結合、その諧かい調ちよう。二つの強き翼たをもてる神を、われは歌うであろう。生を讃たたえんかな！ 死を讃たたえんかな！」

いかなる日もクリストフの顔をながめよ、
その日汝は悪しき死を死せざるべし。

聖クリストフは河を渡った。夜通し彼は流れに逆らって進んだ。強壯な四肢をもつて彼の身体は、巖のごとく水の上に浮き出している。その左の肩には、か弱い重い小児がのつている。聖クリストフは引き抜いてきた松の木に身をささええる。その木は撓む。彼の背骨も撓む。彼が出発するのを見た人々は、けつして向こうに着けはしなうと言った。そして長い間彼の後ろから、嘲りと笑いとを浴びせた。やがて夜となつて、彼らは飽き果てた。もうクリストフは、岸に居残つてゐる人々の叫び声が届かないほど、遠くに來ている。急流の響きのうちに、小児の静かな声が聞こえるばかりである。小児はその小さな拳に、巨人クリストフの額の縮れ毛を一房つかんで、「進め！」と繰り返している。——彼は背をかがめ、眼を前方の薄暗い岸に定めて、進んでゆく。向こう岸の懸崖は白み始める。

突然、御告の祈の鐘が鳴る。そして多くの鐘の群れが、一時に躍りたつて眼覚める。

今や新たな曙！ そびえ立つた黒い断崖の彼方から、眼に見えぬ太陽が金色の空にの

ぼってくる。クリストフは倒れかかりながらも、ついに向こう岸に着く。そして彼は小児に言う。

「さあ着いたぞ！ お前は実に重かった。子供よ、いったいお前は何者だ？」
すると小児は言う。

「私は生まれかかっている一日です。」

——了——

青空文庫情報

底本：「ジャン・クリストフ（四）」岩波文庫、岩波書店

1986（昭和61）年9月16日改版第1刷発行

入力：tatsuki

校正：伊藤時也

2008年1月27日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

ジャン・クリストフ

JEAN-CHRISTOPHE

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 第十巻 新しき日

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>